
青春ゲーム

水姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春ゲーム

【Zマーク】

Z0670B

【作者名】

水姫

【あらすじ】

「ゴーリングマイウェイな舞のライバルは、ドS魔王な青海。その他ヒロイン溺愛美少女や、ヘタレ貴公子、赤髪ヤンキーなど。しかも担任は美形反面教師？個性的なキャラが繰り広げる青春コメディ

第1回戦 嫌敵手（前書き）

「メテイー連載始めちゃいました！！ヒロインの学園生活を書いていきたいです。時々恋愛とかシリアルス入るかもしれません。でも基本ギャグ一直線 アホヒロインですが、末長くよろしくお願ひしますm（――）m

第1回戦 嫌敵手

ライバルを好敵手って言うの、認めない。だって私はアイツの事大嫌い！

嫌敵手と書いて、ライバルと読みたい！！

第1話 犬と猿、竜と虎、私とアイツ

「舞、何点？」

『.....』

「...うわ、24点」

『かつ、勝手に見るな！』

哀れみたつぷりの目で、私を見るコイツの名は、【高梨 青海】（おうみ）。ただでさえ仲悪いというのに、今回隣の席になってしまったクラスメイト。

そして今は、期末テスト（数学）の配布中.....。

「英語も俺のほうが高かったし、今回も俺の勝ちだな」

『う、うるさい！数学は苦手なの！まだ私の得意な、社会と国語があるつ！』

「俺の得意な理科もあるしな」

『うがあーーー！』

……見ての通り、私達は超ウルトラハイテクスーパー・ハードヘビーライフだ。事あるごとに、勝負・喧嘩が絶えず、周りを巻き込む事もしばしば。

ついでに今までの戦績は、199戦中15勝48敗136引き分け。敗北はほとんど勉強ですます……。

いいもんね、人間頭だけじゃないもの。

「罰ゲームなにがいいかな」

『うぐつ……』

実は200戦目という事で、負けたほうは、勝ったほうの言つ事を聞く、などという特典つきなのだ。

何故、勉強苦手な私がこれを受けたかといふと、ロイツの口車に乗せられたから。

『ほんの腹黒め……』

「は？俺は見た目から中身までキレイだらが」

このナルシストめー！！

何が何でも認めたくないけど、この高梨 青海は美形だ。しかも自覚あり（マジ死ねだし）。

「今日で全部返つてくれるのか…。」いや、早めに罰考えとかなきやだな

『何勝つた氣でいるんだテメー！』

「浅野をさうるをこ」

数学インテリメガネ教師に一刀両断された。周りから『クスクス』とこう笑い声があがる。オイ、今笑つたやつ後で後悔させてやる。つていうか、コイツはマジで計算高い。毎回、授業中小声で私をおちよくなつて、私がそれに大声でリアクションとり、私『だけ』が怒られるのだ。

ならば、無視すればいいものの、性格上怒鳴つてしまつ。これはもう、どうしようもないので、諦めてる。
……うん。諦めるよ?そりゃもうスッパリと。キッパリと。サッパリと。でもさ、私だけ怒られるつてどうよ?

だいたいなんでこんなやつがモテるんだ?顔か?顔さえよければ全てよしなのか!?チクショ一面食いめ!
あつ、違うか。多重人格のせいか。営業スマイルのせいか。先生の前では優等生、他クラスの前では好青年のせいか。
だから怒られないのか、だからモテるのかノーヤローー!(クラスメイト・担任には性格バレてるけど)

恨めしげに隣を睨む。バチツッと目があつと、ヤツはニヤリと笑い
(殺人鬼面じやん)、

「怒られやんの」

舌を出して、馬鹿にしたよひこ(つてかしてるな)小声で言つた。

『テメーのせいだろオオオオオー!』

「浅野さん出てけ」

これって不平等じゃね？神様一発殴らせて。

第1回戦 嫌敵手（後書き）

キャラクターファイル

・ 浅野舞
あさのまい

年齢：14歳

身長：154cm

体重：38kg

長所：超人的な運動神経

短所：ミジンコ並な頭脳

座右の銘：明日は明日の風が吹く

この物語のヒロイン。誰がなんと言おうとヒロイン。

第2回戦 期末テスト

第2話 腹黒 + 策士 + 美形 = 嫌なヤツ

『いい? セー ので 言つべき。裏切るなよ?』

「へいへい

『よ、よし。じゃあセーの!』

『216点!』 「472」

……負けたあーーー!

え、いや勝てるとは思ってなかつたけど、何この点差! ? 150以上じやんつーかなりショックなんだけどー!

「まあ、予想通りだな」

『予想通り! ? これを予想通りとー?』

失礼だなコイツッ。どれだけ自意識過剰! ? 何様なんだーー!

「オレ様？」

『ウザア！つてか人の心読むな！…』

「天才なんで」

涼しい顔で言う青海。その美形顔、殴つてやろうつか？

「そんなことよつ……」

『そんなこと…?』

ヒヅイな泣くぞ。泣き叫ぶぞ。

「罰ゲーム、忘れてないだろ？」「

ニヤリ、と方だけ口の端をあげる。明らかに微笑むつて感じじゃない。

つてか、コイツの微笑み見たことあるつけ？黒い笑顔しか向けられたことねーや。

いやそれは置いといて、とにかく焦るぞ。コイツサドだから、絶対とんでもない事言つてくる。

よし、しらばっくれよつッ！

『な、なんの』『

言こさる前に、青海は携帯を取り出し、つきつけた。

『ピ、じゃあ、負けたほう罰ゲームな？ 罰ゲームつて？ 勝つたほうの言つ事さく。いやよ、そんなの…逃げるの？ 誰が逃げるかあーー受けたつーー。ピュー』

「……な？」

そう言って、青海は携帯をポケットにしまった。

恐えええええええええ—！！！

ボイスレコーダー！？いつの間に録つたんだよー。」ここまで計算して
るつて、FBIかテーマは！？ってか携帯恐いな、マジ恐いよ。た
だの携帯できる電話と、侮つてたぜ！

『わ、わかつたよ。何をすればいいの？』

あつさり折れるわたし。プライドなんかくそくらえ

「そうだな…、高層マンション上から下までピンポンダッシュ制覇・グランド裸逆立ちで150周・担任の机荒らし・校長の銅像にキス」

「どれがいい？」

いや、どれがいいって……

『無理無理無理！－もう罰ゲームの次元じゃないからソレー。』

「無理じゃない。舞ならできる」

『できないから！アンタ私をなんだと思ってんの！？高層マンショ
ン何階あると思つてんの！？裸で150周つて…逆立ちじゃなくて
もキツイわ！担任つて翔か？翔先生の事か？翔兄の机なんかとんで
もない物出てきそう見たいけど怖い！校長の銅像にキスなんて、死
んでもしたくないつつーに！！』

「良々とシシ」「ハハ」苦勞様～

ちょ、マジムカつく！人が息切れする程頑張ったのに。小指思いつ
きり踏むぞゴラア！あれめつちや痛いんだからな、泣きそうになる
んだからな！

「まあ、それは『冗談として…』

『その上『冗談！？』』

「罰ゲームの内容、決めた」

いや、そんな極上の笑顔で言われても、キモいから。何か企んでる
事山の『』としじゃない。

「なんか言った？」

『何でもありません青海様！』

ああー恐い恐い。そうだった。コイツは、人の心を読む人間離れし
たヤツなんだ。

『あ、あの、それで結局罰ゲームは……？』

『ん？ああ。それは』

『それは……？』

あたしは「ゴクリ、と唾を飲みこむ。うわ、冷や汗かいてきた。

「一週間俺の奴隸」

田の前のコイツは、それはもう、これ以上ない程の笑みを浮かべて
言いましたとさ。

浅野
舞、
14歳。
人生最大のピンチ到来です！

第2回戦 期末テスト（後書き）

キャラクターファイル

・
高梨青海

年齢：14歳

身長：172cm

体重：57kg

特技：ポーカーフェイス

コンプレックス：なし

座右の銘：完全無欠

さわやか王子。ただし中身は腹黒ドS魔王。

第3回戦 主従関係

第3話 加虐性淫乱症 or 被虐性淫乱症？

当然の様に差し出された鞄。

「はい」

『はい？』

意味も分からず疑問符を出せば、鬱陶しい程浴びせられる黒面。

「はい？じゃねえよ。持てって意味だアホ」

『なんであたしが……！』

「奴隸だからだろ？」

『うつ……』

そう、あの日以来私は、コイツのパシリとなっていた。毎朝、青海の家まで迎えに行って、鞄持ちは当然、ジュース買ってこいじまで言うのだ。

学校にいる時も、無茶な命令をしてくる。反抗するたびに、あのボイスレコーダーを出すし。携帯恐怖症になるぞ。そのうち拒否反応とか、出すからな。

とかなんか考へてる内に、学校に到着。ああ、また過酷な一日が始まる……。

機嫌良好な青海に比べ、 気分最悪な私。

いや、 だつて、 ねえ？

「何ため息ついてんだよ」

『え、 ため息ついてた？ ああ——やつぱ体は正直だ——』

「黙れ奴隸」

……拳で殴るぞクソガキ。

「舞ツ！……」

『ん？』

聞き覚えのある声に振り向けば、 温もりが覆い被さった。

「昨日ぶつ～！会えなくて寂しかったよーー！」

『る、 流華…。 苦しいツス』

背の高い流華は、 小柄な私を簡単に、 ギュッと抱き締める。 いや
あ、 照れちゃうね

「あ、 ごめんごめん。 舞が可愛くてつい」

私は流華に溺愛されます（キヤツvv）。 流華は私の親友で、 何
かと面倒みてくれる。 時々過保護すぎることもあるけど…。

「相変わらず熱愛してるな。 田のやつばに困る」

軽蔑する様な口調で、 淡々と言ひ放つ青海。

その言葉を聞いた途端、流華の瞳が、ギラッ！と光った。あーあ、スイッチ入っちゃった。

「……高梨青海。アンタ、一体誰の許しを得て、私の舞をパシリにしてるの？」

「パシリじゃない。奴隸だ」

あくまで奴隸にこだわるんだ。どこまでサドなんだか……。

「奴隸ですって！？な、なんて言い様…。私が見張ってる限りでは、鞄持ち・ジューース買い・宿題・掃除・係の仕事……これらをやらせてるわね！一体どうゆうつもり！？」

「見張ってるつて……ストーカーかよ」

「ストーカーじゃない！親衛隊よ！！」

……流華、そんな事してたの？

「……ハア、こんな朝からケンカなんてゴメンだ。遅刻したくないしな。行くぜ、舞」

『え、わっ……』

突然手を引つ張られ、教室のほうへと走る青海。

つていうか、手ーー！手、手、手ーー！

何普通に握っちゃてるのオオオオオ！？

「ちよ、舞に気安く触るなー！」

後ろから駆けてくる流華。ホントだよね。何コイツ気安く触つてるの？奴隸じゃなかつたら、振り払つて蹴り飛ばしてるのに！

期限がすりぬまで、あと3日です。ガンバレ私！！

第3回戦 主従関係（後書き）

キャラクターファイル

・葉月流華

年齢：14歳

身長：165cm

体重：40kg

好きな人：舞

嫌いな人：高梨青海

願望：舞の恋人

才色兼備。男より女の子が好き。舞を溺愛してゐる。

第4回戦 嫉妬と独占

第4話 魄い戦い、強制参加

みなさんコンニチハ。心のアイドル浅野舞です。只今他クラスの女子に囲まれてます。

え？ なんでかつて？ こっちが聞きてえつづーの。

「なんの用かわかるでしょ？」

いやいやいや、分かんねえよ。生憎私は人なんで、アンタ等の思考は読めません。

ドンツ！！

そんな音がしたと思ったたら、私の顔の隣に腕が……。背中には壁、前には般若面した女子（コイツがリーダー？）。つまり、壁と般若、じゃない、般若面した女子に板挟み状態。

「じりばつくれる気？」

ベタだなオイ。ドラマ見すぎじゃない？ あ、もしかしてこれ自体ド

『マジ? カメラ何処何処? カメラ田線しなぎやvv

「アンタ聞いてんの?」

「聾えて声も出ないんじゃない?」

「キヤハハハハ! 自業自得じゅーん!」

うわ、マジでデラマっぽくね? カメラ何処よ。

「謝れば許してもいいけど?」

だからカメラ! カメラ! !

「ちょっと、なんとか言つたら...」

『カメラさん、ここでアップ! —! —! —!』

ド、「オオ!」

……あ、やつちやつた。

「い、痛あああああーーーー!」

そりゃ痛いだろ? ね。思いきり平手打ちくらわしたから。わ、周
りからすごい殺氣が...。ってか、コイツ等何人いるの?

『あー、そう睨まないで般若さん。悪気があつたんじゃないよ。な
んて言うか、ドラマでドッキリ、カメラ田線でベタじゃない? みた
いな?』

「誰が般若よ！しかも言つてる事意味不明だし…！」

『あー、つるさいりんさい。んで、なんの用？そんな頬真っ赤に腫らして。』

「アンタにぶたれたのよー何なかつた事にしちゃつてるのー…？」

「椿ちゃん、話進まない」

途中で仲介に入った般若22号（仮名）により、やつと話し合ってなつた。そして、般若の号（椿ちゃんだつナ～）が発した言葉。

「青海くんと付き合つてゐるの？」

……は？

何言つてんの「イツ。また殴られたいのか？そんなに殴られるのが好きなのか？つていうか

『んな訳あるかーーー！』

そりやもひ、力の限り叫んだ。

「じゃあ、なんでここ最近一緒に登校してるのー？アンタが青海くんに付きまとつてるんじゃないのー？」

『いや逆だから！アイツにパシられてるんだよ私！…』

「嗚呼、可哀想な青海くん。優しいから、嫌と言えないんだわ」

とか、ハンカチ田に押さえながら、ふざけた事ぬかしやがった。その上周りの女子まで泣きはじめたんだけど。

まったく、見た目に惑わせられて…不憫な娘たち。アイツが裏でご主人様プレイしてる事も知らずに…。

あ、言つとくけど私マゾじやないからね？そのへん誤解しないでよ？

『で、用つてそれだけ？じゃあ私帰るわ。』

たくさんの女子が不気味な事咳きながら泣く光景に飽き、早々に去
りうとした時、

「まだ話は終わってないわよ」

般若の号に腕掴まれた。

「单刀直入に言つわ。もう青海くんに近寄らないで」

最初からそういう言えよ。っていうか

『だから逆つつつてんだろ！！人の話聞けやあーー！』

「馬鹿言わないでよ！自意識過剰じやない？」

『仕方ないだろ馬鹿なんだから！え、いや違う。間違えた、今の無
しね。……誰が馬鹿だああ！失礼な事言つなー。』

「だつて数学24点だつたんでしょ？」

え、なんで知つてるの？

「廊下に貼り出されてたわよ。1時間だけだけど。ぼよじ主人様つ
て書いてた様な。」

……青海の腹のなか見てみたい。きっと全ての臓器が真っ黒だ。

まあ、その後はなんやかんやで鎮圧させた。軽く説明すると、

3分の2は、ひたすら謝罪の言葉を涙と一緒に流してたわ。残りは気絶してたね。まあ、私の点数を知つて無事でいられる訳ないんだよ。

つていうか、もしかして今日の全部、青海せい?よし、罰ゲーム終わったらミイラにさせる。

結局丸々潰された放課後。帰り道に、偶然青海と会つて
「奴隸が一人で何処ほつつき歩いてたんだよ」とか言われたから、
とりあえず50mくらい蹴り飛ばした。その内ギネスに挑戦しよ。

あ、ヤベ。まだ奴隸だったのにご主人様蹴っちゃったよ。まあ下剋上つて事で。

第5回戦 強者と弱者

第5話 平穏へのカウントダウン

『バカ、そこ違つ』
『え、あ、本当だ』
「なんで答え見てるのに間違えるんだよ」
『いや、スイマセン』

……アレ？ 私何やってるんだ？ なんでこんな事なってるんだ？ あ、
そうだ。思い出した。

30分前

『痛ああああああああ！！なんで会った瞬間蹴るのオ！？』

一 咲田の仕返し

『だからってレディに暴力ふるなー!』

『文選』

教室に入った途端、蹴りいれられました

え？ なんで教室かつて？ 今日は先に行つてるって言われたからよ～。
だから今日は流華と一緒に登校しました！ いやあ、最高だね

「何にやけてるんだよ、気持ち悪い！」

『なんだとオ！…』

あー、かなりムカつく！ なんで人が嫌がる事を、変化球でクリーン
ヒットさせてくかな！？
つてか、クリーンって何！？ ヒットは分かるけど、クリーンって…
…、何？ 掃除？ 意味わかんねえよチクシヨー。

「おはよう、青海、舞ちゃん」

『あら、おはよう、青海の親友で顔良し・頭良し・運動良し、必ず
Aランクには入る貴公子タイプモテ男の、藤森 幸希くん』

「なんで説明口調？」

それはもちろん、作者が簡単に説明したいと思つ
ン！ あ、今の咳は風邪のせいだからね？ 邪推すんなよ。

「それはそうと、朝から仲良いね。」

……え？

それはもしかしなくとも、あたし等の事か？

「ああ？ 何言つてんだテメー。今すぐ硫酸浴びろ」

「それ死ねつて言つてる？」

『なんて事言うのよ青海！ せめて青酸カリ飲めにしなよ…』

「どこがせめて？ 舞ちゃん、フオローになつてないから

「ああ？ 何言つてんだテメー。今すぐ硫酸浴びろ」

いや、でもなんなんだよ。あの般若達も、幸希も。お前等の田は節穴か？ガラス玉か？ダイヤモンドなのかー！？

「お前馬鹿だろ」

『はん！今頃馬鹿なんて言われたって、へでもないねつ！』

「馬鹿バカ馬鹿バカ馬鹿バカ」

『え、ちょ、そんなに言わなくて……グスン』

ヤベ、涙ってきた。

ん？いや違う！泣いてなんて無いぞ！…これは涙じゃなくてアレだ。
アレだから。

「やう言えば青海。今日ワーク提出だよ」

「あ～、ヤベ。国語やつてねえや。でも、どつせ翔だからなあ

「オイオイ、オール5狙つてるんでしょ？」

「別に狙つてる訳じやねえよ。なつちまうだけだ」

(なんだつて?)

『テメHエHエHエー！今聞き捨てならない事言つたぞー！チクショー、
そんなセリフ言つてみてえ！…それと翔先生をバカにするなあー！』

「あれ、もう泣きやんだのか」

『ばー泣いてないし…』

いや、ホント泣いてないからね？舞様は最強だから涙なんか流さないからね？せつきのはアレだからね？

「そんなこと…」……

「そんなこと…？」乙女が泣いてたのに…え、いや泣いてないよ。うん。だから泣いてないから…！」

「酔ゲーム明日までだったよな？」

『それがどうしたコノヤロー』

「んじや、や命令。俺のワークやつて。つてつかせられ

上から三線で書つ青海。オレ様め。

『ぬあー…ムカつく…幸希からもなんか書つてやつて…』

『頑張れ舞ちゃん』

いやいや応援なんていらなーからー。

「今日中止終わります」

『…明後日覚えてろよ』

「明後日は休みだ」

『チクシヨー…』

「これって誰を一番恨むべき…」

第5回戦 強者と弱者（後書き）

キャラクターファイル

・藤森幸希
ふじもりゆき

年齢：14歳

身長：170cm

体重：54kg

悩み：親友のサディズム

不満：周りからの扱い

主義：平和愛好

微笑みの貴公子。常識人でツッコミ担当。苦労人。

第6回戦 解放から報復へ

第6話 レッツ！リベンジ

呪縛はとうとう解けた。

ここにちは、浅野舞です 今日は土曜日なので、学校はお休みなんですね そして、今日でとうとう地獄の一週間の終わりです……！

『高梨青海！殺！呪！死！墮！今までの仕打ち、そつくりそのまま……の1億倍返ししてやらあ！！わたしゃ、逃げも隠れもしない！正面から正々堂々殴り飛ばす！

『…………なーんて、嘘！生憎そんな良い娘じゃないんだよ！陰から数々の嫌がらせをしてあげるわ…………！あひやひやひやひや！—私への愚行、後悔するといきやあああ…………！』

ヒット 気分良く（？）歌つて いる舞様の顔に、プー の靴がクリティカル・

「長いセリフ言つてんじゃねえよ。読者が読むのめんどいだら」

そう言って、その男は私に当てた靴を拾いあげた。

この声は……！

『出たな、魔王の遣い！一体どれだけ私達を傷つければ気がすむんだ！……って、[冗談です]めんなさいー何靴がまえてるのー？早く履いてー！』

あ、履いた履いた。でも顔、大丈夫かな？漫画みたいに靴のあとついてないよな？って、んな事どうでもいい！

『高梨青海、ここで会ったが100年ぶり！今こそ恨み晴らしてやるー』

「はあ？なんの恨みがあるんだよ」

『バカ野郎！お前に受けた屈辱の事だあ！鞄持たされたり、屋上の鍵パクられたり、校長室の金庫のパスワード調べさせられたり、コンビニでアイスを温めて下さー、と言わされたりと、まだまだあるだろチクショーーー！』

これマジだからね。しかも私ちゃんとやつたんだよ？偉くね？征夷大將軍並に偉くね？

『あんたの奴隸になつてから、食事も喉を通らない日々……』

『お前給食のデザート、人のぶん取つてただろ』

『もううん夜も眠れないし……うう』

『そりや、授業中あれだけ寝ればな』

『その上、あなたの信者、といつより私には般若に見えますよ、には凹られるし……ぐすつ』

「え？」

「……」

はつーそう言えばこの事言つてないじゃん！……まあ、もう私には近

付かないと思'うナビ。

なんか精神科通ってる娘がこるつて話も聞いたし。そんなコトリカ
マになつたのかな?

「…やられたの、か?」

『えつ、』

ちゅつ、この人超真に受けりやつたんだナビ。なんか真剣な表情し
てるし。あ、でもこれいい機会じやね?

『さうなの…。おやに多勢に無勢で、さすがの私も駄目だつた……』
「マジかよ

うわ、わたし演技上手くね? 田つるんできたし。
つてか、こんなしゆらしこ青海初めてなんだナビ。よし、このまま
ペース持つてつけて、土下座をやつ。謝りやつ。靴磨きやつ(皿
主規制)。

「…そつか。俺のせいで……」

うつ向く青海。

ブブーー騙されてやつのーべべ、おもじるやがなんなんだナビ。マジつ
ける。

「…なんでこじめやつるんだ?」

あ、ちゅつ、つこ表情に出ちやつた。

だつて……アブツー駄目だ舞ーここで笑つたら負けだー!

『え、だつて…、青海が心配してくれるから、嬉しくつて

かゆ———！！！

うわ、自分で言つててキモー・マジ有り得ないしー・吐き気までしてきたんだけど。

「舞」

ପ୍ରକାଶ

(は？なにこの状況。いや、ぎゅってアンタ……)

「ごめん、俺のせいで辛い思いをさせて」
『え？』

何コレ、本当にコイツ青海？別人じゃん！クローンじゃん！ドッペルゲンガーじゃああああああん！？

「舞、俺」

青海がなにか言いかけた時……

「あたしの舞に何しとるんじゃあああああああーー！」

正義のヒーロー流華登場。

どうなる次回へ。つい期待

第7回戦 オチはつせもの

前回までのあらすじ

青海に復讐しようとして、歌つてた舞に靴がクリティカル・ヒットそして、かくかくじかじかで流華見参。

第7話 ラブコメ ラブコメ ラブコメ ラブコメ? ラブコメ-?

「あたしの舞を抱きしめるなんて2200000000000000000年早くてよー?」

『……流華、助けてくれたのは嬉しいけど、青海動かないッス(汗)

』

「あら? これ」ときで死ぬなんて… 所詮この程度ね

「… いきなり現れて、みぞおちは無いだろ

『あつ、生きてた』

「俺は硫酸浴びねえ限り死ない

『アンタ何者っ.』

馬鹿な事言にながら、服の汚れを落として青海は立ち上がった。
オイオイ、なんで無傷なんだよ、つまらんな。顔にひとつくらい傷つけろや。

立ち上がった青海は、ぐるりと振りかえり

「それで、結局なにしたかったんだ?」

と、問いかけた。

『復讐』

それにケロリと私は答える。

なんだよその、うわ~、みたいな顔。ひっぱたくぞコノヤロー。ー。

「止めとけ復讐なんて。俺更に仕返しするから

『だつたら私はまた復讐する』

「仕返しの仕返しつて…馬鹿みたいな悪循環だな

『アンタ、三文字熟語使つてんじゃねえよ。頭良くみえるとか思つてんのか?だいたい【あん塾会】とかいやらしいんだよーー.』

「テメエがいやらしいんだ。一文字もあっちゃいなー。』

「国語は得意なんだけどな。まあドンマイつて事で、イヒイ！ポジティブシンキング 舞ちゃん最高！」

『つて、痛ア！なんで今殴ったのオ！？』

「……なんか殺意が芽生えて。」めん

『あら、素直に謝るとは珍しい…ひとつ私は従順する気になつたのか？』

「舞」ときには殺意芽生えるなんて、来世までの恥だよな

『セレモニーハハハハハ…？』

アレ？なんかおかしくね？だつてせつまで私、抱きしめられてたんだよ？すごいよ流華、アンタの登場でギャグモードに戻つたよ。

『普通の女の子に戻ります！』つて言つて、結局また歌つてるアイドルへの感情だコレ。

「ちよつと一人で私を無視しないでよ！」

流華が間に入り立つ。

「やついえば、なんでお前もここにいるんだ？えーと、…なんだつけ名前？」

「名前くらい覚えろオオーあ、待て。だつたら、私もお前なんか知らないー忘れてやる！」

「なら、お互い様じやん。一見落着」

……確かに。

「へんなやつー。誰だろ? と、舞をいじめる奴は抹殺! ! ! 」

流華（キュンニン）

「うわ、出たよレズ」

「ビトンを馬鹿にするなあ! 」

否定しないんだ! ?

いや、なんかもひの雰囲気は

ドンッ! !

わたしは横にあつた塀を、思っきり叩いた。あ、ヤベ。ひび入った
かも。

『さつきからグチャグチャグチャグチャうるさいなあ……』

シーンと、一気に静まる。

『ほんたな言い争い無駄だつて分かんないのー? 』

「「…………」」

二人はしばらく私の顔を見た後、無言で背を向けた。

『あ、ちょっと！すいません！！言いだしつづけ私でした…ちょっと、何処行くのオ！？や、流華まで置いてかないでよーーー！』

ツツコミ、不在（泣）

『結局、置いてかれただ……』

つーか、私最初の目的忘れてない？めぐるめぐる復讐劇は？

『抱きしめられた意味も分かんなかつたし。…………ん？』

携帯のバイブが鳴った。この感覚はメールだ（なんで分かるんだよ）

『なんだろ？』

day・月×日（土）

from・青海

sub・奴隸へ

ボコられたって言つてたけど、お前無傷だから謝らなくていいよな
？俺がどれだけモテるか分かつただろ？

P・S からかって抱きしめたけど、お前本気にしてた？真っ赤な
顔りんごみたいで爆笑ものだった（笑）

『チクシヨオオオオオーーー!』

携帯を地面に叩きつけた。（バキッて音がした。）

第7回戦 オチはつねおの（後輩）

…いや、だつてこれ『メモリー』だし。恋愛要素もぶつ壊すつていうか？

あ、ちよつー石投げないでー嘘ですスマセンーほー、これは『ラブコメ』ですーードキドキハラハラですーではやめなうシッ（逃走）

第8回戦 僕等の日常事情

こんにちは、藤森 幸希です。えっと、本編では2話ぶり……？正直7話あたり出ると思つてました。だって僕だけ除け者じゃないか。

まあ、いいや。今日は月曜日、朝来たら学校のガラスが割れましてた。

後輩は騒いでたけど、僕等には珍しくないから『あ～あ、またやったのか』『ぐらりいです。やっぱ新1年生は可愛いね。ま、その内慣れるんだろうけど』

あ、犯人はなんとなく分かります。多分みんな同じ人を思い浮かべてるだろ? それは99・9999%の確率で合つてると思つ。

ほら、声が聞こえてきた。

第8話 波乱万丈といつ名の平和

『だからあらあーー私じゃないってばーー!』

「いい加減認めろ。証言者がたくさんいるんだ」

『チツ』

「今打うちした? 打うちしたよね?」

あ～あ、先生に怒られてる。舞ちゃんも憲りないな。

『先生、証言者って誰ですか? 教えてvv』

「面倒くさいことになるから無理」

『酷いです先生! まるで私がその子に飛び蹴りしたり、無言電話したり、ストーカーしたり、ネットで悪い噂流したり、好きな子をバラしたりetc……そんな事すると思つてるんですか? ! ?』

「セレジまでする気だつたのかよ! ! ?」

『ヤベツー』

「ヤベツーじゃねえー! ! ?」

う～ん、教師に敬いの気持ちのだね舞ちゃんは、セレジが人気者の理由のひとつなんだろ? けび。

「へへ、お前じや話にならないー! 担任は確か……げつ、翔先生かよ

翔先生、げつ、とか言われてるよ。

『翔先生はいつも遅刻ギリギリに来るので、まだ来ませーん』

「残念でしたー。もう来ます〜」

(ーーーJの人気配なかつたんだけーー)

『あ、翔兄』

「お前みたいな妹いた覚えはない。先生と呼べよ」

はい、皆さん。自称27歳のやる気の美形教師の登場です。でもこの人、どう見たって20くらいなんだけど……。実年齢いくつなんだか。

「なに舞？またガラスわったわけ？」

「そりですよ！これで何回目だと思つてるんですか？翔先生からもガツンと言つて下さい！！」

「ガツン。……冗談ですよ。そんな青筋たてなくとも

火に油。この人本当に教師なのか？なんか近所のかつこいい兄ちゃんつて感じじゃん。

まあ親近感わいていいけどね。

「浅野、翔先生…真面目に聞け……」

あ、そうとうキレイてる。朝から災難だな荒井先生。この人短気だからなあ。

まあ、舞ちゃんと翔先生の「コンビ」にキレるなつて方が、無茶なんだ
うつね。

「まあまあ、荒井先生。舞だつて育ち盛りなんだから、ガラスの2
枚や3枚、10枚や20枚わりますよ。」

「どんな成長期！？ 多すきだらつ！！！」

『翔兄、かばつてくれるの？ 大好きvv』

うわ、生徒が教師に抱きついてるよ。舞ちゃん熱愛してるね～。

「そりゃどうも。まあ、俺はお前の事嫌いだけどな

……玉碎？

『いやん、照れないで』

いや、効いてないか。

『翔兄、1時間田国語だよ。もつすべ始まる』

「マジかよ。かつたりいな～。仕方ない、行くか

『教室までテートしょー』

「はいはい」

「え、ちよ、まだ話終わってなあああああああい……」

「こんな感じで一日が始まります。あつと、僕も遅刻したくないからそろそろ行かなきゃ。

その後も、ドア壊れたり、壁に穴空いたり、気絶する子がいたり、藁人形が落ちてたり……。僕等のクラスはとても賑やかです。今日も平和な日常でした。

僕はこれから部活です。サッカー部の次期キャプテンなので休めません。青海に呼ばれてるから行きますね。

以上、藤森 幸希でした。

そう言えば、何で舞ちゃんガラスわったのかな?まあ、大方青海絡みだらうけど。

第8回戦 僕等の日常事情（後書き）

キャラクターファイル

・
高橋 翔
たかはし しょう

年齢：自称27歳

身長：180cm

体重：65kg

職業：反面教師

モットー：鳴かぬならそれでいいじゃんホトトギス

嫌いなもの：面倒事

D組の担任。常にテンションが低い。面倒くさがり。

第9回戦 男一瞬ダチ一生

第9話 スパイこつこ

『一ひから浅野舞。ターゲット不審な動きなし。ビツゼ』

「どうも、舞です！只今私は、悪友と共にある人を尾行しています。あ、その悪友っていうのは

『一ひから、北林 鈴。同じく異常なし。ビツゼ！』

……はい。北林鈴サマです！クラスメイトで、よく気が合つんだよ。ピアスに赤髪のヤンキーくんだけね

え？ ところで誰を尾行してるかって？

それは私のダーリン（妄想）で、謎多き男

【高橋 翔】さ…！

『フフフ、今日こそ翔兄の実態を暴いてやる…ビツゼ…』

「人の秘密握るって快感だな どうぞ…」

やつぱり私等、相性抜群VV

「藤森、舞と北林は何してるの? オモチャのトランシーバーなんか持つて…」

「ミッション“高橋翔を暴け”。スペイしてるらしいよ」

「高橋を? 憂いわね、私は恐くて真似出来ないわ」

「チャレンジャーなんだよ一人とも」

「……でも、あんな至近距離でトランシーバー使わなくとも」

「バカなんだよ二人とも」

(二)やかに辛口?

藤森幸希・別名微笑みの貴公子

尾行し始めて、早20分。

なんだよ翔兄、私という存在が居ながら色々な生徒に話かけられてモテモテだなチクショー。

『なんだか翔兄の前に出て行きたくなりました。ビッグ』

「それじゃスパイにならないからー・ビッグ』

だつて、だつて、翔兄腕絡まれても抱きつかれても叩かれても抵抗しないんだもんっ！あ、叩いた子にはやり返した。

『ああ、もう我慢できませんー・ビッグ』

トランシーバーを握りしめて言つたたし。ミシ、って鳴つたけど、私には聞こえない聞こえない。

「早まるな舞ー・ビッグ』

必死に止める鈴。そう、あたし達には使命がある。でも、私は、私は！

『翔兄が大好……ゴフウーー…』

痛あああああああい！なんか顎にめっちゃ衝撃があー！

私は思いきり、蹴り飛ばされた。壁にぶつかり、10Mくらいで止まる。やだガンッ！つていったんだけど！

ヤベーよ、舞ちゃんの脳の住人が大怪我だよ。しかもなんか周りから煙出てるし！？

「オイ危ねえなあ。何やつてんだよ」

出たよ我が宿敵！

『青海！アンタ今わざとだう！？』

「自意識過剰も程々にしろ。偶然だ偶然」

『どこの世界に偶然顎を蹴り飛ばす奴がいるんだーー！？』

「じゃあ、奇跡だ奇跡」

無表情で言ひ青海。腹立ちや一〇倍なんだけど！？

「舞つ！何があつた！？応答しろッ！」

はつー鈴からだ！でも、私はもう…………。

『鈴、私はもうダメだ。無念だけど、後はアンタ一人で……。どうぞ』

「一体何があつたんだ！？どづぞー！」

ああ鈴、アンタは本当にいい奴だな…………。

「いや、何があつたって、お前見てただろ。っていうか、そんな近くでトランシーバー使うな

『鈴、私には果たせなかつたけど、せめてアンタだけでも…………。どうぞ』

「無視かよ」

「もつ喋るな舞ー今行くからなー、ビリビリー！」

「今行くって、お前等一人も離れてないじゃん。ほとんど隣じやん
なんか青海のシシ「ミ」が聞こえるけど、氣のせいね。だってアイツ
はもう……

「もうなんだよ。勝手に話作るな

嗚呼、思考にもシシこまれた氣がするけど、有り得ないよね。だつ
て思考読むつて化け物じやん。あ、そつか。アイツは化け物なのか。

「お前、哀れだぞ」

そんな今は「き青海（妄想）を尻田に、バタバタと私に駆け寄る鈴。
そして鈴は私の手をとった。

「舞……」

『鈴。ターゲットに見つかるまで、私達の使命はまだ終わらないわ
…………』

「つ、わかった。俺がお前の分まで頑張つ

「オイオイ、なんかでかい音したと思つたらまたお前等かよー」

え?この声つて……。

「うわ、壁にヒビ入つてるし。勘弁しろよ、教頭に怒られるじやー

「ん

翔兄だー・どうしようかー・早速ターゲットに見つかっちゃったじゃん！
チラ、と鈴を見ると『あひやー』と呟いてる。

つていうか、壁つて

『ま、待つてよ翔兄！これは青海が！』

「は？青海なんか何処に居るんだ？」

え……

（（アイツ逃げやがったー））

「面倒事は！」めんだからなあ。マジックでもガムテープでも誤魔化しどけよ～」

『ええ！翔兄ヘルプ!!』

「カムバック！」

GAME OVER

『次のミッションは青海暗殺計画で』
「ラジヤ…………！」

第9回戦 男一瞬ダチ一生（後書き）

キャラクターファイル

・ 北林鈴
きたばやしじりん

年齢：14歳

身長：168cm

体重：52kg

見た目：とにかく派手

苦手：恋愛沙汰

特技：ケンカ

優しいヤンキー。頭は弱い。家はかなりの金持ち。実は前科あり。

第10回戦 終業式

ガヤガヤ ザワザワ
ザワザワ ガヤガヤ

「えー、……つまつ、……だかうどあひ『ややほほほほほほほほほほほほ

……』

「マジで…?」

「うわあーーー!」

「…………」

第10話 締め括りは豪勢に

「翔先生」

「なんですか？教頭先生」

「あなたのクラスがなつづるむせこんですが。ついでにその伊達メガ
ネ外しましょ!」

「ああー、そうですね。もしかしていつも一番？賞下せによ」

「どんだけ不名誉な賞?

校長の話が聞こえないじゃないですか。それとその伊達メガネ外して下さい」

「大丈夫ですよ。校長の話は8割がいらない事だから」

「ど二」が大丈夫?早く静かにさせて下さい。あなた担任でしょ?あとその伊達メガネ外しなさい」

「そんな簡単に黙るなら、わざと……いや、やってないな。かつたりいし」

「アンタなんで教師になつたのですか。つてかその伊達メガネ外せ」

そんな不毛な言い争いの中、終業式は終わつた。校長は泣いていたとか、いないとか。

「えー、ハゲの長い話も終わり(聞いてなかつたけど)、俺等は自由を手にいれた」

静寂のなか、ゆつくりと鈴が震つ。青春ゲームにあるまじきシリアルモード

「つて事で……夏休みだああああああーーー！」

「『才才才才才才才才才才才！』」

ではなかつた。まあ、ジャンルが「メディーだしね。つてい
うか、シリアルなんかになつたらこの舞ちゃんがぶつ壊す

「んでんで、提案なんだけど、夏休み海行かねえ？伊豆に俺の親戚が旅館やつてるんだよ」

海ですと！？なんて素敵な提案！さすがは私の相棒

『ナイスよ鈴！もちろん行くわっ！』

「舞が行くなら私も行く」

そういうふうと思つたわ流華　VV女は愛されてなんぼね！

「やたつーじやあ、あとせー」

くらひ、と首をまわす鈴。なに?誰を探してるんだ?

「幸希、青海一。お前達も来る?」

は、はあ――――――！？

『何言つてんのよ！アイツは人の皮被つた化け物よ！そんなの呼んたらエンジョイできないじゃん！』

「えーでもれ

『もういい！』解散よ！あたし、普通の女の子に戻ります……！』

ああ、涙が出てくる。今ならキャン イーズの気持ちが分かる。「バカ舞！普通の女の子に戻るとか言った奴に限って、結局復帰したりするんだよ！キヤ ディーズがいい例だ！」

くつー私の考えを読まれた！？まさか平成をバリバリ生きる鈴がヤンディーズを……。アンビリーボーだわ。

「誰が化け物だつて？」

『げつ』

「なんだよその顔」

降臨なされたよ魔王が。

「あー青海。行くよな？」

あ、鈴余計なことを……

「まあ、暇だしな。行ってやるか。幸希、お前も来るだろ？つてい
うか来い」

「拒否権なし？別にいいけど

『えー！幸希はいいけど、マジで青海来るのー？』

「じゃあ来週の火曜日な

『シカトーっちょっと鈴ひびーー私達の仲なのにーー』

「詳しい事はメールするから」

更にムシしたよコイツー天下の舞様が、そのまま引き下がるとでも思つてんのか！？

『ちょっと待つたあーー』

大声でストップをかける。あ、やっと静かになつてくれた。舞感激

『私達はまだ純粋な子供ー保護者同伴にすべきよーー』

「でも、誰を…………？」

いいとこりを聞いたわね幸希ツーさすがツツ『//』

『そんなの決まつてるじゃないーマイダーリンよーー』

腰に手をあて、堂々と囁つあたし。素直が一番だもんね

「——マイダーリンつて……」「

みんな同じ方に視線をつづす。そこには居るのは

『つて事で、翔兄ーよろしくね————』

「…………は？」

楽しい夏休みが待っています

「え、いや、……は？ ようじくって

……は？ なに？ 僕？」

約1名を除いて
.....。

第10回戦 終業式（後書き）

次回から夏休み▽▽

第11回戦 サマーバケーション（前書き）

旅行編

第1-1回戦 サマー・バケーション

第1-1話 海に浜辺に水着に

『熱い夏、輝く海、眩しい太陽……そして、舞のセクシィー水着姿
ツー。今なら無料キャンペーン中みなーーー』

「キヤーー！ 舞かわいいいつーかわいすきして監禁しつけたい

『照れるよー 流華こそ黒のビキニ似合つシ一超大人っぽい』

そつ言つて、抱き合つ流華と舞。なに？お前等デキてんの？しかも
なんか過激じやん。

「舞ちやんの水着姿つて健康的だよね」

『色氣が無いつて遠回しに言つてゐるへー』

いや、へん出しで色氣のなのはすゞこれ舞。

「あ、幸希ヤバイ。俺吐氣してきた」

『テメエー聞こえてるだーーー』

「舞、そんな事どうでもいいから早く泳げーーー。」

『どうでもこいつて何だーーー!!』

そんなことを叫びながら、ドタバタと走りまわる舞や鈴。元気だなあ。

……待て、俺は何してるんだ? なんでコイツ等とバケーションしちゃってるの? パラソルの下寝そべつちやつて、ちゃつかり浜辺で日焼けサロン? うわ、自分で言つて意味分からねえ。

「何後悔してんだよ」

暑さにやられた俺に、上からふりかかる低い声。

「……青海」

あーあ、出たよ。さわやか王子の名をもつ魔王が。コイツ俺に敵意むきだしなんだよなあ。

今だつて、どこか不機嫌そう。ポーカーフェイスは健全だけじね。

「教師にその口調は無いだる」

「生憎俺はお前を教師として、認めてないんで」

「いやあ、それ程でも」

「褒めてねえよ。照れるな、キモイ」

へいすくをたたく。いつからこんなに嫌われたんだっけ？去年の2学期頃からだつたかな？アレ？でも確か……

止めた。考えるだけでかつたり。

視線を海のほうへと向けると、舞と鈴が仲良く競泳を……仲良く？

あ、いま舞鈴の足蹴つた。うわ、鈴は舞が息継ぎした時顔に水かけたよ。全然フェアな勝負してないじやん。

流華は……何悶えてるんだ？舞か？もつ女捨ててる顔した舞に悶えているのか？アイツどれだけ変態なんだ。普段のキャラはビリしたよし、これからアイツを舞特性豹変症候群と呼ぼう。あ、でもなげえ。めんどいから前言撤回。

そんな事を考へてると、隣に青海が腰掛けた。

「あれ？青海くんは海入らないの？」

「気分じゃない」

「ん~？何ムスツとしてんだ？」

「青海。やけに不機嫌じやん」

あ、優等生藤森くん登場。

「幸希。今まで何処にいたんだよ

「ずっと隣にいたけど……」

「「「え、マジっ。」」

「なにそれヒドシッ……。」

「すぐれた幸希は、気配を消せるのか。言葉ではいつか書いたけど、単に地味なだけだと僕は思いました」

「先生全部くわじります

「おーい舞~!~!~!

「話さうな~!~!~!~!

(無視) 僕が叫ぶと、舞は海から出でて走ってきた。

流華が少し睨んでたけど、ドンマイだ俺。

『なあに翔兄?私の水着姿に我慢できなくなつた?』

「そんなの流華ぐらいだ、安心しろ。お前忘れてそうだから言つとくけど、夏休み数学の補習来いよ~。』

『もう1回泳いでくるね~』

そつ言つて舞は海へと戻つていった。

「あれ？ 聞こえなかつたのか？ まあ、いいや」

「いや、良く無いでしょー。仮にも教師なんだし」

「聞こえなかつたんだから仕方ないじゃん」

「だつたらもう一回くらこ言おつよー。それとアレ聞こえなかつたんじゃないで、無視したんだよー。」

「幸希、お前は小さい事をぐちぐちと……。いいか？ 男は氣にしたら負けだ」

「 もうこいです」

なんか軽蔑の目で見られてない？ やだね～ 最近の中学生は。へんこ反抗的になっちゃってさ？

「お前の所為だろ」

「わ、すげえな青海。人の考え方めんだ」

「顔に出でんのだよ」

「マジかよ。それよりお前、海入らないわけ？ 見るよアイツ達を。あんなバカみたいでさ、青春じゃん？」

「バカはなるより、見るほうが楽しいんだ。嘲笑がこぼれるぜ」

「どれだけ黒いんだコイツ。笑みつかべてるし。幸希よくつるんでられるな。」

また海のせりを見ると、 何アレ。なんか沖のせりに三角の物体あるんだけど。

あれつてもしかして、 イルカに似てるけど魚類の……

『そやアアアアアアアアアアアア！』

舞の叫び声が聞こえたのと遊泳注意の看板が見えたのは、 ほぼ同時だった。

第1・2回戦 夏の夜のお約束 前編

第1・2話 強くなりたいなら肝試し

『「ここ」が私達が泊まる旅館?』

そう言つた私の前にあるのは、めっちゃ日本代表ですよ的な大きな建物。古風な雰囲気だけど新築同様に綺麗にされてる。

「あ、鈴くんのお友達さん? 待つていましたよ。」

出てきたのは、こりゃ また大和撫子の美人女将。

『ああ、いけませんお客様』『女将さん!』みたいな密な関係持つてるのかな~。

「海で泳ぎになつたのですか?」

「はい。とても素敵な海ですね。あまりに綺麗で感激しましたよ

答えたのは青海。

出たよー、前業スマイル! お前誰だつて感じーつてか、マジで誰コイツ? なにその無駄なさわやかオーラ。だいたい、私その素敵なか海とやらで死ぬ思いしたんだけど!?

「ふふ、楽しんで頂いて良かつたです」

あちらも負けないくらいの笑顔で返す。グハー眩しいぜ……。

つていうかね、本当楽しんでたわよ。私が死にそうになってるのに、鈴はマツハで私を置いて逃げるしさ、友達止めようかな？

翔兄は『大丈夫か～？』つて明らかに大丈夫じゃない状況なのに言うし、青海にいたつてはかなりの笑顔浮かべるし、「コイツ等死ね。幸希はそんな奴等にツツコミいれて……いや、ツツコミはいいから助けてよ、つて感じ。まったく、これだからヘタレは……。

唯一、流華が私を抱いで陸まで泳ぎ、助けてくれた。姐御つて呼ばせて下さー。

「でも、夜の海には気をつけ下さいね？」

「え？」

「最近おかしな噂が流れてるのですよ。なんでも、人を惑わす幽霊が出るとか……。」

『ゆ、幽霊？』

「はい。ただの噂だといいんですが

なるほど……。」れはもうアレだ、アレしかない。

『つぐ』と第1回戦肝試し大会イイイイ！…』

「「「「はアアアー…？」」」

田を丸くして、私を見るみんな。なんだよ、そんなに見つめないで
まさかみんなして私のファンなの！？モテ娘は困る〜vv

「妄想してると悪いけど、何言つてのお前？だいたい第1回つ
て第2回あるのかよ」

『だつて幽霊と書つたら肝試ししかないでしょ？翔兄つたら、に・
ぶ・い』

「幽霊つて、昼間女将さんが書つてた？」

『察してるんだつたら聞くくなヘタレ』

「何その態度の違いー…？」

『私と翔兄のワープワールドを邪魔だてせぬなー。』

「頼むから今すぐ壊してくれ」

ハイテンションな私
興味なしの青海
シンデレ翔兄
傍観者の流華
理解しない鈴
ウザイ幸希

「なんかおかしいよね？最後ちょっとおかしいよね？」

『……………じゃあ早速その海に行こう……』

「何今の間ー？なんで今回こんなに扱い酷いわけ！？」
「安心しそうな幸希、今回だけじゃなこれ」

「黙れ腹黒魔王」

肝試し開戦です～～

第1・2回戦 夏の夜のお約束 前編（後書き）

次回へ続きます

**第1-3回戦 夏の夜のお約束 後編
(前書き)**

次回の続き。初、青海視点！－！

青海ねえ

「なんだよ」

『いや、何が何でもお仕事に専念するんだから』

『不思議な道理だね。ひとつ勉強になつた!』

「ああ、さつとテストに出るから覚えておけ」

『...で、どうね?』

第13話 恐さは後からくる

今の状況?さつき説明した通り。ようは俺たち一人は他の奴等とはぐれた。場所は海の前の砂浜。夜の海とか、かなり気味悪いし。

『つまり迷子だね』

「どう考えたつてお前のせいだろ」

『……青海、これは悲しい運命さ。運命とは人の力じゃどうにもならないの。だからね、誰のせいでもな ぬにやあーー』

長々と責任転嫁を語る前に、鳩尾に一発いれた。つていうか、『ぬにやあ』?どんな叫び声だよ。

『ぐ……青海。表情変えずに殴るとは非道なり!舞ちゃんその内泣くからなー?』

「つづくまつて泣いてる。爆笑してやるから」

『サド大魔王ー!!』

なんか魔王から昇進してるし俺。

『ああ、もうヤダ!私より幸せな奴みんな死ねーー』

何言ってんのコイツ?とうとう狂つたか?

『そして迷子になってる子達ー今だけ同志にならつーー』

どんなキャンペーンだよ。

「……とにかく帰るぞ。はぐれたつて言つても、旅館戻れば居るだ
る。」

『バカね青海。迷子になつた時は動かないのが一番なんだぞ?』

なんで帰るルート知つてゐるのに動かないんだよ。
それとその『だぞ?』つてなんだよ。ツチの南ちゃん気取りかコ
ノヤロー。

『つて事で座つた座つた! 今なら舞様の隣に居させてやる!』

「じゃあ俺帰るから」

バカ女を置いて旅館に向かつ。こんな奴の隣にいたら、なんかウイ
ルス感染しそ

「のわつ!」

『ヤーダー! こんな暗い所に乙女を置いてくなあ!』

とりあえず乙女は人の足にしがみつかねえ。

『星がきれいだねエ』

「そーですね」

『夜の海もなかなかだねエ』

「そーですね」

『あ、見て！満月だあ！』

「そーですね」

『ウザイんだけどオー！』

結局舞と居る俺。テキトーに相槌してたらキレた舞。
もつ「コイツ海に捨てて、俺だけ帰るうかな？もちろん這上がれない
様に重りつけて。

『……ねえ私達今2人きりなんだよね？鳥肌たつよ』

「気が合つた、俺もだ」

夜のせいか、波の音以外まつたくもって静寂。それに俺と舞の声が
響く。

『そーゆー雰囲気になつても手え出してこないでよ、アンタの事嫌
いだから』

「そーゆー雰囲気つて、ビーゆー雰囲気だよ

『なんていふか、このままキスしちゃう? 海で甘酸っぱい青毒しきやつ? みたいな』

「そんな間違い起こすの、あの変態女ぐらいだ」

『間違いつてなんだ!!』

つていうか、変態女つて? 岩本田野宮・クレーシュコリイさんの事?』

誰だよ。そして何人だソイツ。

「あの…なんだっけ名前。あ、思い出した。葉月 流華だ」

『流華の事が…わついえば何気にフルネーム出たの、本編じゃ初めてだね!』

本編とか言つた。

「……お前さ、アイツ 翔の事好きなわけ?」

『当たり前じやん』

俺の唐突な質問に、ムカつくぐらーの早口で回答する舞。闇に目が慣れ、強い月光もあり、お互に表情は見えてるだろつ。

『そーいえばアンタ、翔兄の事毛嫌いしてるよね。なんで?』

キヨトン、とした顔で聞いてくる。

「俺は……」

ジャリ、

「『』へ。』

突然、背後から砂を踏む音がなる。

そういうえば」、「」、耳に聞聞いた噂の場所……。ジャリ、ジャリ、ジャリ

『お、おつむ……。』

「ひつくな

『だ、だつて未知との遭遇しあやうよーやつぱり挨拶は全国共通の
HELO?でも慣れ慣れしいつて思われるー?』

知るか。だいたいなんで英語なんだよ。

「幽靈なんて非科学的なモノ……」

そう言つて振り向いたら

「見つけたあ~

『ギヤアアアアアアアアーーつて、アレー?』

「なに迷子になつてんだよお前等。ほり、帰るぞ」

「……翔」

そこにいたのは、俺のワースト5には入るだろ？、高橋 翔だった。
『翔兄イ～！怖かったよオ！魔王についても、全然頼りにならないん
だから～！』

足にしがみついてきたのは、何処のどいつだ。

『よし、旅館へゴー！』

なんだかんだで、俺達の迷子タイムは終わった。

『旅館、到着～！』

『舞～～～心配したよ～～！』

『何処にいたんだよ舞～』

着いた途端、舞に抱きつく葉月、流華と鈴。目に痛いから、詳しい
解説はできない。ってか、したくない。

「良かつた、無事戻つてきて」

「幸希。いや、なんか翔が

「あ、やっぱり自力で戻ってきたじゃんコイシ等

……は？

『アレ？ 翔兄！？』

教師にあるまじき口調を吐いて、奥から出てきたのはやつを今まで側にいた張本人。

「まつたく、中学生にもなつて迷子になるなよなあ。流華なんか探し行くつてうるさかつたんだぞ？」

……やついえば、こいつのまにかあの翔がいない。

「……翔。お前ずっとここにいたのか？」

「ん？ ああ。青海なら道分かるだらうと思つて。めんどくせことかそういう理由じゃないからね？ 信用してたんだからね？」

『え、じゃあわかったって？』

「…………」

夏夜の不思議な体験

第1~4回戦 夏休み＝退屈（前書き）

今更だけど季節はずれ

第1-4回戦 夏休み＝退屈

第1-4話 うだうだぐだぐだ

どうも前回青海に視点を盗られた舞ツス！楽しかった旅行も終わり早3日（温泉でばつたりはなかつた）。

ついでに今の私の気分は

『暇…暑い…とけのウ…』

『ロロ、ロロ、ロローと部屋を回る。フローリングの床が冷たくて気持ちいい。』

……ってアレ？この展開はヤバイぞ。なんかグタグタして、はい、終わり～みたいになる。

でも、これで私が宿題とかやっちやつても面白くない。ってかやりたくない。

なんか起きり！誰か来い！！

「……何やつてゐの姉さん」

『おお！我が弟よッ！』

仰向けて寝てた私に、上から田線（違）で言つのは我が愛しの弟、瑠璃。見た目も中身私に似て可愛い奴

「寝るなら自分の部屋行きなよ」

『お姉さんの部屋は絨毯で暑いのよ~』

「いや、床で寝なくとも」

ああ～、新キヤツ登場でとりあえず「ロロロロした一日でした」とはなりずに済む。ま

『瑠璃ー、あたしヒマなんだけど』

「宿題やれば？去年溜め込んで大変だったじゃん」

『そんなもんやつたって、地球は救えないのさ』

「……僕、一ノトの弟なんて嫌だからね」

そつとつて、立ち去つた瑠璃。なんだよ薄情者め。

『ヒイマアー！流華と幸希は塾だし、鈴は決闘とか言つてたし、翔兄はメールシカトするし、青海は……』

.....。

(『なんで翔兄を毛嫌いしてるの？』『俺は……』)

ふと、海でのことを思い出す。

あの時、なんて言おうとしたんだろう？

なんだろ、翔兄となんかあつたとか？

目玉焼きにかけるモノでも争つてたのかなあ？翔兄は塩こしょうで、青海は醤油派だったのかな。

きっとソースだけは無理とか、マヨネーズは無いだろとか言い争つたんだろうな……。

~~~~~

『ん？メール……。翔兄じゃん。なになに、明日から数学の補習来い？じやなきや俺がなんか言われる？』

……翔兄。私のメールは無視したくせに、どこまで嫌な性格してんの？でもそんな貴方が好き！

『はあ、めんぢくさい。鈴誘つて行くか。でもあの子勉強大嫌いだからなあ』

ついでに鈴の成績は5教科合計で100点をとるくらいのバカ。だって鈴、授業サボるはテスト前遊ぶはで勉強一切しないんだもん。

『……なんかで釣るか』

明日から補習…。私は、その補習が運命を振り動かすなんて、この

時はまだ気付かない

うひこの、連載だとやつたくなるよね（笑）

## 番外編 小話シリーズ（前書き）

今回は本編とは関係ない小話を描きました。会話文だけの120%ギャグです

それでは小話シリーズ 始まり始まり～

## 番外編 小話シリーズ

正夢？

幸希 + 青海（×舞）

『青海大好き』

「可愛い奴だな」

「お、幸希？ 舞ちゃん？ やけに仲良くない？」

『あ、幸希イ。ウチ等付か合ひの事になつたんだあー。』

「ええー。」

「ラブラブなんだよなあ？」

『ねえー』

「じょ、[冗談でしょ]？」

『[冗談なんかじゃないよー]』

「俺達はマジで遊んでるんだよー。」

『青海

』

「舞  
」

ガバッ！

「ゆ、夢……」

「いや、別に一人が幸せになるならいいよ？でも、本当アレは見る方が堪えれないっていうか……」

「なに泣いてんのお前？」

悪夢

舞 + 青海（×幸希）

「俺、実は幸希のことずっと

「だ、ダメだよ青海。だって僕たちは男同志だし」

「性別なんか関係ない。俺はお前のことが好きなんだ」

「ツーそ、んな…僕だつて……！」

「幸希」

「青海」

『ついで夢見たんだけど、どうしてか青海一。』  
「何がどうしたって？」

国語の授業

翔 + 流華

「えー、じにはだな、そんなこんなのでいつなる

「先生そんなことなってなんですか。ちゃんと説明して下せー

「流華、男だつたら理屈は気にするな。気にしたら負けだと思ふ

「先生、私は女です」

「小さい事は気にするな」

「先生、PTAに言いますよ?」

いつもこんな感じ  
だけど生徒に人気な翔

A・I・B・O・U  
鈴×舞?+幸希+翔

『鈴!-テストどうだつた?』

「合計で100点」

『マジで!-ぴつたり!-?すゞくね?』

「いやあ~、それ程でも」

『さすが私の相棒だ!-時々ムカつくけど、鈴大好きーー』

「俺も舞のこと、時々ウザイけど好きだぜ!-?」

ギュッ

「……ねえ先生。男女が抱き合ってるのに、なんでハートマークが欠片も見えないんだろ？」「

「あの2人に色気も艶も存在できねえよ」

きつかけ

幸希 + 流華 舞

「流華ちゃんはいつから舞ちゃんの事好きになつたの？」

「ふふ、よく聞いてくれたわね！ そう、あれは私達がまだ2年生だった頃」「

「え？ なんか回想シーン入る雰囲気？」

（回想シーン）

『流華～！～』

「舞、そんなに走ると転」

バタンシ～！～

ちゅつ ▽▽

「…………」

『うわー～』めん流華！勢い余ってつい

～回想シーン終～

「偶然起じた事故だけど、ひかりとおぬこひやったの  
(ひかりにも程があると思ひ……)

言葉にはできない幸希だった。

もちろんほっぺね

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
終われ  
・  
・

第1-5回戦 フォーコンカラ (前書き)

十恋愛編十

## 第15回戦 フォーリンラブ

### 第15話 フォーリンラブ

『補習が僕等を呼んでいる。インテリ教師が待っている～アイツが事故る事を祈つてえ、補習が消える事願つてえ～わあさあ皆さん、お手を拝借』

「ここにまひは、舞です！え？今日？補習だよー、マジやつてらんない。ついでにさつきの歌は舞作詞作曲

『あ、鈴一ちゃんと逃げずに来たね！』

「なんでせつかくの夏休みに学校来なきゃいけないんだよ。」  
校門で待っていた鈴に手をふる。あらり、やつぱ嫌そうな顔してゐるよ。

『まあまあ、後で鈴が欲しがってたリングあげるから。』  
「約束だぜ？」

Hビでたいを釣るつてね。昔鈴から盗つたリングをあげる（返す）

わ。

『…にしても鈴、相変わらずな格好してるねえ。』

今日の鈴の服装、赤いTシャツの上に乱れたYシャツ。ネクタイはゆるゆるで、斬新なベルト。赤髪には新たにオレンジのメッシュ入つてるし。校則破りもいいとこだ。

「でも今日はピアス外してきた。えらくね？」

『なんか夏休みに入つて、更に派手になつたなあ。うわ、それタトウー？』

「おひ、かつこいいだろ？」

自慢気に一カツと笑う鈴。チャラチャラしてるので、笑顔が無邪気なのよね。そのギャップにくらべらだわ！

数学の補習やる教室へと向かい、校内の廊下を私達は歩く。

「数学つて先公誰だつけ？」

『鈴、たまには授業出ようよ。数学はあのインテリメガ　きや

つー。』

ドン！と誰かにぶつかった。この舞サマにぶつかるなんていい度胸してゐるじゃない！思わず転んじゃつたじゃないか！！

「あ、ごめん！大丈夫？」

そつと手を伸ばされた。ふむ礼儀はなかなかね。さて、どんな顔して

「どうか怪我した?」

見上げて目が合った瞬間、ボツ!と顔が熱くなるのが分かった。

か、かっこいい――――――――!

「おい、舞?」

鈴が怪訝な表情で見てる(失礼だなこのやうひ)。

『わ、私実は貴方の妹なんです!』

「舞!?」

「ええ!マジで!?」

(舞のボケ>正真くをボケ>天然くで返したア!?)何者だコイツー)

鈴の心の中

『あ、すいません。間違えました。』

「なんだ間違いかあ。」

く、あまりに動転して変な」と口走ってしまった!

ヤバイわこれ。何がヤバいつて、とにかくヤバイ。

なんか頬熱いし、息切れするし、心臓つるんこし……。

「じゃあ俺、部活あるから」

「うあ！行ってしまー！」

『ま、待って下さー…できれば名前と部活と誕生日と血液型と好き  
なタイプetc……。』

私が引き上めると、彼は振り返り、

「花形 嵐、サッカー部の三年生だよ。」

と、笑顔で言ごと去っていった。

「あ、やわやか…！」

『鈴…。』

「あん？」

『これがひとつめぼれつてやつへ。』

「はあ？」

『先生ー、こんな方程式より恋の足し算を教えて下さいー。』

「帰つていよいよ浅野さん。」

## 第1-6回戦 恋愛相談室

「花形 嵐、サッカー部の3年生だよ。」

第1-6話 サッカー部のクラスメイト

『幸希イ開けるぞオオオオオオオオオオオオ！』

「うわああーーなに！」とー？』

幸希の部屋を叫びながら開けると、案の定驚かれた。  
はいそい、どうやって家へつてきたとか、ヤボな事聞かない。

「ま、舞ちゃん？ いきなり入ってこないじよ。驚くじやないか。」

目を丸くさせ、心臓を押さえる幸希。微妙に涙目じゃね？

『やーね、ちやんと開けるぞーって聞いたじやない。』

「ええーーせっしきの聞いてたつもつなのー？」

なんか幸希がピーチクパーチク言つてた気がするけど、気にしたら負けさ（bow翔兄）

「何しに来たんだよ。」

『ぬあー青海！？なんで此処に居るの？まさか私に会いに… そんなふうと聞いてくれればいいのに でも私悪いけどアンタの事嫌い。』

『

「やつへ一回会ってみる？（微笑）」

『冗談です。すいません。』

ヤベツ、謝り切ったよーだつて笑顔が恐ろしくしてるんだもん！—

『 と、まあ、そんなんだけど、教えてくれる？』

「そんなんつてどんなん？」

直ぐ様返してくる幸希。

乙女の考え方くらい察してくれや～。  
仕方ない、昨日の事を一通り話すか。

「「ひとめぼれ？」」

「花形先輩…に？」

『うん。』

「ん?なんだこの微妙な視線。私が恋しちゃ悪いか。

『そこで、サッカー部の2人に協力してほしんだ。』

「さりげに俺を入れるな。」

『安心して、アンタなんか当てにしてないから。』

「幸希、金属バット持つてる?」

「カラリと怖い事言わない。」

最近幸希のツツ「//」、キレが出てきたなあ。ありや考えるより先にツツこんでるね。もはや反射的だ。うん、青春ゲームに貴重。大切にしなきゃ!~

「…で、僕等に何してほしいの?」

『先輩と会わせて!つていうか、先輩の生年月日とか血液型とか趣味とか家族構成とかタイプとか身長とか体重とかスリーサ「危ない危ない!そこまでいくと犯罪になっちゃうよ!つてか、そんな事僕知らないから!…』

私の言葉を遮る幸希。

なんだよ、常識にとらわれちゃって。そんなんじゃいつまで経つてもヤ チヤのままだぞ! 地球人ならクリ ンくらいいけ!

「伏せ子だりけじやねえか。」

『「ひめむかこみわい」一人のボケに文句言わない……』

「つていうか、お前マジで先輩と付き合いたいとか思つてん？ やめて、お前じや相手にされねえよ。」

鼻で笑う青海。ああムカつく……「トイツ絶対地獄に墮ちるのみ」むしろ一生現世をまよえ。そして除靈師に灰にされやがれ……

「なんか言つた？」

『言つてません。』

怖エヌヌヌ！ なんで分かるの？ なんで分かるの……むつ魔王イヤー！ 誰かダンプカーでトイツひき殺して！

「なんか思つた？」

『思つてません。』

本氣で命の危険感じるので、このへんどうやめといひ。舞はこれから邪念を消します！

「べすくべすくす。」

？

「何笑つてんだよ幸希。」

あ！私が思った事言われた！チクショ－青海め人の意見盗みやがつて！！

「いや、もしかして青海、妬いてるのかなって思つて。」

「ん？やじてる？焼いてる？ヤイテル？矢井てる？」

「誰が妬くか！死ねよテメH。」

『「ひり！簡単に死ねとか言わないつーせめて消えろとしなさーーー。』

「舞ちゃんフォローするつもり無いでしょ？」

あ、バレた？っていうかこのやりとり前もなかつた？まあいいか

「あ、じゃあ明日部活あるし舞ちゃん見に来る？」

思ひ出した様に言つ幸希。

「オイ幸希ー！」

『ー

行く行くウー』

やつたーー。それで花形先輩に会つきつかけができるたーー

『幸希大好きー。』

「えへじたしまつて。」

「ひつと笑ひ幸希。さすが微笑みの貴公子

バシッ！

「ちよ、なんぞ呂いたのー？』

「いやけんお前がムカついたから。」

「こやけんのひで言い方止めてくれないー！？」

みなさん、舞は今日をもつて恋する乙女となりますーー！

## 第17回戦 第一印象

第17話 偶然、必然、運命

『あー今蹴った人だよー。』

「今の？舞の好きそうなタイプね～。」

私達は今サッカー観戦中です！なんか流華は品定めとか言ってついてきた。深く意味を考えちゃダメだヨン様パラダイス（え…）にしても、花形先輩かっこいい！！超さわやか！汗だくでもさわやか！暑苦しくてもさわやか！！なんかもうさわやかッ！

「褐色の肌に黒髪。身長170強。スタイルAランク。さわやかフェイス。舞の好きそうなタイプね。」

でもまだ性格わからないし、青海みたいに王子スマイルのくせに腹黒かもしれないわ…。いや、でももし中身もさわやかだったらどうしよう。悪いところが無いじゃない。舞は激ブリ（激しくブリティ）だからあつさり両想いになっちゃういそうだわ。そしたら私の気持ちはどうすれば……！」

うーん、なんか流華がブツブツ言ひこねば、あえて氣にしないよ。

『あ、部活終わつたみたい!』

いつのまにか結構時間が経つてた。時間を忘れるくらい見とれてた  
わvvv

「よし、近くで見てやるうじやない。」

『わ、流華!』

流華に腕を引っ張られ、先輩や青海がいのところに向かう。

うひゃ――――キドキするよオ!先輩私の事覚えてるかな?

ん?なんかジャンル変わってない?コメディーでいいのかこれ?まああらすじにラブコメって書いてあるし、大丈夫だよね

「藤森!・高梨青海!」

「あ、流華ちゃん舞けやん。」

「本当に来たのかよ。。。」

微笑む幸希と呆れる青海。

なにか、その嫌そうな田はー・ヒドイぞ腹黒魔王(定着)…。

「アレ?君確か……」

先輩が私を指さす。

ドッキーン！！

なななななんて言つかな！！？

「前に廊下でぶつか『今まで何処にいたんだよドラ もん…』

バコンツツ！

照れ隠しで我ながら意味不明な事を言つて先輩に抱きついたら（キヤツW）、青海に殴られた。

『なにすんだテメH…！…』

「JUJUの台詞だ。何どかくさにまぎれて抱きついてんだよ。なんか見てて痛いからやめろ。ってか此処から消えろ。」

『んだとテメH…ふざけん…！…（ハツ、先輩が見てる…）ふ、ふざけないで下せこなで』  
『あらー…』

「それ敬語？」

しまじくお待つトモニ

『え、えーと、改めまして、先日幸希にセクハ…いやいや猥褻行

為された浅野 舞です。』

「今言い直した意味無いよね。つてこいつが平気で嘘つすべのやめようね。その内怒るからね。」

「傷は浅いよ舞ちゃん!」

「先輩それどうこう意味?」

「それにしても、どうした?俺になんか用?」

『はははははーじ、実は前ぶつかったお詫びに、お、奢りせてほしいなーなんて……。』

ああー言つたー言つたよ私ーよくやつたーーあ、でも今円82円しか残つてない!給料日前はキツイぜー!(誰?)

「お詫びって大袈裟なーそんな気にしないから平気だよーむしろ俺が転ばせちやつたんだし、俺が奢るよ?」

うわああーどいつもこよーそんな、先輩に奢らせるなんて私はできないー!で、でも先輩とランデブー(?)したいしー!

『よ、よしへくお願こします…。』

「決まり!」

そんなことなで、私達はトークする事になつちやいました…

『あ、でも先輩ワリカンですよっ。』

「舞ちゃん優しいね」

(好感度アップ!?)

## 第18回戦 憧れの人（前書き）

今回は私の舞の「デート！」こんな大事な場面、視点は譲れない！藤森を巻き込んで、ザ 尾行

## 第18回戦 憧れの人

第18話 ムードにお任せ

はじめまして監さん。小学生時代、舞に惚れた奴を片っ端からドブに落としてた葉月 流華です。

「流華ちゃんそんな事してたの？」

+ @です。

「いや、僕の事もちゃんと紹介してよーついでに事の経緯とかもー！」

藤森がつるせいので、今の私達の状況を单刀直入に言います。

尾行します

「…单刀直入すぎるよ。流華ちゃん視点向いてないよ。変わらつか？」

「藤森が視点やつたら2分の5がツツコミになるじゃない」

「2分のうちであふれてるじゃない」

「うぬやい子ね。私だって視点やつてみたいわよ。しかも今回は私のスイートハニーのトートなんだから！」

「2人の邪魔…見守らなきやー。」

「今邪魔つて言おうとした？」

「あ、うつね来たーほらかがんでー。」

「うわーー。」

舞とターゲッ 花形先輩が並んで歩いてくる。

「ターゲットつて言つた？」

藤森の邪推は嘘をふ気にせずに。つてか話すなり（）で話してよー。舞達どもいつばやになるでしょーー。

（何この扱い？）

（そりそりそんな風（）元気なことよー。）

「最初どこの行く？」

笑いながら聞く花形先輩。やつぱりさわやかね…。微笑みの貴公子藤森にも、王子スマイルの高梨青海にも負けないわ。

『え、えっとネバーランド…』

「あーいいなおもしろいもつ

『ですよねー！私憧れてるんですねー！』

「夢のよつな国だよねえ。」

（夢のよつなっていうか夢の国でしょーーー）

もつ向よあのボケボケ！てんでダメじゃない！

（舞ちゃんのネバーランド発言はいいんだね。）

（だつて可愛いじゃん！今でも信じてるのよーー？ってか、今更だけ  
ど舞の私服激キュー（激しくキュート）vvv連れ去りたいわ！）

（流華ちゃん犯罪者にならうだよ）

（人は誰しも恋泥棒といつ犯罪者よ）

（かつこよくないからーーー）

つて、あー舞達喫茶店に入つて行つた！ネバーランドはよつなつ

たのよ！？

仕方ないから、嫌がる藤森を無理矢理引っ張り、喫茶店に入った。

私と藤森は舞達からは見えない席に座った。念のためプチ変装中。

(く、こからじゃ何話してるか聞こえないわ！)

(ねえ、まだ（）なわけ？)

(当たり前！だって……)

『先輩、なに頼みますか？』

「うーん、どうしようかな」

(ほらー！)つちゃになっちゃ読者が困るでしょ！？)

(今、無理矢理会話入れたよね？)

ああもうー！藤森はいつも人の揚げ足とつて！！

『先輩、あの、質問なんですが、先輩はか、彼女とかいるのですか？なんて聞いてみたり……。』

「え……？」

ああーよくわからないけど、ラブに雰囲気になつてゐるーっていつか、今舞の声聞こえたわーやつぱり愛の力つてす」vvv

「俺……わ、」

『は、はー』

ちゅうとオオオオーー！顔真っ赤に染めてうるんだ瞳の上田使いヤバ  
イよオー・シャ、『与メとらなきやーつていつか、抱きしめたいー！

(じゅ、なにやつてんの流華ちゃんー？今行つたらダメだつてー！)

(とめるなあーあんな可愛い舞を前に、黙つて見てろつて言ひのー。  
?)

(落ち着いてーーー)

「俺も、全然モテないから彼女いないんだよね。恋とかよくわから  
ないし……。」

『ええーそんなカッコいいのー？　つて、あ。』

「はは、ありがとうーやつぱり舞けやん優しいね」

『そ、そんな…／＼』

(ヤダ！なんかいい雰囲気じゃない！—もつ藤森のバカア！—)

(見守る予定だつたんじや……)

(おだまりー)

(…………。)

舞の隣は、やつぱりまだ譲りたくないの

## 第18回戦 憧れの人（後書き）

### キャラクターファイル

・花形嵐  
はながたらん

年齢：15歳

身長：178cm

体重：60kg

所属：サッカー部

性格：天然

主義：ロマンチスト

天然鈍感さわやか先輩。無自覚タラシだつたり。樂觀主義者。

## 第19回戦 片恋日和

純愛 or 敬愛 or 熱愛 ?

### 第19話 クライマックス

どうも、前回流華ちゃんに振り回された藤森です。つていうか、現在僕の家に先輩、舞ちゃん、青海が来てます。

『先輩って、肌きれいですね!』

「そう?俺生まれつき黒いんだよね~。」

『そこが素敵なんです!』

舞ちゃんは先輩に彼女がないと分かった途端、猛アピールしてる。あ、流華ちゃんは呼んでません。もうあんなのゴリゴリです。

「…なんだよ!」のメンバー。』

青海がため息混じりに言つ。呆れると言つた、不機嫌と言つた。

「いいじゃん。協力してあげなよ。」

「なんで嫌いな奴の恋路に、手を貸さなきゃいけないんだよ。」

「嫌いだからできるんじゃない? 好きな娘の協力のほうが、できな  
うだけど。」

「そう言つと、軽く睨まれた。恐い恐い。なんですがそんなおつかな  
い顔するのや。」

「お前、何が言いたいわけ?」

「別に?」

「俺は、花形先輩のためを思つて言つてんだよ。あんな奴と付き合  
つてたら、なんか感染するぞ?」

ウイルス扱い?

「それに先輩は、モテるのにあの醜さと天然で自覚していないだけな  
んだよ。アソコにはもつたいたいだろ。」

「そりかなか? 舞ちゃん黙つてれば可愛いと思つナビ。」

「幸希……。」

なんかすごい哀れみの目で見てくるんだけど。なにその、可哀想な  
奴…みたいな視線は。けつこうムカつくよ?」

「舞ちやん一部の男子にモテるよ？青海だつて知つてゐるじゃん。」

僕がそう言つと、青海は少し考え込んだ。

舞ちやんの名前のためにフオローすると、舞ちやんはわざとモテる。

運動神経抜群だし、ノリいいから親しみやすいし、黙つてれば可愛  
いし、寝てればおとなしいし、遠田スタイルいいし、…アレ？自分  
で言つてなんだけど、これってフオローになつてる？

『ええ！先輩1回も畠田された事ないんですか！？そんなにかつこ  
いいのに…』

突然、舞ちやんが大声を出した。僕と青海は同時に振り返る。

「全然モテないって言つただろ？ホント畠田なんだよね～俺。」

あ、この人青海の言う通り激鈍だ。きっとその鈍さで、数々のアブ  
ローチを蹴つたんだね。つていつか、告白された事にも気付いてな  
いんだろうなあ。

『じゃ、じゃあ、私が先輩の彼女に立候り　うぐつ…』

せつかくの告白を全部言いきる前に、青海が舞ちやんの口をふさい  
だ。つて、あれ、鼻と口ふさいでない？

『んん～～ッ（苦しい…）』

「ちよつ、青海ヤバイヤバイ！舞ちやん死ぬよ！？」

『ふはつ！ ハア、 ハア、 ハアーーーー。』

あ、 やつとはなした。

「キモイから息切れするな。」

『テメエヒヒエエー！ ふざけん

「お前ヤ、 翔の事好きだつたんじやないのか？」

舞ちゃんのもつともな怒りをさえきつ、 質問する青海。 相変わらず  
オレ様だ。

まあ、 確かに舞ちゃんは先生ラブだけビ…

『翔兄は愛してるよ でも、 花形先輩には恋してるのvvv』

「…………。」

舞ちゃんの主張に、 青海は黙りこむ。 愛と恋、 かあ。 なんかす””  
乙文化してゐなあ。

「なあ、 なに話してゐの？..」

先輩はやつて、 ズイツ、 と僕等の間に入ってきた。

『秘密ですー！ ウフーvvv』

キモイよ舞ちゃん。

「ええー、教えてよ。」

『えへへ』

「…………（殴りてえ）。」

心なしか、青海からドス黒いオーラが滲み出でる様な…（汗

「なんか、本当に舞けやんといいよ。妹みたいで可愛い」

さわやかに言つ花形先輩。

『…妹?』

その瞬間、空気が凍りつきました（体験者A）。恐るべし天然さわ  
やか激鈍好青年。

さすがに今の発言は、傷付いたんじゃ

チラリと横目で青海を見ると、肩を震わせ、笑いを堪えてた。

：：何その複雑な優しさ

## 第20回戦 傷付かない恋

第20話 正真正銘ボケと天然ボケ

前回に引き続き、藤森幸希が視点をお送りします。

今の状況？前回と同じく、  
凍りついた空気に  
固まつたヒロイン  
気付かない天然先輩  
笑いを堪えてるサド魔王

いや、どうしようコレ。さすがに焦る。なんか舞ちゃんはいつ泣きだしてもおかしくないし、青海は今にも爆笑しそう（なんて奴だ）。

「なになに？俺なんかおもしろい事言つた？」

笑えない事言つたんだよ！…ああ、この人バカだ！自分の失言に気が付いてないよ！っていうか、この空気をどう解釈したら、おもしろい事言つたになるんだ！！

『 ツ

「あ、舞ちゃん。」

ど、びうじよひ。マジ泣きとか「冗談じゃないー。

『 …先輩。』

それとも怒りにいくのかー…?でもさすがに殴つ。『近親相関しましょ  
うお兄ちゃん…!』

僕の焦りと悩みを遮った舞ちゃん。

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

えーと?なんて言った?  
キンシンソウカン?

ええええええええええええ！？

バカだ！この娘かなりのバカだ！！バカだバカだとは思つてたけど、やつぱりバカだあ！

「…キモ。」

青海が軽蔑と嫌悪感を、表情いつぱいに出して呴く。  
いつのまにか笑み消えてるし！舞ちゃんが傷付かないのが、そんな  
につまらないか！－歪みすぎだよ性格ツ！

「近親相関は犯罪になるよ？」

『禁断の関係つてよくないですか！？』

「漫画が、ドラマみたいだね」

「どうかツッこめ！」

「幸希、俺竹刀とりに行くから一回帰る。」

「もう戻つてくるな。」

何コレ？流華ちゃんの言ひ通りじやん－2分の5がツッコ//だよツッ

他に誰がツッコ//してよー僕一人じゃつらいからーつて、他にツッ  
コ//こるつけ？

青海は本当に帰つたし、流華ちゃんは舞ちゃんの事になると一切ツ

「こまないし、翔先生はやる気のだし、鈴は恋愛知識のだし（近親相関の意味知らなそう）、…「わあー！」

「シシコミ全然いないじゃん！！ 青春ゲームってこんなにボケまみれだつたの！？お願いだから、シシコミ担当の新キャラ出して…！」

『私先輩のこと大好きです～』

「俺も、兄弟いないから舞ちゃんみたいな妹ほしかったよ」

『今度から私を妹と思って下さい！そして可愛がって下さいvvv』

「舞ちゃんおもしろい！」

もうここによ。ふたりで会話楽しんで。

「やつぱー、幸希。」

「戻つてくんなつて書つただる。」

教訓：ボケ同士にシリアスは成り立たない

第21回戦 翔の恋愛模様 前編（前書き）

▽みんなの夏休み編▽

## 第21回戦 翔の恋愛模様 前編

名前：高橋 翔  
自称27歳 性別：男  
職業：教師 外見年齢：20歳  
その他不明

### 第21話 やる気なし教師の実体その1

『ラン ランカラカラランランラン ランランカララン カカラランカラ  
ランランラン ララララ…ん？ララ…あり？ラララ…』

補習の帰り、ヒロインこと舞様は某ジブリの歌を口ずさむ（途中で意味分からなくなつたけど）。

はいはい、どうも皆さんー最近やけに視点をとられる一応ヒロインの舞です！  
これって、私視点で話進むんじやなかつた？まったくふざけんなチクショー。

だいたい、いつまであるんだこの補習は。あれ以来、鈴来てくれないしさあ？ そういえば、旅行終わってからあまり鈴と遊んでないなあ～。久しぶりに誘つてみようかな？

『ふたりでゲーセンにでも行くか～。お？ あれに見えるは

』

マイダーリィイイイイー！

『超ラッキー！ 久しぶりに会えたあ～おーい翔に……』

私は声をかけようと思つたけど、できなかつた。なぜなら、そこには翔兄と仲良く話す女の子が……。

「ゆ、許せない！！

『翔兄イイイイイイイー！』

「は？ って、ぐはッ！？」

舞はシャイニーグワイガードをかました（-?）

「しょ、翔君大丈夫？」

うずくまる翔兄に、オロオロする女の子。可愛いじやないか「ノヤ口ウ。

「…いきなり何す『』の可愛い女の子は誰？ 酷いよダーリンー私の

事は遊びだったの？教師と生徒のドラマみたいな関係をやりたかっただけなの？それとも出来心で私にあんな事やこんな事をしたって言つたの！？』

ガクガクと翔兄を揺さぶる。つていうか、今日は伊達眼鏡かけてないんだ。ヤバ、そのギャップにトキメキッシュ

「お前いい加減な事言つた。あんな事やこんな事つてどんな事だ。戀、まさかとは思つたけどイツの言つ事」

「翔君、こんな幼い娘に……」

「信じたよ。」

『じつにか言つたひどいなのー！』

「お前もひしゃべるな。」

冷たッツー舞は悲しいぞ。こんなに翔兄を愛してゐるのに……。

「ちょっと翔君、可哀想だよそんな言い方。」

「……戀。」

ちよつと翔兄？なにかなそのしおりしさ。

まあ、確かにこの女の子は可愛いと思うよ？外見的に、翔兄より1つか2つくらい下に見える。その前に翔兄は何歳なんだ？

私がジツと見ると、その女の子は視線に気付き、頬を染めながら

にっこり笑つてこう言つた。

「私、竹内 愛<sup>まな</sup> 翔君のこ、恋人です。」

ハイ、核爆弾投下。  
舞のハートは原爆ドームさ。

## 第22回戦 翔の恋愛模様 後編

第22話 やる気なし教師の実体その2

いや、まあ、うん。なんとなく雰囲気で分かつてたけどさ。そんな初々しく言われると余計に…ね？翔兄がこんな清純派と付き合つてたなんてカルチャーショック。

『…らしくないね。』

「何がだよ。」

私の言葉に、即聞き返す。

『いや、翔兄がこんな純なお付き合いをしてるなんて。しかも年下。』

『

「俺と愛は同じ年だ。それに今は清楚系だけど、夜になるとすごい乱れ『なに言つてるの翔君ッ！…』

翔兄の教育上よろしくない発言に、顔が真っ赤になる愛さん。ああ、なるほど

S Mか。（シシコリ不在）

「舞ちやんは翔君の…」

『ヒモです。』

バシツ

『…嘘です。翔兄のクラスの浅野舞です。』

なにも叩かなくてもいいじゃん！チクシヨー翔兄め。飄々としてる  
ようで、艶やかな関係持ちやがって…！

このままじゃ悔しい。いつなつたら、質問攻めで翔兄の好みをゲットだぜ…

『ハイハイ愛さん…』

「どうぞ舞ちやん」

『ふたりは付き合って何年ですか！？』

「恋人歴7年です！」

『バシツ…第一回負け…と。』

『どんなきっかけで付き合いましたか？』

「高校生の時、席が隣だったの。最初私の片想いだと思つてたけど、翔君が席替えの時告白してくれて……。」

「あ、甘あああああい！あの翔兄が、そんな……！え、でも高校生のときから7年付き合つてるから、翔兄の年齢は……、止めた。数学ムリ。」

「じゃ、じゃあ、翔兄高校生の時はどんな感じでした？」

「今みたいにやる気なしだったかな？学校もあんまり来ないような。今でいう鈴？あれは単なるヤンキーか。」

「翔君、すごいモテてたんだよ～。かつこよくて、頭もよくて。付き合つた当時は女の子に嫉妬されて大変だった……。あ、あといつも寝てたなあ」

「楽しそうに話す愛さん。なんか急に口数多くなつたよ。」

『……翔兄、青春してたんだね。どうしたら今の性格に陥るんだろう？』

「陥るつてなに？お前俺のこと本当に好きなわけ？」

『あ、いい天氣だよね今日。』

「なにそのかわし方。」

「でもやだな。私全部負けてる。年齢のハンデは大きいよ。翔兄が口コソンだったら良かつたのに……！」

『…ふたりは別れる予定ない?』

上田使いで尋ねる。

「失礼な事言つた。あるわけないだろ?」

「翔君ツツツツ」

おいおい、なにふたりの世界にひたつてゐの?私は除け者か?ふざけんなチクシヨー。

だいたい翔兄、彼女いたくせになんで今まで黙つてたのさ!—!

『おーい、そこのバカップル。ラブシーン見せびらかすのは人様に迷惑ですよ~?』

「…舞、まだいたのか。」

『帰れつてか?帰れつて遠回しに言つてんのか?』

「ま、舞ちゃん…その」

『あ、お氣になさらず。キスでもなんでもしちゃつて下せ!』

「…………／＼」

あ～あ、恥じらつちやつて。翔兄にいつこう娘がタイプなんだ。ケツ!

『ふん…どうせ私は独り者ですよー!』

私が恨めしそうに言つた、翔兄は面倒くさがり言つた。

「何言つてんだ、お前には青海がいるだろ。」

『はあ！？笑えない冗談止めてよ！私が、青海と…………？キヤハハ  
ハハ！有り得なーい！！』

「爆笑してんじゃん。」

ハツ！そんな事はどうでもいいんだった！青海つて単語久しぶりに出たから笑っちゃつたぜ テヘ

『あ～、なんかイマイチな雰囲気だけど、悲しいモテないちゃんは寂しく独りで帰りますよ。ぐすつ』

私は皮肉氣味に吐き捨てる。うわ、翔兄全然氣にしてないし。泣くぞ私。

うん、なんか癪に障る。最後に愛ちゃんにライバル宣言してから帰ろうかな？

私はそう思い、振り返った時、愛さんが私に向かい叫んだ。

『そんな事ない！舞けやんは可愛いよー。』

は？可愛い？えーと…………可愛い？私の事？

。

『大好きです愛姉！！』

「都合いいなオイ。」

第22回戦 翔の恋愛模様 後編（後書き）

キャラクターファイル

・竹内愛たけうちまな

身長：158cm

体重：43kg

ポジション：翔の彼女

モットー：一日一善

好きな人：翔

翔とはバカツプル。恋人暦7年。おしとやかで清楚系。

## 第23回戦 暫時上等

『喰らえ！ オーバー ワル春雨！』

「フツ、お前は既に死んでいる……！」

ガンツ ドコツ バコンツ

第23話 シラフで夜露死苦は恥ずい

『ああ面白かった』

私は今人気の『なんだか色々混せてみたよ闇アイス』を舐めながら、  
満足気に言つ。

「くそ～また俺の負けかよ！」

隣でふすくせ文句を言つ鈴。はい、前々回で言つた通り鈴とゲーム  
ン来てます！ わざまで格闘ゲームやってたのぞ

『ハハハ、舞様に負けなんて言葉存在しなくてよ？』

「はん、俺があそこで必殺技決めてたら間違いなく俺の勝ちだった

ね！」

「うわー負け惜しみだーいるんだよねー」つづつ奴。

「だいたい不気味なアイス食べやがって…少しなら食べてやつてもいいぞチクシヨー。」

『誰がやるかノノヤロー。』

「どうせ不味かつたんだろチクシヨー。」

『素直に食べたいと言えノノヤロー。』

不毛な争いを広げる。あ、でもこのアイス意外といけるよ・りょ・とカブトムシの味するけど。

「…一口くれ。」

最初からそう言えばいいのに。天邪鬼だなあ

『ハイ、どうぞ。』

「ん…。」

私が鈴が食べやすい様に、持っているアイスを鈴に向ける。鈴は瞳を輝かせながら、舌を伸ばす。

鈴は私と似てチャレンジジャーだから、きっと新商品のこのアイスに興味心をそそられたんだろうな。

『お味はいかが?』

「…！」

ペロリとちょっと舐めた瞬間、口もとを押さえる鈴。

ん?どうした?あまりの珍味に声も出ないか?

『おーい、大丈夫かあ？鈴ー？鈴ぐーん？鈴サマー？』

「ま、まづウウウウウーーー！」

「うわー・ビックリした！こきなり叫ぶな、心臓どつかの穴から飛び出しちゃうぞー？」

「ペッ、ペッ、なんだコレー！？未知との遭遇じやねえか！なんか夏の虫的な味するしー！」

あ、気が合つた。やっぱウチ等以心伝心だね

「お前よくこんなのが食べれるなーーー口直し口直しー。」

鈴はわめいて、持つてゐるアイスを豪快に口内へ運ぶ。

『うーん、鈴の食べてる【見た田チョコ】、味は【コーラアイス】だつて、同じ様なレベルじゃない？』

私は鈴の持つてゐるアイスを指さして言つ。後で一口もいらぬ。

「バツカ、見た田チョコなのに実はコーラアイスなんだぞ？なんかスゲーじゃん！」

『結局はただの「コーラアイスでしょ。見た田チョコ」つて…「コーラもチョコも違ひ分かんねえよ。』

ようは茶色いアイスじゃん。普通に売つてるじゃん。この子絶対詐欺やすいよ。しつかり者の嫁さんをとる事を勧めるね。

『ねえねえ、次どこ行く?』このゲーム制覇しかやつへ。』

私は今だに苦い顔してる鈴に尋ねる。この素晴らしい味を理解してくれないなんて悲しいや!

「制覇つて…お前それでゲーム壊した事あるじやん。逃げんの大変だつたし。」

『世の中壊してなんせよ。そのへりい別に、のわつ…』

ドンー!

なにかにぶつかり、一体なんだと思い上を見ると

…見なきやよかつた

「誰にぶつかってんだよ。」

あらり、絵にかいたようなハプニング。なんか雰囲気にだいぶお怒りの様子。不良は心狭いなー。

「なにやつてんだよ舞。お前じょっちゅう誰かとぶつかるよな。」

『衝突事故の恋を期待してるから。今回ハズレだけど。』

とんだ!コリにぶつかっちゃたわ。こんなじやなるもんもならな  
いつで。

「ハズレってどうこいつ意味だ!!」

ヤベ、聞こえたみたい。怒られちゃったよ。

相手は3人組か。うわ一面倒くさい。逃げよつかな?あ、ダメだ。

もう鈴がメンチきつてる。つてかメンチカツ食いてえ。

『ちょっと鈴ー？相手3人よ？年上よ？ダメだつて。』

「バカ言つた舞！売られた喧嘩は買うのが男だろ？怖じけついてんじゃねえ！！」

楽しそうに言つ鈴。「この子喧嘩好きだからねえー。さすがヤンキー。

『つて、ちょっと待て。なに私も男みたいな発言してんの？危うくスルーしかけちゃつたよー。』

「喧嘩上等ーー！」

聞いちやいねえ。

「なんだテメー、『イツの男か？』

3人組の1人が言つ。アレ？私達カツプルに見える？じゃあ今『一ト中つてやつ？んなバカな。

『悪いけど私には花形先輩と翔兄がいるのよー。』

「花形先輩つて、お前が前にぶつかつた？なに、その後なんかあつた？」

『そういえば鈴に報告忘れてた！近親相関する事になつたのオーハヘ▼』

「え、なに？新陳代謝？」

『あ、あと翔兄はSMカツプルだつた。』

「えすえむ？」

頭の上に？マークを浮かべる鈴。ダメだ、この子そういう知識全然無い。硬派つてわけじゃないのに。女子と結構話すしさ？（恋話に

なると消えるけど)

「お前等、なにぐちぐち言つてんだ。逃げる相談か？」

二タニタと氣味悪い笑みを浮かべて言ひ。ついコイツ等の存在忘れてたや。

「へつ！3人くらいじうじうして事ねえ！――」

相手を挑発する鈴。やる氣満々だね。

『程々にしなよ鈴。』

「彼女の前でヒーロー気取りか？そんなに魅力ある女に見えねえけどな。チビだし寸胴だし。」

『ぶつ殺して鈴。』

「言わねなくても――」

鈴はそう叫んで、勇敢にも3人相手と鬪う。イヤー、実に生き生きしてるね。輝いてるよ、相棒。

「あー、楽しかった！もつとやりあいたかったぜ」

『あ、鈴ヶガしてる。無茶するからあー。』

「なんだよ、舞だつて途中から参戦してきたじやん。」

もつ口が沈む頃、さつきの喧嘩での事を話しながら、私達は我が家へと向かっていた。

え、勝敗？そんなの決まってるじゃん！私達コンビにて、負けは有り得ない

私達の恋人以上の絆

## 第24回戦 ガールズラブ（前書き）

前半、流華が痛いです……青春ゲームにしては、甘く微シリアス？ちょっとといい話。最後、幸希が可哀想だけど（笑）

## 第24回戦 ガールズラブ

『すーすー。…うつ！カレーパマンが、カレー パンマンが！ザ・破裂』

可愛い寝言（病氣）を言いながら、私の隣で眠る舞。この可愛さは反則よ！襲いたくなるじゃない！で、でも寝込みを襲うなんて邪道…！

『むにや、流華……』

寝返りをうつり、私の名前を呟く舞。

「…」

胸の鼓動が一気に上がり、顔に熱が集まつた。

「舞。」

眠つてる舞の頬に、手を添えると、柔らかい感触が伝わつてくる。そして、その健康な桃色をおびた唇に……

「ツー？」

私、今なにしようとした？舞に、舞にキス

「邪でゴメンなさいーーー！」

『ぬあーーー』

## 第24話 レズだつて愛なんだ

「つて、事なんだけど…」

「いや、こきなり部屋に来られて『つて、事なんだけど』と言われても。」

「バカね、そのくらい察しないよーだから男つて嫌いなのよねー。」

「帰つてくれるかな流華ちゃん。」

静かに怒る藤森。このままじや本当に追いで出されそうだわ。話すの面倒くさいけど、それじゃ何も始まらないし、仕方ないわね。

「なるほど…。」

私の話を聞いて、困った様に笑つ藤森。なに軽くひいてんのよ。

「ええ。そこで色々考えた結果、藤森に相談するか、本氣で舞を私のにしちゃうかの2択しかないなと…。」

「こやいやいやー…どんな2択!…なんか違うでしょーーー。」

「で、どうすればいいと思ひへ。」

「シカトヘ。」

ああ、私なにしてるんだろう。」んな事藤森に話してどうする気?

「つうスイマセン、実は私変態なんです。」

「皆知ってるから。っていうか、自覚あつたんだ。」

うわ、失礼なヤツ。私をなんだと思つてゐの? 同性愛を差別するのはよくないわ!!

…でももし、私が舞にキスしたら舞は私の事怒るかしら? それとも、軽蔑? 近付く事も許されなくなつたりしたら、私そんなの

「快感じゃない!! 舞が言葉攻めとか覚えたらどうしよう!!」主人様つて呼んじゃうわ!!

「流華ちゃん本当は悩んでないでしょ?」

だ、だつて今みたいにイチャイチャラブラブしてゐるのもいいけど、舞に跪くのもアリ…いや、逆に舞を優しくいじめるのも快感だわ。

「嗚呼、どうしよう…想像しただけで感じちゃう…!」

「変態レベルがアップしてゐよ流華ちゃん。ですがに僕もひくよ。」

森の失礼発言にハッとする。

いけない、つい妄想モードに…。なんか話がずれてるわ! あれ? そ  
ういえば私、なににきたんだっけ?

「相談どこにいったのさ？」

「セーフセーフ…それも…。」

思い出した私は、ポンッと手を叩いく。すると藤森に苦笑いされた。

「私は舞が大好きなの。異常だつてわかってる。」

「わかつてたんだ。」

「なんか言つた？」

一 滅相もありません

なんか気になるけど、話続ける。

「太陽みたいな笑顔も、時々見せる涙も、恥じらう姿も、怒る表情さえ、全部全部愛しい。」

幼い頃からずっと見てきた。気が付けば隣にいた大切な存在。守りたいって、そう思うのは今も昔も変わらない。

一舞も私の事好きって言ってくれる。でも、それがいつまで続くの

「…………流華ちや、」

途中で入った藤森の言葉を遮り、私は我儘なエゴを続ける。

「嫌われて、邪険に扱われるならまだいい。私が一番怖いのは、『無』だから。好きとも言わない。嫌いとも言わない。そんなの、堪えられない……。」

シン、と空気が静まる。私は言い終えて後悔した。

藤森はさつと、安心できる言葉をくれる。私はそれが聞きたくて、藤森にこんな事言つてるんだ。優しい藤森に、甘えよつとしてるのよ。

なんて、酷く醜いんだろう

「「あら、やつぱり今のナシ。こせなり変なこと言つて…忘れて。」

私は瞼を伏せ、立ち上がる。藤森の言葉を聞いたところで、それは私の自己満足になるだけ。

だつたら今まま、舞の重荷にならない程度に好きつて言つてた方がつこうだわ。

「流華ちゃん。」

「…突然邪魔して、藤森に迷惑よね。帰るわ。」

私はつづ向きながら少しひ告げ、部屋のドアノブに手をかける。

「好きつて気持ちが、なんで異常なの？」

「……え？」

声に振り向くと、すぐ後ろに立っていた藤森と田川があつた。あまりの近さに驚き、心臓がはねる。

「キスは、やすがにつて思うけど、流華ちゃんの舞ちゃんに対する気持ちがいけないものなんて思わない。好意に、男も女も関係ないじゃん？」

「……………」

ほら、貴方は優しい。他人の悩みにいつだつて嬉しくなる言葉をくれるもの。所詮私の自己満足、厄介な寄りかかり、都合のいい甘え。わかってる、でも

「 藤森は、優し過ぎるのが欠点だわ……。」

私は藤森に柔らかく微笑みかける。

「 ツー流華ちゃん……。」

スカツ

「ああースッキリした！やつぱり悩みは人に聞いてもらひのが一番ねん？どうしたの藤森？」

軽く伸びをしてから、藤森に目線を移すと、自分の肩を抱いていた。

「…掴むものに逃げられたから、自分抱きしめてるの。」「ふーん…？」

よくわからないけど、まあいいか。こころなしか、ガツカリ、って言葉が背後に見えるんだけど。

「ありがとね、藤森。じゃあ私帰るわ。」

私はぐるつと向きをかえ、今度こそドアを開ける。

「え、あ、送つてくよー。」

焦つたよつて私を引き止める藤森。ビームでお人好しなの？

「ひひん、今から舞に会こに行へからだ。アンタ邪魔になるじやない？」

「アレ？ 流華ちゃん、さつさままでの感謝の気持ちは？」

「じゃあまたね！」

「いや、ちょっと、待つ……！」

バタンッ。

僕の言葉とは裏腹に、空しく響くドアの閉まる音。

おかしいよね？ 普通いじめでムードあがつたら、ねえ？

「あや」でやっぱ抱きしめとナガ良かった……って、なに黙つてんだ  
僕！」

もう誰もいなくなつた部屋、独りボケツツコ!!。

「やつぱジャンルがコメティードしね……恋愛に変えてくれないかな  
？ セウすれば、あの時ガバッといやいやいや、ダメだよ。付き  
合つてないのにそれは……。でもさ、僕的に（あと2時間は続く）。」

藤森 幸希

別名【微笑みの貴公子】

またの名を

【キング・オブ・ザ・ヘタレ】

舞は大好き。男は嫌い。でも舞が好きと言うなら、私もそれを好きになりたい。高橋翔先生や、北林、花形先輩だつて…。

あなたが好きと言つものを、私も好きと言えたなら、涙が出る程嬉しいから…

## 第25回戦 楽しきやいいじゃん

第25話 楽しきやいいじゃん

バリ、バリ、ペラ…ゴクン。

『キヤハハハハ…マジ面白ッ…ってか】のポテチ「まッ』

床に寝そべり、ポテチを食べ、ジュースを飲み、漫画を読む。

ぐつたらのお手本の様な】のお方は、悲しき事に我が姉【浅野舞】。

あ、紹介遅れました。僕は】のどうしようもないお方の弟、【浅野瑠璃】です。ついでに小学6年生。

さて、外は本格的に雨が降つてきて、父は仕事、母は買い物。洗濯物は、干しつぱなし。しかも大量に。

「姉さん、雨降ってきた。洗濯物取り込むの手伝って

『ん~?今お姉さんは忙しいからお断りいー』

……姉さんの】と大好きですよ。時々殴りたい衝動にかられます  
が。

「あの事、みんなに言つてもいいのかな？」

『ギクツ』

「姉さんの秘密バラし』手伝わせてトセー・セリヤ もうー是非ーー。』

姉さんは涙目でさう叫び、一目散に外へ出でぐ。普段からああなら助かるのに。

雨に濡れながら、必死に洗濯物と格闘する姉さん。なんかタオルにむかって罵声をあげてるし。あんなのと血繋がってるんだ僕。

『ちよつと瑠璃ー少しば手伝つてよー。』

「頑張れ頑張れ」

『鬼イイー！』

いろいろわめいてるけど、聞こえないふり。いつも僕ばっかりにやらせてるんだから、たまにはね。

『チクシヨー雨が冷たくて気持ちいぜー今なら私、空から竜呼べる氣がするーー。』

……聞こえないふり。馬鹿馬鹿しくて、突つ込む気もしないよ。

『ああー冷たかった！』

姉さんは濡れた髪をタオルで、ガシガシと乱暴にふく。

「いい水浴びになつたんじやない？」

フツ、と微笑むと、姉さんは顔を歪めて僕を睨んだ。

『~~~~もう！ふてぶてしく笑つひやつて、可愛いすぎ……』

そう言つて、ギュッ！と抱きついてくる。うわ、湿った臭いがする  
し。

「弟相手に欲情しないでよ

『ウルセー！そんなに可愛い瑠璃が悪い！！小学生とは思えない落  
ち着きと、優しい鬼畜なんてめっちゃソボジヤン！』

ブラコンだなあ。あんまり禁断の関係に興味ないんだけど。

「離れてよ姉さん。雨の日はただしさえ湿氣が鬱陶しいのに、なん  
か姉さんネバネバしてて気持ち悪い」

『ネバネバ！？何それ私力タツムリ！？』

「いや、ナメクジ

『ヒドッ！…』

なんやかんやで、姉さんは僕から離れた。そして再びぐうたらモー

「だりしないよ。姉さんは将来が本氣で不安」

『バカね～大切なのは今じゃん?それにつけの学校エスカレーター式だから浪人の心配もないし』

そう言つて、お菓子に手を伸ばす。こじまドマイペースだと、ある意味尊敬するよ。

「……宿題は?」

『こぞとなつたら流華と幸希こやつともひひ』

なんかもひ、姉さんの友達に同情する。僕はそう思いながらも、姉さんが口にした名前が気になつた。

僕も姉さんのことば言えないくらい、シスコンかもしけれない。

「流華さんは知つてるけど、ゆきつて誰?」

『ん?なに、気になるの?大丈夫よー彼氏なんかじゃないからーウ

フフ▽▽』

バシッ、と僕の背中を叩き、気持ち悪く笑う姉。嫌悪感がこみあげてくる。

「……」

『ん?急に黙つてどうしたの?』

「みんな聞いてヨー！実は姉さんって『いやあああああ！－・』めんなさい！お願いだからそれは言わないで――・・・』

秘密は最大の弱味だね。え？結局なんの秘密かつて？話しちやつたら秘密じゃなくなつちゃうから、内緒。

## 第25回戦 雨の日の憂鬱（後書き）

### キャラクターファイル

・ 浅野瑠璃

年齢：12歳

身長：150cm

体重：39kg

成績：オールファイブ

最大の汚点：不能な姉

最大の美点：有能な自分

舞の弟。駄目な姉を見て血筋の危機を感じ、必死の努力をした。策士でやや腹黒。

## 第26回戦 夏祭り

### 第26話 久しぶりの再会

『君がいた夏は～遠い夢のなか～あ～つて、かー！切ないよー！』

夏休みも残り僅かな今日この頃、私と流華は浴衣に身を包んで夏祭りに来ています！

「舞かわいいー、浴衣超似合ってる」

頬を真っ赤にして、私を下から上まで眺めてくる。いやあ、照れるねえvv

でも、流華の方が綺麗だと思うなあ。もともと肌白いから、紺の浴衣がよく映えるし、長い髪は簪をして本当和風美人って感じ。全然中学生に見えない。

どーせ私は寸胴さー！っていうか、流華の隣にいるとすゞーチンケな娘に見えるんだけど？そんなに背低くないのにい！

「舞、なにしたい？」

私の気持ちも露知りず、楽しそうに尋ねてくる流華。チクショーカ  
わいい、かー。

そのかわいさに免じて、ちゃんと見られてもいいわ私！いや、  
やつぱりかくは嫌。

まあ、そんな事はおじいて、私は流華の質問に口を開く。

『やつや、夏祭りといつたり……』

『えひあ！逃げんじゃねえ真っ黒田玉親父！……、邪魔なんだよ  
赤い奴！お前はもう要らないの！私の家に大量発生してるの！……！』

どいつも、流華です。ただ今舞は都合により視点ができないので、私、  
葉月流華がお送りします。

いま舞がやつてこるのは金魚掬い。夏祭りの定番ね。舞が必死に狙  
つてこるのは、まあ、言わなくても分かるだろ？けど、でめきん。

あーあ、袖まくつて、浴衣濡らして。…………キャツ…セクシー チ  
ラチラはだけちゃつてゐよー！

で、でもそんな姿を他の男に見せないでえー！

「 流華ちゃん？」

ひとりの世界に入りこんでいたのを、名前を呼ばれ、ハツとする。声の方向に振り向くとそこには

「藤森、と……ゲッ」

「露骨に嫌そうな顔するな」

嫌な顔もしたくなるわよ。藤森の隣にいるのは、大がかなりつく程嫌いな高梨青海。

せっかく舞を独り占めできていいい気分だったのに台無しだわ！

「流華ちゃん、一人で来たの？」

「え、舞とだけど……いま金魚掬いしてて」

「あれか」

あれ呼ばわりするな！って、ああ！高梨青海が舞のほうに……マイハイの危機よ！

「高梨青海！——ちょっと待ちなさ きやつー！」

ガクン、と腕を引っ張られた。

「……なにするのよ藤森」

私を止めた目の前の男を睨む。だけど、その張本人は全然怯まず微笑みながら、

「あまり青海の邪魔しないであげて？」

と言つた。

なにそれ、アイツの邪魔つて。…ハツーま、まさか、もしかしなくても……！

「ふ、藤森つてコッちなの？」

私は片方の手を立て、口の横に当てがい聞く。すると、漫画みたいに藤森がずっこけた。

(どひしたらそいつこいつへのかーーー)

とこう藤森の心の中のシッ ハマせ誰にも届かず、すでに私は高梨青海となにか言い争いしてゐ舞に、完全に意識が向いていた。

「あのぞ、流華ちゃん。」

遠慮がちに、藤森が口を開く。

「祭、一緒にまわ」

「今舞見てるから話しかけないでーーー！」

「……スマセン」

誘つことすら許されなかつた、哀れなる藤森。

心なしか、藤森の周りに凄い負のオーラが漂つていたけど、舞に夢

中な私は気付かなかつた。

只今でめきんと格闘中の舞です

「お嬢ちゃん、もう諦めた方がいいんじゃない?」

『黙れクソ親父!!』

「え、それもしかして俺の事?ぐすつ」

話しかけてきた店のオジサンを軽くあしらい、再び標的を睨む。

ああもう…イライラするなあ…

「コイツシ鈍いくせに重いんだよォー・ダイヒットしじローヤロウッ…!  
6時以降なにも食つな、偉田 未になれるから…」

「なにやつてんだよ、お前は」

イライラMAXになつていた私に、ふつてきた聞き覚えのある声。  
見上げればやはり、想像通りの人物。

『ま、まきたさん…!』

「誰だよソレ。俺は青海だ」

『あ、なんだそつちか』

「そつちもなにも無えだろ」

突然現れたライバルに少し驚きながらも、私の神経はやつぱりでめきんに向いてた。

青海はしばらく悪戦苦闘してゐ私を見てたが、不意に隣にしゃがみこむ。

『……？なにそれ。』

視線に気付き、怪訝な表情で尋ねた。だつてジロジロ見てくるんだもん。青海はその質問に表情変えずに答える。

「お前でめきん狙つてるわけ？」

あら、聞き返されちゃつた。

『まあね。つていうか邪魔しないで』

「全然取れてねえじやん」

そう言つて青海が見るのは、私の手に持たれた、水だけ入つた空のおわん。

私は即座にバツ、と後ろに隠した。それを一タ一タと、黒く笑う田の前の腹黒魔王。

ちよつ、ヤバイこれ。かなり恥ずいです。え? 私に羞恥心なんて無

「…って？私だつてかよわい乙女だ！」

「下手だなあ、お前。」

勝ち誇つた様に上から田線。かなりウザインだけどオー！水槽にいる金魚口に突つ込むぞ…！

「オッサン、俺にもひとづくれ」

『…』

なに、まさか私に喧嘩売つてるのコイツ。…フツ、バカにしゃがつて、その喧嘩買つわ…！

『オジサン、あたいにももう一つつけだい…』

「お嬢ちゃん、でめきんサービスあげるから止めときなつて…」

『ひめるやごーーその髪がカツラつて事は調査済みなんだーバラすぞノヤロー…！』

「うょっとなに言つちやつてゐのオオオオー…？」

動搖するオジサンを尻目に、私は早速始めようとしてる青海に向かつて、ビシーと指さし（人を指さしてはいけません）

『制限時間は3分！でめきんをより多くとつた方が勝ち！“でめきんだけかよ！”つべツツ ハリハリは受け付けないぞ文句あるかチクショー…！』

と舞流ルールを叫ぶ。青海はそれを聞き、私の方を向いた。絡む視線が火花を放ち、お互い不敵に笑う。

わあ、戦闘開始だ！！！

『はにや～疲れたあ』

「寄りかかんな、キモイ」

青海の背中に頬をあてたら、べりつとはがされた。優しくねえなチクショ～。コットン100を見習え。

あれからわたし達は金魚掬いで、でめきんだけを何匹も採つてたらオジサンに勘弁して、と泣かれた。

仕方なく、勝負をつけるために射的・ヨーヨー釣り・ラムネイッキ飲み・綿菓子早食いなどやつたけど、全部引き分け。

ドーン！！

夏の風物詩の音がこだまする。わたし達は祭から少し離れた所にいたから、辺りの静けさが心地好い。

『おっ！花火始まつたじゃん！此処見やすいや、ラッキー』

そう言つて、私は地面に座り込む。青海もそれに合わせるように瞬時に座つた。

『ふいへいはへえ』

「林檎飴口につめて喋るな

青海に指摘され、口から飴を出す。アレ？ 口から飴を……ちょっとちよつとちよつと、口から飴を出……

『ふへふあひ～！！（出ない）』

「はあ？ 何言つてるか分かんねえよ」

ヤバイヤバイヤバイマジヤバイ笑えない程ヤバイ。

口から飴が出なくなりました。かなり苦しいー無理に口の中に突っ込むんじゃなかつた！！

でもわたしは自分のやりたい事をやり、それはとてもワンドフルなことなので後悔なんでしたくありませんbｙ舞！！

つて、そんなことより

『はふへへえ！（助けてえ）』

「ちよ、お前の顔笑えるんだけど。『トメ』『トメ』  
ちよとなに携帯取り出してんの！？いやあカメラ向けるなあー！」  
んなのばらまかれたらお嫁にいけない！！

『ひやへほおーーーー』

「[冗談だよ、つるせえなあ」

んまあー奥さん聞きましたー？最近の若い子はいつたにビリなつて  
るのかしりー！え？3時からタイムセール？んまあ急がなきやーーー！

なんて脳内世間話してたら

『……ふはッ……』

唐突に、青海に飴を引っ張られた。あら見事、簡単に抜けちやつた  
わよ。

『つ～ゲホゲホゲホー』

「ハムレーツ」

ピシャリ、と冷たく言われる。じこまで嫌な奴なんだ。いつもひり座  
息死するところだつたんだぞーーー

『つ～ああーーーー』

「次はなんだよ」

嫌そうな表情を顔一面にはりつけわたしを見る。

『だつてコイツ、あたいの……！

『りんご飴エエエー！』

私はガバッ、と青海に掴みかかる。

『なに勝手に食べてるのーなに勝手に食べてるのー？』

「2回言つた、ウザイ。コレは手数料だよ」

そう言つて、カリ、と林檎をかじる腹黒魔王。チクショ一、そのボーカーフェイス殴りたい。

「舞

『ああー！？』

「その格好だけど……」

『え？』

青海の視線をたどると、わたしの浴衣姿。いろいろやつたせいが少し（だいぶ）着崩れてるけど。

あ、ヤベ。でめきん掬いのせいでビヨンシヨンビヨンシヨだ。後でお母さんに怒られるかも。

『な、なにや……？』

黙つてゐる青海の言葉を待つ。青海はひかりを見ずて興味無むげに  
言。

「下着透けてる」

大輪の花が夜空に咲いた。

青海の言葉が一瞬私の思考回路を停止させる。

えーと? 下着が? 透けてる? えーと……ええ! ?

理解した途端私は怒りに任せ、力の限り回し蹴りをかました。が、  
簡単に避けられた。

『よけろんじやねえ! …』

「無理言つな

その後わたし達は、流華と幸希に見つけられるまで格闘したとかし  
なかつたとか  
…。

## 第26回戦 夏祭り（後書き）

もう少しで夏休み編終わります（たぶん）！…30話とか区切りのいいあたりで…

## 第27回戦 プールにGO！

「男同士でプールつて寂しいねえ。やっぱ舞ちゃん達も誘ったほうが良かつたんじゃない？」

「あ、俺もそう思つ。大勢のほうが楽しいし」

不満をタラタラこぼす幸希と花形先輩。今日俺達3人は、プールに来てる。

第27話 海がダメでもプールがある！

「……なんだよその目は」

ジーーと俺を見てくる幸希たち。男2人に見られたつて、不気味以外のなにものでもない。はつきり言えば不快だ。

「だつて青海が嫌がつたんじやん。あんな奴と行きたくないって言つてさ」

口を尖らせ、俺を睨む幸希。俺はそれを無表情で一瞥し、なにも言わずただ水に身を任せゐる。

「だいたい中学生の男3人で流れるプールってどうなの？」

入りたいと言つたのはお前だ。あ、今でもいつも周したし。

「それに先輩、15歳にもなつて浮輪は無いでしょ？」「

「だつて楽じやん？俺この浮遊感好きvv」

文句の多い幸希にマイペースな先輩。誘われたから来たけど、かな  
り後悔した。知らず知らずにため息が出る。

時々チラチラと田線を感じる。幸希も気付いてるよつだが、何も言  
わない。

先輩は……当然気付いてない。しかも超リラックスモード。このま  
ま寝そうだな。

「キヤッ、こつち見た！」

「やつぱかっこいいー」

近くからそんな黄色い声が聞こえる。

(別に見た気は無いんだけど)

美形が3人集まつてれば、田立つのも無理ないか。キャーキャー言  
われても嬉しくないけど。

あ、もうう周目いつしかりじゃないか。いつたい何時まで浮遊して  
る気だ俺達は。

何度も田になるかわからないため息を「ほんとう」とした時

『バツシャアーン！…』

「　　！」

変な効果音と共に、はた迷惑な水しづきが俺達の前に盛大にとんだ。

「な、なに？」

「んん？」

あまりの光景に戸惑いがちな声を出す幸希。先輩は田が覚めた様だ。

しばらく静まりかかる。次第にプールからブクブクと泡が浮かぶ。  
かなり嫌な予感がする。白腫じやないが、いや、やっぱ白腫にして  
こへ、俺の勘はわりと当たる。

『パンパカパンパンパーン！可愛やーー〇〇倍舞ぢやんマーン』

ほら、予感的中。

『いやあ、偶然つてす』『ですねえ。むしろ運命？先輩、わたし達

はきつと赤い糸が複雑に絡み繫がつてゐるのですよ……』

「舞ちゃん相変わらずおもしろいね」

『持ち悪い』と呟つて、先輩に抱きつゝ舞。『持ち悪い。

俺は片膝を折り、プールの縁に座つた。

「流華ちゃん達2人で來たの？」

「ええ。お祭テートは前回あんた等に邪魔されたからね。……だから  
今回ば、今回ばかりはと思つてたのに」

「ぬ、流華ちゃん？」

『JNなしか、えーと、あ、そつそつ葉月流華の腕が震えてる。

「なのになんでまた居るのよオオオオ……」

「うわあー。めんなれーーー！」

首を絞められ、涙目になりながら必死に謝罪の言葉を述べるヘタレ  
貴公子』と幸希。ホント黙だなアイツは。

『ねえねえー今回のお着はびつへ見よ舞のビューティーブリーフをー』

「す、可愛いよ

『ーーー』

いきなりバカ女が叫びだしたと思つたら、先輩は持ち前の天然で寝てるし。かゆいんだよ、どこのバカツプルだ。

『そ、そんな先輩つたら…………可愛くて綺麗でセクシーで内面の美しさがそのまま外見に滲み出てるなんて褒めすぎですぅ！照れるじゃないですかvvv』

そんなこと言つてねえ。

なんで俺の周りは変人ばかりなんだ？

レズにヤンキーにやる気ナシ教師、救いようの無いバカ女ときてる。そもそもD組に入ったのが間違いだった。

でもまあ、とりあえず…

『青海！…25m競泳、私との決闘受けなさいッ！』

「ハイハイ女王様」

『誰が女王様よ！シンデレラとお呼び！…』

「シンデレラって、灰被りって意味だぜ？」

『んまあ！人の揚げ足ばつかとつてこの子は…』

退屈しき元には、一度いいだろ。

## 第28回戦 双子従姉妹の来訪 前編

### 第28話 ザ シンメトリー

『フフフ…人間はいつて滅亡してつたのね。』

いや、滅亡しないから

『確かにこの暑さは…そつ、まるで煮えきった熱湯の湯気をギリギリで浴びてるよつ……。』

変に生々しい。

『こなーい、このままでは皆共倒れだわ。早く、早く救援を…』

そう言つて、姉さんはフラフラと立ち上がり、電話器を取つた。黙つて見つめると、姉さんの指がボタンをゆっくり押していく。1・1・0と…

1・1・0！？

「ちよつとなに1・1・0番してるのー？」

『…は…そうです…え？…へモグロビン…はは、違います

「うわあー話の内容かなり気になるーー！」

「あああひ、いい加減にしてよ姉さんーー。」  
『あつ！』

僕はそう叫び、バカ姉から受話器をひったくる。だつて警察だよ警察！大事になつたらどうするのせー。

「……いや、ホントすいません…え？暑さのせい？違います。もとからおかしいんです…はい……。」

田の前に立るわけでもないのに、ペロペロ謝る。なんで僕がこんな事を…。この人の弟に生まれてきてしまつた宿命だな、きっと。

ガチャーン、と少し乱暴に受話器を置く。なぜか僕がさんざん怒られたし。

『ペッパアーー警部！私達これからこいトコロ～』

肝心の本人は、なんだか昔の某アイドルの歌をノリノリで歌つてる。どうどう壊れたか？いつか崩壊すると思つてたよ。って違う違う。そうじやなくて

「姉さん頼むから変な事しないでよ。」

『いいじゃん電話くらい  
かける相手が問題なのーー。』

僕が怒鳴ると、姉さんは頬を膨らませ、ブイッとそっぽをむく。別

に可愛くないし。

『 チョッ。いいなあ 美奈ちゃん家は、長電話し放題で！』

「 ヨソはヨソ！ウチはウチ！」

『 お母さんのケチ！！』

「 我儘言つんじやありません！って誰がお母さん！？」

ああもうーーーうつかりのせられた！！僕弟だよ？二つも年離れてるんだよ？

ハアーーー、と盛大なため息を吐いた。恨みや呆れをこめて。

『 ため息つくと幸せ逃げるよ？まあそんな時は、ハッピー キューピット舞ちゃんが不幸な貴方に幸せを届く……』

「 凳るよ？」

なおふざけた事を言う姉さんを一刀両断して、…なんかまだぶつぶつ呴いてるけど、だいたい誰がキューピット？姉さんは、なれてせいぜいパチモンだよ。もういいや、害虫とバカな姉は無視にかぎる。

ピーンポーン

ソファに寝そべっていた私の耳に玄関のチャイムの音がとどく。

むう、行くの面倒くさいな。

私は無視を決めこみ、クッショוןに顔をつづめた。体温より低い温度のクッショൺが心地好い。本気で動きたくないやコレ。

トントントン、ガチャ…

ほら、瑠璃が行つてくれた。あの子よくできた子ね～、きっといいお嫁さんになれるわ

…ん? 何も話し声が聞こえてこないけど、いつたい誰が来て

「うわああああああ…!…!」

『…!…?』

い、今のつて瑠璃の声だよね? あんな大声出すなんてめずらしい!

『…ヒ、とと、うわつ…!』

ドシンシ…!

『痛…』

瑠璃の声に驚いて、派手にソファから落ちてしまった。私は強く打った腰をさすりながら、声のした方を向く。

『瑠璃ーどうした? ドアを開けたら田だし帽被つた男とナイストゥミーティューしちゃった?』

「で、でででで出た! !

『巨神兵が？』

「いいから窓の鍵全部閉めて！－！」

私のボケに何ひとつ突っ込まず、バタバタと走り回る我が弟。家の窓閉めてどうするつもりだ？

『ちょっと瑠璃。 いつたいなに……』

さすがにただ事じゃない気がして、口を開いた瞬間

「「甘いね瑠璃！－煮すぎた砂糖並に甘いよ、カラメルになっちゃうぞーー？」」

聞き覚えのある息ぴつたりボイス。

『まさか……！？』

驚いて後ろを振り向くと、そこに立っていたのは私の従姉妹（双子）。

「「久しづびりだね、舞ちゃん、瑠璃」」

見事なクローンが、笑顔で声を合わせながら言った。

第28回戦 双子従姉妹の来訪 前編（後書き）

新キャラ登場しました！双子の詳しい設定はまた次回

## 第29回戦 双子従姉妹の来訪 後編

前回のあらすじ

おかしくなりそうな程暑い今日この頃、突然従姉妹がきました

### 第29話 ザ クローン

『転校？私の学校に？』

「「うん」」

ふたりは声を揃えそう言った。さすが一卵性の双子だわ。

「…にしても、ひどいよ瑠璃！私達の顔見た途端、ドア閉めるんだもん。」

「まあ、鍵かけてなかつたから、簡単に入れたけど。ツメが甘いねえ。」

キヤハハ！と笑う青葉と若葉。…瑠璃、窓全部閉めて、ドア鍵かけなきや意味ないでしじうが。そんなに慌ててたのか、珍しい。

「なに？久しぶりに会つたら美人になつて照れちゃつた？」

そう言って、瑠璃の腕に抱きつく双子の姉、青葉。

「ちょっと、止めてよ青葉…」

「私は若葉です～♪♪♪」

『アレ? 青葉じゃなかつた若葉だつた。前はポーネテールが青葉、ツインテールが若葉つて見分けつけてたから、ふたりとも髪おろしてるとサッパリ。』

『モテモテだね瑠璃。お姉ちゃんはちょっと寂しいよ。でも、私もそろそろ弟離れしなきやだね。双子を恋人、両手に華。羨ましいぞシャルウィダンス?』

『意味不明なこと言つてないで助けてよ!』

『瑠璃つたらかわいい』

うーん、お邪魔しちゃ悪いかな? 2年ぶりだけど、相変わらず瑠璃オモチャにされてる。昔から瑠璃、この2人にだけはタジタジだつたもんね。

「うわ、どっこ触つてんのさー!」

「私の名前當てたら止めてもいこよ。」

「若葉!…」

「ハズレ~」

「わつ、ちょっと、止め…!」

会話だけ聞くと、そこはかとなくいかがわしい。でも、アレたんにくすぐつてるだけだから。

『若葉、青葉。あんまいじめないあげで。』

私が助け船を出すと、瑠璃は感謝に輝いた瞳で私をみつめた。やた

つ、貸しーつ作つたぜ。

「はあい。瑠璃見ると、ついイジリたくなるんだよねー」「ねー」

そう言つて、瑠璃から離れる2人。

なにがねーだよ、と瑠璃は乱れた服を整え、眉間に皺をよせた。不機嫌なのが一目でわかる。

『アレ? 瑠璃どこ行くの?』

「その2人がいない所!!」

怒鳴り気味に言い、ズカズカと部屋から出てく我が弟。勢いよくドアを閉めるもんだから、ビクツッと肩が震えた。そんなに怒らなくとも……（汗）

「やりすげひやつた?」

「嫌われたかなあ?」

ニヤニヤと笑つて言ひ合つ2人からは、言葉とは裏腹に心配している様子は感じられない。ドンマイ、瑠璃！

『…話変わるけどさあ、転校するつて話本当?』

「「ホントホント。」」

氣になつていた事を聞くと、少しも間を空けず、即答された。

『やつぱり2学期から? ふたりとも同じクラスに入るの?』

「うん、夏休み終わつたらね」

「つていうか、同じクラスつて…自分等で選べるわけ?」

頭の上に?マークを浮かべ、2人して首をかしげる。双子の効果なんか、かなり絵になるや。舞、うつかり胸キュンvv

『ふふふ、そつか。青葉達はうちの学校の制度まだ知らないのか?』

「制度?」

「その笑い方気持ち悪い。」

ガニッ!!

『呴ぐよ..』

「もう呴いてるじやん!それに今言つたの若葉だよー?」

「ちよつと、私になすりつけないで青葉。」

言い争う青葉と若葉。チクショーやや」しいんだよクローンめ!見分けつけさせろオ!!

よし、ここは仕方ない。似すぎてる2人の為に、親切な舞サマサマ(なにそれ)が一肌脱ぐか!ん?脱皮のことじやないよ?私が本当に肌脱ぎ始めたら、さすがにみんなひくでしょ?

数分後

『これでよし……と。』

私は息をはき、額の汗を拭うそぶりをする。実際汗かいてないし。何故なら今の時代はクーラー! 地球温暖化なんてクソくられ

「「至上最悪のヒロインだね。」」

キヤツ！軽蔑の眼差しが痛い！でも舞はくじけないッス！！

『まあ温暖化の事は置いといて ほら、私のゴッドハンドで君達を  
別人のようにしてあげたよ！』

私はそう言って、手鏡を2人に渡した。2人はどれどれ、と瞳をき  
らめかせ鏡を見つめる。

「「…………」」

アレ、リアクションがいまいち。黙りこんじやつたよ。

「「舞ちゃん、コレ……」」

ん？なんか氣のせいいか2人とも震えてない？舞のカリスマでビューチィーな髪型にしたから、あまりに感激して泣いちゃつたか？

「なんで、なんで」

体だけじゃなく声まで震わせ、2人一緒にゅっくりと振り返る。なんか怖い話の『その人って、こんな顔してた…？』を感じさせる。

「なんで縦口ールゥウウ！？」

「私なんかチヨンマゲーーーー！」

あー、なんか2人とも鬼の形相になつてますよ。ちょっと身の危険  
感じるので、ここにお開き！！

え？ クラスについての説明？

第30回戦 8月31日

『今日で夏休みも終わりかあ。長いようであつといふ間だつたな  
……』

南東の空に浮かぶ太陽をみつめ、感傷に浸りながら呟く私の手に握  
られたもの。学生の敵であり、人生の中でもつとも田を背けたいソ  
レ。

そつ、夏休みの宿題（白紙）

『…………。』

15分後

『…………。』

30分後

『…………。』

1時間後

『…………さつきからノートと睨み合つて、なにがしたいの？』

痺れをきらしたのか、固まつてゐる私に瑠璃が尋ねる。

『いや、ずっと見てれば私の眼力で燃えるかもと……』

「一生無理だと思つ。変な現実逃避してないで、早くやつたほうが利口じゃない?」

悪気はないんだらうけど、瑠璃の言葉はこちいひ引っ掛かる。なんでもこんな嫌味な性格になつちゃつたのかな（お前のせいだ）。

でもお姉さんは知つてるよ。瑠璃が本当は物凄く優しい心の持ち主だつて！それに私の心は宇宙だ（某食ドラマ風）。だからどんな事言われてもヘツチャラスカル

「だから散々言つたのに。本当馬鹿なんだから。」

ブチッ なにかの切れた音

『さつきからグチグチ×2つもせH H H H ! - - 馬鹿つて漢字で言つあたりムカつくんだよオーアンタは小姑かあ！？嫁イビリなのかあ！ - ?』

「ちょつ、ヘツチャラスカルはあ！？」

キレた私に、少したじろぐ瑠璃。でももう遅い。いつなつた私は誰も止められない。

『だいたいアンタ最近目立ちすぎなのよ！そのせいで他キャラが出ないじやない！ - もつと花形先輩と翔兄をだせえ！ - ! - !』

「姉さん落ち着い」

~~~~~

瑠璃を救うかのように、鳴り響いた着信音。

『つたぐ、誰よ…』

「（助かつた；）」

しぶしぶ携帯を取ると、画面には翔児の名前が…

キター——（。。。）————

『ハイこちら貴方のハニー！え？デートの誘い？ちゃんと帰してくれるのは？』

「とりあえず黙れ。」

怒られちゃった

『へへ、半分は冗談だよ。どうしたの？翔児から電話くれるなんて。

』
「半分って…まあいいや、だりいし。宿題の事なんだけど
」

『…………え？マジー？』

第30話 最終回はいつだって辛い

え？タイトル出るの遅いって？

……ね（殴）

『…で、今にいたると』

ベコンツ…

『痛ア…ちょっと今ベコンつて…なんか変な音した…』

涙目で叫び、私のミラクルな頭を殴った青海、通称腹黒魔王を睨む。

「なにが…で、だよ。ふざけんな。」

『いやいや、宿題全部やつたら翔兄がデートしてくれるって…。』

そり、さつきの電話は翔兄が私に宿題やらせるために条件をだした
の。もちろん了解したさ

「そんな理由で俺等を呼んだのかテメエは。」

青筋をピクピクと痙攣させる不機嫌王子は、今にも蹴りがきそうな
程お怒りの「」様子。

【俺等】

もう気付いた人もいるでしょうが、ここには私の白紙の宿題を手伝
つてもいいべくこいつものメンバーを呼んでいる。

「ひみこわよ青海。舞に逆らわないでじつだい。」

流華vvなんて優しいの

「まあまあ。」Jのへりの問題楽じやん。」

先輩頭良かつたんだ。てつきり、あ、いや別にそつこいつ意味じや

……！

「はあ？ なんだ・ヒ・ド+になるんだよ。」

……鈴を呼んだのは間違いだつたか。

「つひいうか、字で僕等がやつたってバしゃるんじや……？」

苦笑いしながら、言つた幸希。部屋が今の一瞬でシーン、と静まる。

「 「 「 確かに……」 」 」

ぬあーー声をそろえて言つたなー！ そして哀れむような目で私を見ないでーー！

『お、終わればいいのー。』

そうよ、翔兄は宿題全部やつたら、って言つたんだから別に大丈夫なハズツー！！

「 帰る。」

青海が不意に呟いて、立ちあがる。ヤバイ、本当に帰られたら翔兄とのラブ デート計画があーー！

『ちよつ、待つてよ青海様！やつてくれた暁にはラブリイガール舞（自称）の投げキッスをプレ』キモい触れんな帰る。』

ぐはツツ

ダメージ大！残りHPが……！

冷たく言い捨てた青海は、小さく舌打ちをして部屋を出ていった。バタン、とドアの閉まる音が響く。

「なにアイツ。舞、あんな奴のこと気にしちゃ……」

私を見た途端言葉を遮った流華。そりや声も出なくなるだろ？

私はかなりのダメージをうけ、産まれたての牛……とは程遠いダース一ダ一のように唸つていいのだから。

「ま、舞ちゃん？」

『お、うみ…シユコ一、死、殺…シユコ一…、シユコ一、腹黒…魔王…シユコ一…許すべか、らづ…』

脅えている幸希を尻目に、私は走った。

私の纖細なガラスのハートを傷つけたサディストに復讐するために

後日談

夏休みの宿題は健気な幸希と流華がやってくれたそうです

第30回戦 8月31日（後書き）

今回で夏休み編終わりです！！！次回からは2学期の始まり
はイベントが多いので楽しみにして下さいー！

2学期

第31回戦 2学期スタート（前書き）

#2学期編#

第31回戦 2学期スタート

第31話 きたきたきたよ新学期！！

「おーいお前等席つけ」

ざわついた教室に入り、いかにもやる気無さげに呼びかけるこのクラスの担任、高橋翔。
みんな次第に席に着く。

「あー、なんだ。みんな夏休み楽しいことあったか？…と聞きたいところだが、だりいからバスね」

テキトーだなオイ。

『翔兄！私は翔兄との一夏の体験が印象に残っています！！』

バスって言つたのに平氣で無視したよ舞ちゃん。

「はいはい良かつたな。俺は彼女とテートしまくりだった」

『……うわーん！翔兄の浮氣者オイ』

ああ！－あの娘泣き叫んで教室出てつた！朝から授業放棄！？つていうか先生彼女いたんだ！

先生の爆弾発言で、教室内がいつきに騒がしくなる。女の子はみんな、シヨック！とかヤダー！など言っている。モテるな先生。

「舞、舞が…。」には追い掛けるべき？それともせつとしておく事が優しさなの？分かんない…私には分かんないわよ。もう愛なんて分かんない！」

なんかぶつぶつ呟いてる流華ちゃん。99%の確率で舞ちゃんがらみだらうけど。

「じゃあ出席とするわー」

じゃあつてなんだ、じゃあつて。

「全員呼ぶの面倒だからいらない奴、挙手しろー。……よし、欠席ゼロな」

アバウト…！

「先生、北林君が来てません」

「あ？－セ鈴はサボリだろ。アイツは始業式来るような奴じゃないしな」

ボリボリと頭をかきながら、心配してる様子はまったく無い。この人に教師免許を与えたのはいったい誰なんだ。責任問題だぞこれは。

「はー」

ガラツ、ドアを開け入ってきたのは、いつまで尊ぞれてた赤髪ヤンキー鈴。

「鈴来たのかよ、珍しい」

来たのかよ、って言い方はどうかと思うのは僕だけ？

「なんか舞に呼ばれてな。アレ？ 舞は？」

悲劇のヒロインっぽく教師出でたよ

『やつほー鈴!』

アレ? ?

おかしいよね？ いつのまに戻ってきたのさ。ってか、切り替え早ッ

!!

『あ、そうだ翔兄！ 私宿題全部やつたよー』

笑顔で言い、夏休みの宿題を先生に手渡す。

違つよね、それほど僕と流華ちゃんがやつたよね。

「おーとへやつた

『じゅあ約束のデータしてくれるーー？』

やつこえばそんな条件だつたんだつけ。彼女いるのこいいのかなあ。

「つて、お前「レなんか字違くね？教科によつてバラバラじゃね？」

『ヤベツ……』

「ヤベシ、じゅねえだる。なめてんのか」

……だからバレるつて言つたのに。

『だつてこないつぱい一人で終わるわけ無いじゃん！…しかも最終日一』

あ、開き直つた。

「溜め込むのが悪いんだろ。覗で今日お前居残り掃除な

宿題のノートで舞ちゃんの頭を軽く叩き先生は言つた。

『そんなのヤダーハー！』

「安心しり、鈴もつけるから」

案の定、文句を言つ舞ちゃん。いやいやと何度も首を振る。

「ハア！？冗談じゃねえよ！なんでおレまで……」

鈴は不満を素直に口に出し、先生の胸ぐらをつかむ。

普通なら修羅場なんだろうけど、そんなの日常茶飯事な僕等は誰も慌てない。それどころか、やれやれ、と騒いだり、またか…と呆れる始末。おわったなこのクラス。

「はなせ鈴。どうせ1ヶ月もやつてないだろ」

「なめんな！！宿題は、その……アレだ。夜な夜なやつてきた鳩たちが『居残り決定な』

「最後まで言わせろオオー！」

哀れに叫びながら、ブンブンと乱暴に先生を揺らす。つていうか、どんな言い訳、だつたんだろ？ちょっと最後まで聞きたかった…。

『はう…ダメだよ翔兄！そんな思春期の男女が2人で居残りなんておいしーシチュエーション…』

「お前等は余程でかい事故がない限り、なにも起きねえよ。」

両手を頭につけ、困った様な嬉しそうなリアクションをとる舞ちゃんに、先生は冷たくあしらう。

『だいたい私達以外にもやつてない子いるんじゃない！？』

「アレ？青海来てないなあー」

『シカトオオオ！？』

普通に話をそらしたよこの人。舞ちゃんが可哀想にみえてくる。

あ、ついでに青海はここにいない。堂々サボリ。学校には来たんだけど、教室にまでは来ず、なんか屋上に行つたみたい。

「つたくアイツは…。俺以外の授業じゃ真面目なくせに、なんでこんなに態度違うかねえ？」

はあ、とため息を吐き、心底面倒くさそうに先生は呟く。

(屋上にいるって言つたほうがいいのかな)

そんな僕の心境を悟つたかの様に、先生は視線を僕に向ける

「青海ビビン居んの？」

と尋ねてきた。僕は少し悩んだが、ここは正直に言つ事にした。

「屋上か～ダリイな」

先生は青海の居場所を聞いて、危機感まるでなしの声をこぼす。
「仕方ない。舞、お前ちょっと呼んでこい」

『はあー?寝言は寝て言つて!翔兄の寝顔なんて萌えてあげるから
▽▽』

「お前に萌えを語る資格はない」

『そんな事ないもん!アキバとメル友だもん!』

話すれてる！――

アキバとメル友つてなに！？

「ほらやつと行け。お前等仲良いだろ」

『激しく否定するけど、翔児に貸し作るのも悪くない。つてひとで
行つてきますー。』

「よし、厄介払い成功」
舞ちゃんはつい呟んで、教室を出ていった。……いや、そんな生徒がバラバラはまずいじゃないか？だから口組は色々言われるんだよ。

そういう意図か。マジで最悪だなこの教師。

「舞イ～！～ダメよそんな、屋上でアイツと2人きりだなんて！も
しもの事があつたら私…！舞を止めなきやツツ～！」

「幸希、あの女を捕獲しろ」

早退していいですか？

『全く、なんでこの舞様が…』

私はぶつぶつ文句言いながら、屋上へと来た。
アレ？ そういえば屋上って立ち入り禁止じゃね？ 鍵かかつてんじゃ
ね？

ドアを見ると、鍵は綺麗に外されていた。

……ピッキングしたなアイツ。

『犯罪だろ、つたく』

ため息と共に呟いて、私はドアを開けた。

「うわ、眩しいー！」

9月になつたとはいえ、まだまだ暑いなあ。これで風なかつたら灼
熱地獄だつーの。

「え～と、青海は…」

閣下（翔兄）の指令を守るべく、標的（青海）を捜す。広い屋上を
見渡すと、一度真ん中辺りに寝そべる者を見つけた。

「やりました閣下！ ターゲット発見です！ 直ちに逮捕致します…！
そして私は！」 優美いっぷこく貰うのを

フフフ、これで今度こそ翔児とトーク＆青海撃退をできる…！

「何言つてんだテメエは」

「うわあ…！」

びつくりしたあ…こきなつてへんなや…！

「高梨青海ー！上からの命によりアンタを……って人の話を聞けエー！」

ちよつとこつムカツクー。堂々と眠り始めたんだけどオ…！

「うるさい。人の安眠邪魔するな。襲うぞ！」

……」のマセガキぬ。突き落とすぞコノヤロー。

「おい、勝手に寝るな」

『別にいいじゃん。アンタを連れて帰らなきゃ、私も帰れないし』

そう言って私は、青海の隣に寝転んだ。お、床温かくて気持ちいい

『ねえ青海ー、帰りつよ』

「帰ればいいだろ」

『だから…』

やめた。何度も言つても無駄だコイツは。

あ、風が心地好い。最高の寝スポットだね。こいつや眠くなるわ。

『寝そだ。でもそしたら翔兄との約束が…』

「翔兄翔兄つるせえな」

『だつて私の脳内はほとんど翔兄だもん』

「…………」

あり？青海黙つたぞ。私に原因あるコレ？

「……気に入らない

ボソッ、と小さな声で呟いた。

『は？なんか言つた？』

「別に」

なんだよ、気になるじゃん。それとも君アレか？秘密主義者ですか？シーケレットですか！？

「　おい」

『んー～わー～』

ひよ、ひよひよひよひよひよ～顔近い！！

「な、なに?」

何コレ？甘酸っぱい青春？授業サボつて大人の階段のぼる？屋上でチューとか？ムリムリムリー！生憎私はシンデレラじゃないのさ！

「舞」

۹۰

固まつて声も出ないわたしに、どんどん近付いてくる。両腕をきつ
ちり掴まれて、抵抗もできない。コイツこんな力あつたんだ。この
際仕方ない、おとなしくこの雰囲気に流されるか。この度舞は、ひ
とつ熱い体験を……！

『政治小説』

ドゴオ！・！・！

『青海の工口王子イイイイ！』

私は青海を殴つた後、そう叫んで屋上を出た。

ヤバイヤバイ！あの無駄に美形顔でアップはキツイつてばアアーーー！
私だつて乙女なんだから恥ずかしいよーーー！

「痛エ…」

頭を擦りながら、ゆっくりと起き上がる。なんてバカぢからだよ、本当にアイツ女か？

「おもしれえ」

もつと寝てたかっただけど、あの赤面に免じて戻つてやるか。

俺は立ち上がり、教室に向かうべくドアノブに手をかけた。力を入れて扉を開ける。

「…あれ？」

開かない。言つておくけど、実は引くと開く扉だった、なんてオチはない。

「…鍵かけられた」

その後、30分かけ自力で脱出して、あの女を血祭りにあげたのは言つまでもない。

第31回戦 2学期スタート（後書き）

2学期編もよろしくお願ひします m(ーー)m
今回は少し恋愛要素入れてみましたが…どうでしょうか？夏休みも
全然進展しなかった2人だから、2学期は頑張ってほしいですね！

第32回戦 居残り掃除の刑

わいつ一つ、礼

わよひなうへへ！

「あーー！終わった。よし帰『ビ』」行ぐの鈴？』

「……舞……」

第32回戦 まあ王道だよね

ガンツ！！

「ああもひつかつたりイ！なんで掃除なんかしなきゃいけねえんだよ
！……」

『ちよつと鈴！バケツ蹴らないでよシ

今私と鈴は翔兄の指示により、罰の掃除中。

本当は逃げようと思つたんだけど、翔兄が……思い出すだけで恐ろ
しい！あの人は敵にまわしたくないと改めてわかつたね。

んで、私一人やるのも癪だから帰らうとする鈴を捕えて、掃除中な
のです。

「やる気でねえー。こんなのがサボつて遊び行かない？」

「うめり

『だ、だめだよ』

「ゲーセン」

「うめり

『い、今お金無いし……』

「じやあ、マツ。バーガーでもポテトでも奢るし」

「うめり——！」

「…………な？」

チツチツチツチー
ン

『サボりがなんぼのもんじゃ——』

「イヒーイ

すいません——舞は誘惑に負けちゃいました——でも素直に生きれるのが一番だと思うので後ろめたさはないません！

『居残りなんかくそくじや』

「なんだとテメー」

え？

上をそーっと見上げると、…あら~マイダーリン。青筋出して、素敵フェイスが台無しよ。

『翔兄…えつと、怒つてる?』

「いや、サボるぐらいで怒る程、真面目じゃないんで」

…その笑顔が恐いです。

「さつげなく何帰るうとしてんだ鈴」

「ギクツ」

「さつあと掃除しろ。なにも完璧求めちゃいねえよ」

だつたらしなくていいのに〜！

「舞、顔に出てるや」

…そんなに分かりやすい私？

「あのな、D組は期末大掃除しなかったんだ。俺は別にいいんだけど、教頭がうるさいんだよ。お前等だって、これ以上嫌な目で見られたくないだろ?」

翔兄、クラスのために?

「アレ？…お前がメンンドイから大掃除なしつて言つたんじゃ…」

「首を傾げて言つ鈴。よく覚えてるなあ～ってマジでー…？」

「…まあ、それはそれ

「『オイイイイイイー！』」

「じゃあ頑張れよー」

ヒラヒラと手を振つて、教室を出でていつてしまつた。
なんだよ結局翔兄が原因じやん…！ちょっと胸キュンして恥ずかしいんだけど！

「逃げたな」

『逃げたね』

私と鈴は顔を見合させて、盛大にため息をはいた。

『しようがない。パツと見きれいにして帰ろつ。お腹空いたし、ね？』

振り向いて鈴に尋ねると、当の本人はほつきをジッと見つめていた。
『どうしたの？…ほつきに恋しちやつた？…心配無用、皆には内緒にしてあげるから』

「なあ、舞」

『ん？』

私のボケをサラリと無視した鈴は、ほつきを持ったまま一カツと笑つてこう言った。

「野球しねえ？」

『フフフ、私に勝負を挑むなんて、たいしたチャレンジャーね！』

私はボール（ぞうきん）を握り、不敵に微笑みかける。鈴はバット（ぼうき）を肩にコソコソと軽く叩きながら、『それほどでも』と呟いた。

『私の豪速球ご覧あれ！私は第2のイーローと呼ばれた女よ！』

『配役的に俺がイチージャね！？』

『すきありイイイー！！』

『ツツツリ中であるーー！！』

私は出来るだけストライクゾーンを狙い（捕手不在）、力の限りボール（汚れたぞうきん）を投げた。

ガラツ

「お前等ちやんとやつて」

ベチャツ…！」

「ゲ……」

鈴が青い顔して、恐る恐る黒いオーラが漏れている背後を見る。その瞬間『ヒッ』と奇声をあげた。きっと恐怖に歪んだ表情をしているだろ？

あぢや～、何コレ？漫画みたいな展開じゃん。

そう、丁度入ってきた翔兄の顔面に私の投げたボール（濡れたぞうきん）が、気味悪い音と共に張り付いたのさ。

「…ずいぶんと楽しそうだな」

ボール（粉ついてる以下略）を千切りそつなくらい強く握り潰し、真っ黒な微笑みを浮かべる翔兄。

- A ひたすら謝る
- B 逆ギレ
- C とりあえず逃げる
- D 言い訳する

「『ひだアアアアアアア…』」

なんとか逃げれた私達だけビ、明日学校へ行くのが怖いです
…

第32回戦 居残り掃除の刑（後書き）

前回とは逆に今回はギャグで 舞と鈴は「んな仲だといい！」

第33回戦 学院案内

わたし達の通う私立星宿学院は、けつこう有名です。

第33話 転入生には優しくが基本

それはある放課後の出来事

『案内？私が？』

「「うん」」

私の1つ年下の従姉妹、若葉と青葉が訪ねてきた。なんでも学校案内しろとのこと。ついでに今日は髪型違うから判別つく。ポニーテールが青葉で、ツインテールが若葉。

『やだよメンディ。クラスの子に頼めばいいじゃん』

「だつて転入仕立てで、まだ馴染んでないんだもん！」

『先生とかは？』

「なんかやだー。」

なんかやだー、つてムカつくなあオイ。

私には、帰つて遊びに貰つてゲームして菓子食つてゲームして瑠璃
いじめてゲームして風呂入つて寝るといつ、ハードスケジュールが
あるんじゃー！

「ねえいいじゃん～先輩でしょ？」

『「ほんたう時だけ後輩ぶるんじゃなー！ー。』

「舞先輩イー」

『「うー…ダメダメー！」

「「シユイク奢るか、ひー。」

『「あつこー、ーーー。』

食べ物と繋るに弱い浅野舞、2年D組14歳。

『「うーが音楽室でえ、そつちが科、あと何があつたかな……。』

貴重か放課後を潰し、ひとつひとつ紹介する私。

一応これでほんとだと思つたが、……この学校無駄に広いんだもん。去年はよく迷つたものだ。

「ねえ舞先輩……」

不意に若葉が口を開く。私は『ん?』と振り向いた。

「舞ちゃんはD組だよね。クラスによつて何が違うの?」

うん、いい質問。それ聞いてくれないと一生読者様に説明できないね。つていうか、あつさり先輩なくなつたね。

「それ青葉も気になる!私達詳しいこと知らなーしさ」

『そりなんだ。じゃあ説明しよう!実はこの星宿学院は結構名門なのです!』

うとうん、と頷く双子。それを見て、私は満足気に話し続ける。

『だから、頭のいい人から何か才能のある人が豊富!そこで学校側はそういう人の為に、クラスを分けたのです』

「「どんな風に?」」

はい!みんなさん!」がミソですよ!ちゃんと覚えておいて下さらない?

『それはね、A組は頭脳派、B組は体育系、C組は金持ち、はいム

かつぐ。といつ感じた。』

「…じゃあ私達の組は？」

『一般クラス』

キッパリと言つと、2人して『えー』と不満の声をこぼす。まあ、分からなくもないけど。

ついでに、私と幸希はB組、流華と青海はA組、鈴はC組に勧誘されていた。まあ蹴つたけど。もしかしたら、青海と幸希と鈴とは赤の他人になつていたかもね。

つていうか、鈴ああ見えて金持ちだから。別荘とか持つてるし。

「一般かあ…そのわりには、私達のクラス濃いキャラ多いいよね」

『誘いを蹴る物好きがいるからねえ』

2人はふーん、と頷く。

よし、さつむとシロ ク奢つてもらつて帰るか…！

「あ、ねえ舞ぢゃん！」

まだあるのかチクショ一

「部活も見学したいんだけど」

『ええ～』

「「シエイク」」

『さあ行こう』

私は餌につられ、…いやいや、可愛い従姉妹のためにまずは校庭に出た。

#

『左から、陸上部・テニス部・野球部・サッカー部だよ』

「なるほどー。あーかつこいい人発見ーー！」

青葉がサッカー部を指差して叫ぶ。私と若葉は一緒に『どこー？』と言つて目を向けた。

ダメだよ花形先輩は！！私の好きな人とらないでねー！？

心中でそう主張しながら、私は青葉の言つつかつこいい人を探した。

「あ、もしかして今屈んだ人？」

「その隣の人！」

「えー屈んだ人の方がいいよ」

『だから誰ー？』

言つておくけど、私は両目20だー特徴言え特徴を！

「えー？若葉ああいうのが好み？」

「優しそうじゃん！」

なんだか自分のタイプを言ひ合つてゐる双子。

『だからど』 あッ！！

花形先輩はっけ―――ん！！

『花形先輩イイイイ』

気付いてくれるよつに、私は先輩に向かつてブンブンて手を振つた。
うひやー！先輩今日もかつこいい 汗がキラキラ光つていて素敵！
あ、今笑つた！さわやか～♪

『……あ、こっち向いた！』

先輩が私に手を振つてくれてる！感激だよ～。花形先輩大好きッ。
貴方の専属マネージャーやりたい！！

「「かつこいい～」」

……だから誰の事？

「あ、そつこえれば舞すりゃんは部活入つてないの？」

「私も気になるー。」

『あ～最初は入つてたんだけど、色々あつてね。実は…』

「『長くなりそうだから』」「

ダブルで言わると2倍で傷ついて…」
聞べといひじやん普通…。

『……で、2人とも文化部とか体育館も見る?』

「かつこいい人見つけたからこいや

「ねー」「

だから誰…………もうこいや。

よしー今度こそショイクだー早くマ ク行こーーーー!

『やっぱショイク最高〜体が冷えてくくく

その後、双子とマーク ナルドに着いて私は至福の時を過ごしてゐる。

あ、そういうば…

『結局2人は、誰の事言つてたの?』

そう聞くと、青葉と若葉は一緒にニコニコ笑う。息ぴったりだな君

達。

「「名前分かつたんだけどねー」「

キヤツキヤツ言いながら、双子は私の目を見て見つけたかつこいい人の名前を言った。

「高梨 青海先輩
藤森 幸希先輩」

『ぶツツ！－！－！』

私はシェイクを壮大に吹き出した。

第33回戦 学院案内（後書き）

一応青海と幸希も美形設定だったので……、さりげなく主張しておきました。

それは私が、中学生になりたての頃の話

第34話 見た目と中身は表裏一体？

「えー、今回D組の担任になつた高橋翔だ。一応27歳ね。言っておくけど、俺今年入ってきたばかりの新任だから、この学校の詳しい事は知らねえぞ」

ピカピカの1年生私達に、なんともだるそうに自己紹介する先生。だけど、27には見えない若さと、わりと整つた容姿に女子はキャラキヤア騒ぐ。ついでに、この時私はそこまで翔兄にゾッコンじゃなかつた。まあ、かつこいいなとは思つたけどね。

「ねえねえ舞

後ろから肩を叩かれ、『ん？』と振り向く。

「舞はどの部活入る？」

そう言つた後ろの席の娘は、長い艶のある黒髪を垂らした私の幼馴染み、葉月流華。

『んー、料理部とか?』

もちろん食べる専門。

流華は?と尋ねると、舞と一緒にがいいな、と綺麗に微笑んだ。マジで美人だなこの娘。私が男だったら絶対惚れてるね。

「お前等いま適当な席?じゃあ、名前の順で座れー。40秒以内でね、ほらいーち、にいー」

担任のめちゃくちゃな発言に、みんなは『ええーー!?』と言ひながらも、ガタガタと席を移動する。

『浅野だから… 1番前かよチクシヨー』

私は自分の名字を恨み、席に着いた。浅野だといつも1番なんだよねー。1は好きだけど、席の1番前は嫌だ。早く結婚したいなあー。

「38、39、よーんじゅう」

先生のカウントが終わつたところで、みんなは見事着席した。私の隣も椅子を引く音がして、興味心たつぱりに横を見る。

……おつ、好みのタイプ

サラサラのやや紺に近い髪、真っ黒な瞳、綺麗な白い肌。一言で言うと美形だ。そこはかとなく、品もあり、落ち着いた雰囲気を纏つ

ている。

私の視線に気付いたのか、その隣の男子は怪訝な瞳を向けてきた。

「 何?」

「 うおーー! これは不審者を見る目だ! いけないいけないーー! 」 這是フレ
ンドリーにいかねばあ! !

『 わ、私浅野舞! よろしくね えーと、特技はアクロバット 』

できるだけ明るく言ひついと、その男子は直ぐにそっぽを向いてこいつを聞
つた。

「 ウザ

』.....

間

ガツシャ

ン! !

『 テメエ人がせつかく自己紹介してやつてるのにイイイ!

「 バカ、放せツ! !

私は隣のむかつく男子の胸ぐらを思いきり掴んで、殴りかかった。

フツ、思えばこの時から私はクラスの者に女として扱われなくなつたのね。つてことはコイツのせいじゃねえかオイ。

「センセーイ、浅野さんと青海君がケンカしてます」

「本当わあ、初日から面倒くさい事止めろよな」

私はこれ以来、青海が大嫌いになつた。

第3・4回戦 中学1年生 前編（後書き）

青海との出会い、嫌いな理由を……。次回に続きます！

まだ中学1年生の話です

第35話 デストロイヤー

「痛え……」

あの狂暴女に殴られた頬を擦りながら、俺はため息を吐く。女に拳で殴られたのは始めてだ。

「保健室行つたほうがいいんじゃない?」

俺に濡らしたタオルを渡し、そう勧めてくる幸希。俺は軽く舌打ちして、受けとつたタオルを頬に当てる。痛みのせいで熱くなつた頬が、やんわりと冷えていくのが心地好い。

「そこまで重傷じゃない」

でも…、と口元もむ幸希をシカトして、先程の騒動を思い出す。少し冷たくあしらつただけでみんなにキレるなんて、どれだけ短気なんだ。あんな女と同じクラスになるくらいなら、A組に入つておけば良かつたかもしれない。

「青海、なに笑ってるの？不気味だよ」

…どうやら無意識に笑っていたらしい。結局この退屈しなそつな事態を、内心楽しみにしてるみたいだ。

「つていうか、誰が不気味だ」「ギャア！！」

幸希に蹴りをいれて、俺は笑みを深くした。

『すいませーん、入部したいんですけど…』

私は料理部に入ることにした。だつて部活で食事ができるんだよ？こんな最高な部はないね！

だけど、一週間後私は料理部をやめた。なんか試しに作ったクッキーを顧問にあげたら、次の日泣いて退部を頼まれたから。いつたい何だったんだろ？

『すいませーん、入部したいんですけど…』

次に私はバスケ部に入った。前から誘われてたんだけど、まあ運動

は得意だしいいかなってね。だけど、後日退部する」とになる。え？ なんでかつて？ 実は顧問とケンカしちゃつてやあ～。やめてやる！ つて、タンカきつちやつた。

『すいませーん、入部したいんですけど…』

次に私は、吹奏楽部に入った。なんか楽器でさるのって、カッケー…憧れる。でも後日、退部した。いや、その…楽器壊して、責任逃れみたいな？ キヤツ

「お前や、 Irene以上ややこしい事しないでくれる？ いろんな先生から苦情くるんだけど」

なんだかんだで6月、私を職員室に呼んだ翔先生はデスクに肘ついで、渋い表情うかべながらやつ言つた。

『そんな事言われても、別にわざとじやないし…』

いや、ホントだよ？ ガラスわつたり、ある先生のカツリヒーッチャつたり、教室水浸しにしたのも、全部悪氣はなかつたのさ。もつと言えば偶然？

「悪気ない奴が、超楽しそうにあんな事するか。お前、密かに【デストロイヤー女】って呼ばれてるの知ってるか？」

え、私、有名人？照れるわ～！いつたい誰がつけたのかな？

『でも大丈夫だよ先生、私帰宅部にしたから。少なくとも、部活関係じゃ事件起きないさ』

そう、あまりに続かないからもつやめちゃった。なんか請求されたら困るし。

「ふーん。まあ、俺はお前がどこに入部しようが、此方に害がこなきゃいいけどな」

アレ？今、教師ならぬ言葉が聞こえた気がする。幻聴か？耳掃除しなきや。

「俺に迷惑かけるなよ～。めんどいから」

……やっぱり言ったよ。

『……と、まあそんな理由で私は帰宅部に、ってオイ！聞いてるー？』

私はじやれあつている双子に向かい、そう囁んだ。
人のメモリーを無視すんなや！

「だつて舞ちやんの事情なんか興味ないし〜」

「それより藤森先輩のこと教えてよvvv」

ちよつと『マイツ等むかつく！…せつかく過去話してあげたのにイ〜！

「本当にかつこいよね先輩」

「ねー」

…青海と幸希の悪口流そつかな。仕返しきそつで恐いけど。

つていうかこの娘達、私の話聞いてなかつたわけ？青海は初対面の
私に『ウザ』つて言つたんだよ？性格悪いにも程があるだろッ！！

幸希はヘタレだ。他に例えよつのないぐらこへタれてる。とりあえ
ずヘタレだ。

「藤森先輩つて、貴公子つて呼ばれてるんだつて！…」

更に別名、キング・オブ・ザ・ヘタレだけどね。

「高梨先輩は王子らしくよー！」

……。

なんだる、イライラする。え、なんでだる、別に青葉が青海を好き
でもいいじゃん。

なんでこんなに、心の中がムヤムヤ

あ、わかった。私、わかつちゃったかも。私がこんなにイライラするの

『一番かっこいいのは花形先輩だアアアアア…』

『一番の座は先輩以外認めない！つまり悔しかったんだ。はい、問題解決

第36回戦 ミーティング（前書き）

体育祭編

第36回戦 ミーティング

第36話 会議を始めよう

ここにちは、藤森幸希です。授業はもう5時間目、僕等D組は話し合いをしていました。

そう、2週間後に控えている【体育祭】についての。

リレー

障害物競争

二人三脚

借り物競争 e t u……

たくさんの個人競技を、学級委員の2人が黒板に書いていく。

その様子を、翔先生はつまらなそうに、椅子に座つて見ていた。司会は面倒くさいから、指揮を全部学級委員に任せたんだよこの教師。

「では、皆さん。」の中から立候補・推薦をお願いします」

時代はずれの、漫画みたいなぐるぐるメガネをかけた学級委員が、僕等のほうを向いて言った。

途端にざわつく教室内。皆友達同士で、相談してるみたい。

うーん、僕なにやねんかな。去年はコレ一出だから、今年は違つの
がいいけど…

『ハイハイハイ！わたし借り物競争出たい！…』

「元気だなあ、舞ちゃん。

「ハイはー回。じゃあ、とりあえず浅野さんは借り物競争で！」

そう言つて、メガネ君 本名は瀬崎君 が黒板に舞ちゃんの名前を
書こうとした時、反対の声が。

「俺はアイツが借り物競争出るなんて反対だ。つていうか、アイツ
が生きてこる事に反対だ！」

かなりめちゃくちゃな異議を申し立てるのは、外面完璧、内面腹黒
の青海その人。

『テメエそれどうこう意味だ！…』

「そういう意味だよ」

案の定怒る舞ちゃんに、青海はポーカーフェイスで対応する。
他のみんなは、またか…という顔で、傍観者モードに入つてた。な
んだかんだで、この2人の喧嘩はD組の名物状態だからね。

「痴和喧嘩は放つておいて、他にもどんどん言つて下せー」

もう1人の学級委員、長い黒髪をお下げにしている矢野さんが、皆
に向かつて言つ。だけど皆、喧嘩のほうばかり見てるし…。

早いうちに決めたほうが楽かな?えつと、じゃあ……

「僕、障害物をよ『だから、微生物といつたら//ジン』だらー?』

……は?

「何馬鹿言つてんだ。微生物=アメーバって昔から決まってるんだよ。なんでよりこよひで//ジン』?」

……なんか僕の意見遮られたんだけビ。しかも、争いの論点変わってない?なんで微生物?

『//ジン』に泣くつてどんな状況?

「舞ちやん、借り物競争はどうこつたの?」

『え?…………そうだ! 借り物競争!…』

やつぱつこの娘バカだ

『わたしは借り物競争で好きな人と一緒に、ゴールするんだ! それで体育祭が終わった後、ドキドキしながら告白して、夕日が射す教室でキッスみたいな?きゃー! 待つて下さいね花形先輩vv』

うわーすごい青春期待してるよーっていうか、相手は先輩なんだ。まだ好きだったんだね……。

「そんな事はどうでもいいから、早く決めて下やー」

やや低い声で、矢野さんが睨み氣味に言ひ。結構怒つてゐるね、コレ。

「…舞ちゃんも、足速いんだし、リレー出れば?」

頭は確かに悪いけど、舞ちゃんの運動神経は異常な程、秀でてる。なんでB組の誘い蹴つたんだろ?まあ、僕も断つたから人のこと言えなわけです。

『リレーかあー、じゃあ幸希一緒に出る?』

「僕、障害物競争出たいから。青海はどう?」

そつと、チラリと青海を横目で見る。相変わらずボーカーフェイスで、考へがよめない。

『えー、青海私より足遅いじゃん

「明けテスト3教科50点以下だつた奴に馬鹿にされたくないんだけど」

『青海、人は成績じゃないのよ。天才と頭良いは違うの。エジソンが良い例よ。だからね』

「なんか殺意わく…幸希、俺、殺人者なるかも」

「物騒なこと言わない!…」

この人は本氣でやつそつだから恐いんだよ!舞ちゃんは舞ちゃんで、

自分で都合の良い事言つてゐる...。

「ああもう、ダリイよお前等。早く決めてくれ

なかなかまともらない僕等に、翔先生がやつと口を出した。
ゆるゆるのネクタイを更に緩め、頭を乱暴に掻きながら黒板の前へ
と出る。

「あのなあ、体育祭なんて来年もあるんだし、何でもいいじゃん。
何をそんなに迷つてるわけ?」

黒板に寄りかかり、ずり落ちしそうになつたメガネをくいと、中指
で定位位置に戻し、そつと言つた。

『先生、私達は一瞬一瞬を大切にしてるんだよ?だからそんな適当
に決めたくないの。エジソンがいい例だね』

「舞ちゃん、エジソン関係ないから」

『じゃあクレオパトゥ』

「偉人言えばこいつと思つてゐる?」

だいたい『じゃあ』つて君...。誰がこんな風に教育したんだろ、ゆ
とり教育どいろじやないぞ。

「どうあえず幸希は障害物競争。舞と青海はリレーでよくね?」

相変わらず適當な先生が、これまた適當にまとめた。

あ、でも僕は障害物競争決定？良かつた。

「じゃあ私もリレー出るわー。」

突然大声を出したのは、舞ちやん激ラブの流華ちやん。今までおとなしいと思つてたら、やつぱつきたか。

「冗談じゃねえ。なんで舞や葉月流華と走らなきゃいけないんだよ。それなら俺は、幸希と一緒に障害物のほう出るぜ！」

そう言つて、僕のほうを見てくる。見てくる、とにかく、睨むつて感じだ。僕を齧つて舐める。

「こや、青海はやつぱつリレーがつなよ」

「……あ？」

青海は無表情を崩し、不機嫌な声を出した。かなり怒にけど、もつ慣れたかな。

「藤森、私は青海と一緒に出るなんてい」めんよ」

珍しく青海と同じ意見を言つ流華ちやん。まあ、仲悪いからいまだろつけど。

「だから、流華ちやんは僕と障害物出よ」

「はあ？ なんですよーー。」

……そんな否定されるとシヨックなんだけど。

「僕は、あの2人にもっと素直になつてほしいんだ」

口喧嘩している青海と舞ちゃんを見て、僕は呟く。

「……舞と青海が、なんて嫌よ」

怒りと哀しみの混ざった声で、流華ちゃんはしゃべった。

意地つ張りは青海のほう。舞ちゃんは、きっと気付いてないだろ？
でも流華ちゃんは舞ちゃんの事をよく見てるから、多分分かってる。
僕だってそこまで鈍くない。

「ダメかな？」

「協力なんかしたくない」

「舞ちゃんの秘蔵フレニア生写真をセットで」

「今回だけならいいわ」

簡単に意見を変えたよこの娘。単純だなオイ。

方法はとにかく、一応了承をとった僕は、学級委員2人に向かい

「じゃあ、僕と流華ちゃんが障害物競争。青海と舞ちゃんがリレー
で」

「不本意だけどね」

矢野さんがそれぞれの名前を書いていく。メガネ君、もとい瀬崎君は、他の皆さんにやりたい競技を聞いていた。

『えーーー？ ちょっと何勝手に決めてるのさーーー』

「テメエ等俺の意見聞けよ」

…………無視無視。

「幸希もお人好しだな、友達の恋路を手伝うなんて」

「先生」

いつのまにか教室の後ろに移った先生は、一番後ろの席の僕に、周りに聞こえない程度の声で話しかけてきた。

「別にそういうわけじゃ……っていうか、僕と流華ちゃんの話を聞いてたんですか？」

「さあな。でも、なんとなく分かるんだよ」

意味深な言葉を吐く。恐いんですけどこの人。どれだけ観察力あるわけ？

「でも、ちゃんと自分の恋愛も進めようとしてるあたり素敵なお性格だよな」

「……なんの事ですか？」

「べつにーーー」

だから怪しい言い方するなー！

第36回戦 ミーティング（後書き）

学校行事といつたら体育祭ですよね！…クラス対抗戦にしていきます

第37回戦 僕等の休日（前書き）

青海視点

第37回戦 僕等の休日

日曜日、舞と青海は学校に来ていた。そう、体育祭の練習のため。

第37話 所詮個人プレイ

舞・青海の場合

残暑の太陽が突き刺さる校庭に、おれ達は立っていた。わざわざ休日にこんな練習に来た俺は、かなりイイ奴ではないか?なにか賞をもらいたいくらいだ。

『ふふふふふ…、B組に誘われたアクロバティックな私についてこられるかしら?』

気持ち悪い口調で、トントンと靴のつま先を数回鳴らしながら言う舞。

……なんで俺来たんだろ。やっぱり後悔してきた。

「リレーは出るの4人だろ?俺等2人だけで練習してどうするんだよ」

太陽を浴びた自分の髪を、片手でかきあげながら聞いた。舞は『ああ！』と手を叩き

『もう2人も誘つたんだけど、用事があるんだって』

と言つた。

……もう2人つて誰だ？話し合ひのとき、後半聞いてなかつたからわかりやしねえ。

『ああああああ！早速走るわよッ！』

半袖の裾を肩までまくり、やる気たっぷりに舞は言つ。俺は勝手に出てくるため息を隠そつともせず、盛大にこぼした。

『なんだよそのため息、シラケるなあ』

「こんな暑い日に、なんでお前と走らなきゃいけないんだよ」

『いいじやん青春っぽくて』

そんな青春』めんだ。

『早く早く』と言つ舞を尻田に見て、俺は諦めて了解した。

広い校庭で、2人並ぶ。舞は伸脚したり屈伸したりしてゐる。そしてこう言つた。

『先にゴールしたほうが勝ち！負けたほうは買った人にジュース奢

「つよーいいー!?」

「いいー!? てお前……リレーの練習でなんで味方の俺とお前が競走するんだ」

『都合のいいときだけ味方面しないでよー。結局貴方は一度も私のこと助けてくれなかつたじゃないー!』

殴るぞテメエ。

『冗談だつてばーなに殴るスタンバイしてるのでー?』

焦りながら謝る舞を見て、俺は振り上げた拳を下ろした。

『……よし、ふう。えっと、とりあえずは走る練習! 競いあつたほうが速くなるし。まあ、どうせ私が勝つけどね』

「……へえー、皿ひじやん」

ピコッとした空気がただよひ。今誰か来たら、そいつ感電するな。

ゲームスタートー!

思いきり地面を蹴り、強くダッシュした。照りつけの日射しはキツイけど、走ることによって感じる涼風が気持ちいい。

風で髪が後ろに流れる。舞は俺より二歩程先を走っていた。舞のやや茶色い髪は揺れてて、時々見えるつなじは汗で湿っていた。

ヤベ、負けるかも

そんな考えが頭をよぎった瞬間、俺はあることに気付いた。

「……おい、舞」

『何！？話しかけないで！』

「これどこのがゴールなんだ？」

『夕日が見える地平線のかなたよッ！』

「…………」

俺は急ブレーキをかけ、走る舞の足元を引っ掛けた。

『へふし……』

奇声をあげ、顔面を地面にズザザーと擦る舞。笑えるくらい、派手に転ぶ。

舞はしばらく制止してたけど、バツと起き上がって、赤く擦れた頬を押さえながら叫んだ。

『な、殴ったね！？父さんにも殴られたことないの！』

いや、殴ってはねえよ。

『ホールがなくて、ビリヤードで勝敗決めるんだよ』

『だから地平線 「死ぬか?』

『スマセン』

頭を地面につけ、土下座する舞。お前にプライドといつもの無いのかよ。

俺は太陽を背にしゃがみこんで、舞の頭に手をのせ何度も往復させる。その行為に驚いたのか、舞は目をまくるとして顔をあげた。

『いたツ!』

俺はそれを狙つて、舞の額に強くでひんを喰らわせる。案の定、赤くなる額。加減難しいんだよ、口。

『なにすんだテメエ!! 摂でたと思つたらでひん? アレですか? これが噂のアメと鞭? 私を手なづけようとしてるのー?』

額をさすりながら、ギャーギャー抗議する舞。だかなんだかわからないけどそれが滑稽で、また笑えた。やつぱり自分はサドらしー。

『まつたく、なんなんだアンタは』

ため息とともに咳いて、服の汚れを払いながら舞は立ち上がった。よく見ると、体のあちこちを怪我してる。いい気味だ。

『ああ、せっかく新発売のジュース買って貰おうと思つてたのに』

『…』

泣いてもないのに、涙を拭う仕草をする舞。いつまでもグスグス
煩いから、俺はため息をついて舞の腕をぐいっ、と掴んだ。

『ふえ？』

「そんなに欲しいなら、奢つてやるよ」

そう言つと、舞は大きな瞳を更に見開き、口を情けなくぽかん、と
開ける。うわ、俺かなり親切だ。

『……それは負けを認めたってこと

嘘です、ゴメンナサイ』

舞の戯言を軽く睨みつけ、おれは舞を引っ張り学校を出た。

『おいしぃ〜』

近くのコンビニで、新発売とやいの【キャラメルチーズパルク】
を買ってやった。舞は頬を押され、至福の笑みを浮かべる。

…そんなに嬉しいのか？

『ああー！…ちよつと何勝手に飲んでんのー？』

「うわ、激甘……」

あまりの甘さに顔をしかめ、手に持った飲み物を落としてしまうになった。

『あげないわよーー』

「こりゃねえよこんな甘いの

『その甘さがいいの』

この甘党め、糖尿病で死ね。

俺は飲み物を舞に返し、未だに残る甘さに腹を寄せた。甘いのは苦手なんだよ。

舞は俺から受けとったキャラメルチョコミルクをジッと見つめ、わざわざから正面相してくる。

「飲まないのか？」

『えつー？いや、……』

やけに歯切れの悪い。顔赤くして、なんなんだよ一体。

あ、なるほど

ピンときた俺は、隣に座る舞を見てくくくと喉の奥で笑う。舞はそんな俺を見て、不愉快そうになに、と睨んできた。

「いや、お前も可愛いことあるんだなって」

『な、なにがヤーー』

顔を真っ赤に染めて、俺に拳を飛ばしてくる舞。俺はその腕をパシ、と掴み、舞を引き寄せて耳元で囁いた。

「間接キス？」

『ツーー』

腹に蹴りをいれられた。

第37回戦 僕等の休日（後書き）

ちゅうと甘酸っぱいカラメルメを……

『では、行つて参ります』

「ああ、気をつけろよ、油断は禁物だ」

田の前の闇下は、レンズの細い眼鏡を、くいつと持ち上げ、神妙な表情で私にそう言つた。私はこくんと頷き、隣にいる相棒と田で合図する。

『必ずや、弱点を見付けてみせます』

「俺たちに不可能なんてこと、有り得ませんから」

強気な口調で、しつかり言い放つと、闇下は滅多に見せない笑みをこぼし、

「頼りにしてる」

そつと言つた。

「ここに呼ばれて、舞です。え？なんか話間違つてないかって？いいえ、そんなことはありません。きっとあまりのシリアスに感づっているのですね。そんな読者様に、簡潔に理由を説明しましょう。

私たちの状況、それはスパイです！…あ、でも今回は相手は他クラス。閣下の正体は翔兄。めずらしく私たちのノリにのってくれた。あ、それと相棒はもりろん

「ヤベ、俺等かっこよくね？マジでスパイっぽくね？」

「はい、鈴です…やつぱりこのしかいないでしょvvv

『では鈴、確認だ！今回のミッションは？』

「体育祭の他クラスの作戦入手せよ…」

『その通り！じゃあ、まずは順番にA組から行くぞっ！』

「イエッサー！」

ピシッ、と敬礼して、私達はA組に走った。

あ、言い忘れてたけど、今の時間は学活。きっと何処のクラスも明日の体育祭にむけて、話し合ってはるはず。そこを狙つて私達は出動するのを

翔兄の許可とつてゐるから、サボりじゃなー？

A組の場合

「Hereafter, the conference will be started. It is the final confirmation of tomorrow's physical education festival. Learn that A class is not only a brain.。

『なに言つてんのアイツ等、なに言つてんのアイツ等』

「儀式か？黒魔術の儀式か？」

「そりと、ベランダから窓を通して覗く私達は、?を大量に頭にうがべる。

「だつて物凄い意味不明な言葉発してるんだけど。」えーよ、黙々とした空気にならねえよ（混乱中）。

「うわあ、何語しゃべってたんだアイツ等？」

『さすがA組……奥が深いわ』

「そこそと聞耳をたてる私と鈴。ヤベホ、全然何しゃべってるか理解できない。スパイにならねえよ。通訳プリーズ！ああ、流華にも来てもらえば良かつた！！

「……どひする舞？」

聞くに耐えられなかつたのか、鈴が眉をよせて私に尋ねる。

『あの、アレよ。どうせA組の奴等は頭ぱっかで、運動神経なんて力スなはずよ。閣下（翔兄）には、頭脳派プレイでくるつて言つとくわ』

「…じゃあ、A組終わり？」

だつて、あんな呪文みたいなの、聞いてたつて頭痛くなるだけじやん。私の頭破裂させる氣か？言つとくけど、すごいもの飛び出でくるわ。

B組の場合

頭脳派A組を立ち去り、現在体育系B組を偵察中。ベランダから現れ、キヤツツ・アイよ。

「やつぱりいちばんの敵はB組かあ。そういえば、舞つて入学当時はB組に誘われてたよな？なんで断つたんだ？」

赤く染まつた髪をかきあげ、視線を向けてくる。

『うーん？だつて、いろんなすごい奴と同じクラスよ？なんか無理。

私、一番じゃないと嫌なの』

ひょこつ、と窓から覗きこみ、鈴の質問に答えた。鈴はそれを聞いて『ふーん』、とたいして興味無さげに呟いて、私同様、B組の教室を覗く。

『……ああー、なんか白熱してるなあ。荒井なんか握り拳つくちゃって、語ってるよ』

やけに意氣揚々とした雰囲気の教室を見つめて、ぼそっと呟いた。

……あ

あまりに熱烈視線（違）を送つてたせいが、B組の奴と田が合つた。うわ、めっちゃ変な顔してるし。

『鈴、1回引き返さない？』

「あ？ なんで？」

なんであつてそりゃアンタ、察してくれよ。

そういうつまらぬこと、私に気付いた男子が、田を見開いて口を開けた。

はあい、めぢやくすりや焦る5秒前 古

5、4、3

「ああああああ！－！」

あり？ 2秒ずれたか？

ソイツが私を指さしながら、大声出して立ちあがつた。膝裏で椅子倒してゐるし。驚くな、つていうほうが無理なのかもしけないけど、ナイスリアクションすぎるわ。

ソイツの声につられ、他の奴等も次々と私達を見る。鈴が隣であーあ、とため息まじりに、でも楽しげにこぼした。

『どうする? いきなりバレちゃったけど』

「はつ! 決まつてんじゃん! 先手必勝、一石二鳥ツー!」

鈴はいろいろとずれた四字熟語を叫んで、ガラツと勢いよくベランダのドアを開けた。

「お、お前等なにやつてるんだ! 授業はどうした! ?」

いきなりの侵入者に、あたふたと慌てる荒井先生。ヤベ、おもしれえ。人を驚かすの私大好きだわ。

『よくぞ聞いてくれたわね! ? さあさあ、聞いて驚け見て笑え!』

「俺たち2人、D組の最高秘密組織 いわゆるスパイだぜツ」

「『Aランク並の企業機密だから、内緒にしろよ?』」

パチン、ヒュイーンクしてやる。一斉に『派手な隠密だなオイイイイイイ! ! !』とツツコミが入るのは、3秒後。

第38回戦 D組の隠密組織 前編（後書き）

次回に続く

第39回戦 D組の隠密組織《後編》

第39話 足して2で割つたらもどりおりじやん

「お前等、いくらなんでも堂々すぎないか?」

『仁王立ちする私達に、怒りを通りこしたのか呆れた口調で言う荒井。B組の奴らはみんな怪訝な視線送つてくれる。

『どんな時も偽るなど言われて育つたので』

「じゃあなんでスペイ?」

それはもちろん……その、なんていうかカッケーじゃん。コソコソするのは大嫌いだけど、人の秘密にぎるのは大好きだし。

『で、足して2で割つたらもうスペイになるしかないと』

「いやいやいや、どんな理論だそれは

「荒井ー、頭弱いくせに理論とか言つなよー。なんか痛いし

「なんで呼び捨て!/?っていうか、北林に頭のことと言わせたくない

んだけどー。」

荒井のバカだと同様な意味を含む言葉に、ひつでえーて唸る鈴。まあ傷付いた感じは皆無だけ。

「スパイってあんた……そんな卑怯な真似して恥ずかしくないのか？」

今まで黙って見ていた女生徒Aが、凄んで私にむかいそう言った。
短い黒髪に、きつめの目付き。絶対気が強いよこの娘。

『ふつ、生憎、恥ずかしさといつものまゝ、とつぐの昔にペーパーで
優しく包んで水洗トイレに流したわ』

「全然上手い」と言つてないから！なに私かっこよくね？みたいな
顔してるんだ！……って違う。ついツツコんでしまった

見事なツツコ（幸希並だね）をいれたかと思つたら、眉間に皺を
寄せ、頭をふるふると揺らす。と思つたら私をキッと睨みつけ

「私、あんたにだけは負けないから」

.....。

『えーと、会つたことあるつけ？』

そう聞くと、彼女は精一杯顔を歪めた。

「忘れたのー？私よ、小学校一緒だったじゃない！」

『マジで？・鈴、誰だか覚えてる？』

「いや、俺と舞小学校違つし」

『チツ、使えねえ』

「なんつった？今なんつった？」

責めよる鈴を軽くシカトして、私はくのりと振り返りB組の奴らに

『優勝は私がもーらつた！』

宣言した

当然抗議の声が聞こえるが、そんなもんしるか。

『よし、ひきあげるよ鈴』

「アレ？喧嘩しねえの？」

「こんな大人數相手にやーよ。それに、なんとなく弱点わかつたし

ふふん、と皿慢気に笑う。
すげーー！と言ひ鈴と共に、私達は堂々とドアから出ていった。

「ちよ、ちよっと言い逃げ！？待ちなさいよ

後ろからなんか聞こえるけど、せつと幻聴だ。

「いいのか無視して？」

『いいの。ああいう使い捨てキャラがこの中にか消えてるやつ。
次回にはもう出ないよ』

「誰が使い捨てキャラよーー。」

シ・カ・ト

さあ、次は金持ちC組だッ

私は文句の言葉を背中に浴びつつ、高笑いしながらスキップスキップ

C組の場合

「なんか乗り気じゃねえなー。C組はやめね?」

C組のドアに触れようとした私に、視線ななめ下で言ひ鎗。両腕は頭の後ろにまわされている。

『なんですか、C組だけ調査しないなんておかしいじゃん』

そう私が首をかしげると、ぽりぽりと頬を搔き、不機嫌な表情をし

た。

「俺の組嫌いなんだよ。すかしてるつていうか、見下してるつていうか……」

『まあ金持ちのエリートだからね

それに鈴だつてC組の予定だつたくらいに金持ちじやん。財布にいつも札何枚も入れてる奴がなに言つてるんだか。

「舞だつて金持ち嫌いだろ?ほらアレ、自分に無いもの持つてる奴はムカつくじやん」

『それは私が貧乏と言いたいのか? そう言いたいんだな?』

「なのにC組の奴ら、貧しくても、貧しいくせに、ハイテンションに頑張つてる舞みたいな貧乏人を鼻で笑うんだぜ。酷くね?」

『ああそつだね。ホント酷いよね。金持ちが大嫌いになつたよ。とくに田の前のヤンキー』

なんで?と首を傾げる鈴。無神経な上に鈍感か。つづく友達でいることを考へるつづーの。

『まあいいや。じゃあ開けるよ?』

そう言つて、私がC組のドアに手をかけたとき

「あ、舞ストップ?」

ハツとしたように鈴が制止した。焦った声色に『え?』と私が声を

ジリリリリリー——！——！

けたたましい音が..。

『……鈴、なにこの音』

「非常ベル」

ケロリと答えられてしまった。
え、なに？もしかしてこれ私のせい？いやいや、私ただドアに触れただけよ？

「C組には関係者以外がドアを開けようとすると、非常ベルが鳴るんだよ」

ええ！？なにそのハイテク技術！

「ついでに今は少し触つただけだから非常ベルで済んだけど、完全に開けると電流が流れます」

『あぶなッ！このクラスあぶなッ！——つていうか、その敬語がムカつく..』

「時々ミスで先公たちも感電してるナビな」

ちょっと待つてよ。私がどこにシッコむって、同じ学園でこの設備の違い。そしてもう教師という被害者が出てるのに、止めようとした

ないその國太をにシッ 「むよ。

「セヒ、非常ベルのせいでかなり騒がしくなってきたね、じつす
るへ。」

怪しく笑う鈴。なんでアンタはそんなに冷静なのさ。
私はそれにしばらく黙っていたけど、直ぐに笑みをはりつけた。

『決まってるじゃん。私達はピンチに追い込まれたら、いつだって
いつしてきたじゃない』

「もうだな」

パチン ヒライコンタクト。

ふうへ、と息をおもこきつ吐いて、背筋を伸ばす。

「『逃げる
――』」

その後

翔のもとで一枚の紙。それは舞と鈴からの、言わば報告書だ。
その報告書の内容は

『スパイした結果』

- ・A組…黒魔術
- ・B組…使い捨て
- ・C組…ツッこんでいい？

「.....」

数秒後、翔の手によってその紙はピコピコに破かれた。

第39回戦 D組の隠密組織《後編》（後書き）

久しぶりの更新ですいませんm(ーーー)m今までケータイ故障中
だつたもので……。もう直つたので、大丈夫です！

第40回戦 体育祭開催

広い広いコバルトブルーに、大地を照り付ける太陽。

今日は、体育祭当日

第40話 運も実力のうち

「とうとう始まりました、体育祭！この日のために、過酷な練習をやってきた人もいるはず！実況は私、3-D内山がお送りします！」

『本部』と書かれたテントの下で、マイクに叫ぶ。みんなはそれに歓声を揚げた。

（ノリがいいなあ）

額を伝う汗を鬱陶しそうに拭いながら、そんなことを思う。ああ、なんて暑い日。今日のために誰かてるてる坊主でも作ったのだろうか。

「優勝したクラスには純金製のトロフィー。更にMVPになると、豪華賞品が送られます！」

まわりの、特に〇組のテンションがあがる。まあ、一般クラスだからね。みんなキャラ濃いけど。

隣を一瞥すると、青海が退屈そうに、テンションの高いクラスメイトを見てる。こんなに暑いのに、なんで汗かいてないんだろう。

「それでは、10分後に第1種目『2人3脚』が始まりますので、それまで皆さんは配置についてて下さい！」

内山くんこと実況がそう言つ。僕は立ち上がり、眩しい太陽を手をかざして見つめた。

「みんな、優勝したいかーーー!?」

ビシッとハチマキを横で結び、シャツの袖を肩まで捲った舞ちゃんが、みんなの前に出て、大声でそう言つ。まわりはオオオオオオーーーと叫んだ。

「賞品がほしいかーーー!?」

「才才才才——！」

「ニユーヨークへ行きたいかー！？」

——才才才才才才——！

卷之三

「才才才才才才——！」

「ヒンチになつた主人公を助け、無言で去つていく戦隊もののフ

卷之三

……どうやら叫ぶ内容はなんでもいいらしい。まつたくもって意味不明だ。いや、分かるけれども。

「姐御！」

む、なんだ慶太

舞ちゃんに向かい、ビシツと敬礼する宮内慶太くん。

「どうやら2人3脚三年生始まつたようです！」

『なに!? 三年生つてことはもしかしたら……。私はしばらく席をはずす! 私の代わりは、ヤス! お前に任せる』

泰明くんを指差しそう言ひ、泰明くんは喜んで、と一つ返事で承諾した。

それを見た舞ちゃんは、瞬く間に三年生の種目を見に飛んで行つた。

(大方、花形先輩目当てかな)

彼女の後ろ姿を見てそう思つ。ランランと輝く瞳をする舞ちゃんは、普段から想像もつかないくらい、女の子だった。

……まあ、普段がアレ過ぎるだけなのかも知れないけど。

「暑くなりそうだな」

呟いた声は、舞ちゃんの行き先に気付いたのであらう、流華ちゃんの嘆きと青海のため息にかき消された。

僕はそんな2人に苦笑しつつ、プログラムを広げ、自分の出番をさがす。2人3脚、借り物競走、と並んで

(あつた)

3番目、障害物競走。

舞ちゃんと青海がでるリレーは、午前の部で最後だ。午後は団体競技で埋めつくされている。

『きやああああー花形先輩かっこいいー▽▽』

突如聞こえた、叫び声。思いあたる人物は1人しかいない。明らかに上級生から不審な目線を向けられているのだが、おかまいなししたいだ。

(先輩、2人3脚だつたんだ)

ペアは誰かな、とか思いながら、僕はあの天然さわやか先輩の勇姿を見に行つた。

第41回戦 体育祭～借り物競走～

第41話 借り物は人より物のほうが有利

『か、かっこよかつた……！』

私は地面にぺたりと座りこんで、うつとうとした表情でそうじぼしだ。

今の今まで花形先輩を応援してたんだけど、それがもうかっこいいのなんのって！

しかも1位だよ！？マジでつっぽついてくるんだけどッ！あー！先輩と肩組んでいたペアの人があらやましい！

「おい、バカ女」

不意に背後からかけられた声。聞きなれたその声色に、私のテンションは一気に下降。

『なによ、私の幸せ侵さないでくれる？』

私はめいっぱい不機嫌を張り付けて返事した。つていうか、バカ女で振り返る私って一体……。

「早く戻れ。2年の借り物競走始まる」

『あり？2人3脚は？』

「お前が先輩見て悶える間に終わつたボケ」

うわ、いちいちムカつくあーいっ…まあ仕方ない。自分のクラス応援するか。

戻つてきたり、なんだかざわついてた。

「なになに？どうしたわけ？」

近くにいたクラスメイトに聞いてみる。その娘は私の顔を見た途端、『舞ちゃん！』って言つてすがりついてきた。ヤベ、照れるつて。

『え、マジでなに？』

「大変なの！借り物競走に出るはずの北林くんが見当たらなくて…

…！」

…………。

鈴、あいつサボりやがったか。

『止むをえない。代役出そつ』

「代役……？」

キヨトン、とした声でオウム返しするクラスメイト。私はフツと微笑み

『浅野舞、出陣！』

そう叫んだ。

さあさあ早速舞の見せびるーーこつくよー

「よーい…………」

ダーン！――

スタートの甲高い銃声が、乾いた空気に響いた。それを合図に、みんな地面を蹴る。

「はいはい始まりました、借り物競走！実況は私内山が、解説は我が学園中等部の王子、高梨青海くんに来てもらつてまーす！」

キヤアアア、と悲鳴に近い黄色い歎声が沸き上がった。

青海は内心、だりいよ、なんで俺がこんな馬鹿馬鹿しいこと
んて思つてるが、そこは多重人格。しつかり王子スマイルだ。
な

「青海くんはD組だよね?じゃあやつぱりD組……えーと、浅野舞
ちゃん? 露原ですかねえ?」

内山が隣の青海に、ニヤニヤと笑しながら尋ねり。

「いえ、確かに自分のクラスに勝つてほしいんですけど、他のみんな
も応援します」

俺、博愛者なんで、と微笑めば、再びおこる女子の悲鳴。
青海はそれを嘲笑うかのように、一瞬だけ黒い笑みをもらした。も
ちろん誰も気付かないが。

「では、青海くんの話は一端止め、実況に入りましょー!」

そう言い、口ホン、とわざとらしく咳払いする。

「えーと、用意された紙には、それぞれ指示があります。その内容
とは……あ~と一端の紙をB組がとつたあ~!」

マイクを掴み、前屈みになる実況。青海はそれを冷めた目で一瞥す
る。

「続いてD、C、A…。さて、ではメモのネタばらしまます。ま
ず一番左の紙。Bが取つたものですね。それにはこんな指示が書い

てありました」

実況がその中身とは、と言いかけたところで、競走に参加してゐる4人が一斉に叫んだ。

「『』はあああああーーー?』『』

「ちよつ、なんだこれ。血の繋がつてないオタクの心をくすぐる萌え系妹?どこから連れてくるんだ!っていうか俺が欲しい!」

「庶民に土下座してもらつた千円札?そんなプライドが傷付く真似したくないから、下の者にやらせますわ」

「自分より頭の良いクラスメイト?はん、そんな奴いないね」

『好きな人の恋人の浮氣相手……。翔兄でいいや』

選手は全員、紙を握つた。

ツツコミ(幸希)不在なため、みなさん心中で存分にツツコんでやつて下さい。

みんなはうだうだ言いつつも、どこから持つてくる気なのか、探し始めた。各自の目的地へ急ぐ。

「フフフフフ、なにが起こるかわからない。それが借り物競走だ。ついでにメモ書いたのは私です」

内山が愉快そうに言つた。

第42回戦 体育祭～借り物競走～

第42話 つまずいたっていいじゃないか

「さて、あれから5分。皆さん探しに行つたきりですが… そろそろ戻つてもいい頃。1番になるのはどこのクラスでしょう?」

(なんかマジでかつたるくなつてきたな)

熱血な実況内山とは真逆に、冷めている青海。営業スマイルも面倒くさいのか、時々クールな表情が垣間見える。

「おお! 戻つてきた模様です! あれば……B組! B組です! ね、青海くん?」

「そのようですね(爽笑)」

青海得意技、スイッチ切り替え

そんな会話が繰り広げられているなか、全てのクラスが借り物を持って戻ってきた。

「一番は俺だあ——妹口リ萌え———」

B組、どこから連れてきたのか、美少女をお姫さまだっこして全力疾走。

「がんばって、お兄ちゃん」

「つおおおおおおおお———」

B組、更に加速。

「わーす」いですねB組。猫みみまでついてます！萌えパワー炸裂

」

「ははは。（馬鹿だわ）こいつ等」

青海は渴いた笑いで誤魔化す。腹の中は真っ黒だ。

「おほほほーおどきなさいせー」の愚民

「なぬー？」

突如現れた高い声に、バツとB組少年（以下少年B）が振り返れば、そこにはC組少女（以下少女B）が。あらうことか、御輿で担がれながら。

「てめつー卑怯だそ金持ちー！」

「卑怯じやなくて策略と仰つて欲しいわ！ただでさえ千円札を持つところ屈辱をうけているのに、これ以上惨めな思いは御免葬ります

」

ふさふさの扇を口許にあてて、高飛車に笑う少女。明らかに庶民の敵だ。きっとたくさんの者が殺意を抱いただろう。

「チクシヨーーおい、幹部！こんなのは有りかよーー？」

少年Bが悔しそうに顔をしかめ、本部のテントに向かい叫んだ。

「有りです」

「チクシヨオオオオオー！」

が、玉碎（笑）

猫みみ美少女を抱く少年と、手下に担がせる少女。普通の体育祭ではありえない光景だ。

「いやー、実に接戦ですvvね、青海くん」

「… そうですね」

爽やかな笑みに、少し黒が入った。だが他の者どうとか隣にいる内山でさえそれに気付かない。

「さて、他のクラスは……？」

実況がキヨロキヨロと見渡す。すると視界にひとりのメガネ少年が入った。

「あれは A組ですね。しかしどうこうじでしよう？たつた1

人です「

内山の言つ通り、A組少年（以下少年A）は一人でゴールに向かつていた。

「A組は確か

「自分より頭の良いクラスメイト、ですよね」

「それそれ！さすが星宵学院の王子ツー！」

「そんな大袈裟な」

小さく笑い、謙虚な振る舞いをする青海だが、心の中は、当たり前だろ分かりきつた事言つてんじゃねえよ。と、かなり腹黒い。

その内にも、少年Aは走る。こう叫びながら。

「ハハハハハハ！この僕より頭の良い人なんかいないね！つまりは僕が僕を連れていけばいい！何故なら僕がいちばん頭良いから、そして僕のお題が僕より頭の良い人であつて、だから……あり？」

だんだんと声が小さくなる少年A。

「混乱してますね～。まあ確かにややこしいんですけど

「……といつか、借り物無しつて有りなんですか？」

「いいんじゃないですかあ？借り物が自分より頭の良いクラスメイトで、自分より頭の良いクラスメイトがないから、つまり借り物

は自分自身なわけで……あり？」

内山さえも混乱する始末。青海は『「わあ……」ここが田で見た。』

しかし少年A。借り物が自分自身のはいいが、運動神経はよろしくないらしい。体育会系のB組、楽してるC組との差は大きい。

「これで全員揃いましたかね。 おや、なんか物凄い速さで走つてくる者がいるんですが」

実況のなんなんでしょうか、という声は搔き消された。

うおおおおおーーーー

校庭に響く、太い声色。
みんなが振り向いた。

「あれは……D組！？D組です！鬼のような形相で走つてますっ」

(アイツ、やつと来たか)

知らず知らず、笑みを浮かべる青海。鈴の代役で出たヒロインの登場だ。

その手には、ある1人の男の手が。 その男は、面倒くさそうな表情をしつつも、舞について走る。

『1位は私だあー！そして翔兄に褒めてもらつてついでに禁断の恋
しちゃうんだー！ね、翔兄』

「勝手に決めるな。」つていうか、なんで好きな人の恋人の…ああも

うだりい。えーと、その浮氣相手が俺なんだよ

いつもとは違う、ジャージ姿の彼は、そう、高橋翔。舞の超人的な速度に、多少汗を流しながらもついていっている。

『いいじゃない！つまりは私と翔兄が相思相愛つてことなんだからVVV』

「なにその妄想」

キヤツ、と頬を染める舞を冷たくあしらう翔。

「これは面白いことになつてきました！ひとりのA組、オタクB組、高飛車C組、超人D組……。いったい誰が1位を勝ちとるのでしょう？」

「見物ですね」

王子スマイル、未だ健在。やつぱり女生徒たちの黄色い声が響く。

競技のほうは、B組と舞が接戦中。C組が少し遅れ、A組が最後。

そして、ゴール直前、舞と翔が、今テープを

ベチャツ！

「『ふ、ふ、ふ、ふ、』」

「……」

数秒間の沈黙

「 び、B組です！1位B組！なんてハプニングでしょう！D組、高橋先生をまきこみ派手に転倒しました…これはあまりに恥ずかしいです！」

『ぐはあつ…。翔兄、すんませんマジでうりうくす』

「 今のお前の好感度一気に下降した」

「NO――――――！」

結局、D組は3位となる。

「 ……なんで何も無いところで転ぶんだ」

青海の眩きにて、答へはなかつた。

トントン、と爪先を軽く叩く。数回屈伸して、深呼吸。わつきの借り物競走は3位になつちやつたから、僕等が取り返さなきや。

『ガンバレよ幸希ちゃん!』

肩を叩かれ振り向けば、膝を赤くした舞ちゃんが立っていた。鼻の頭には、絆創膏が貼つてある。

「舞ちゃん」

『いやー、やつぱり幸希がいるといいねえ。貴重なツシコだもん』

キヤハハ、と笑う。先ほどのマヌなど悲しいへりこ氣にしていないよつだ。羨ましくなるよ、その岡太さ。

「藤森ー、そろそろ行かなきやつて……舞ーー！」

ああ、流華ちゃん登場。

「舞イイイー！怪我はない？大丈夫？ああ！膝がツ鼻がツなんてこと……！」

嘆くよつとして、がくつとうなだれる。相変わらず舞ちゃん至上主義だ。ため息が自然といづれれる。

「流華ちゃん、行くわ」

次は障害物競走、僕等の出番。流華ちゃん手を差し出したが、

「うわあがーー」

流華ちゃんなんとかついて、舞けやんを抱きしめた。

……別にここナビや（涙）

第42回戦 体育祭～借り物競走～（後書き）

次回は障害物競走

第43回戦 体育祭～障害物競走～

第43話 必ず怪我する奴がいるんだよね

障害物競走に出るのは2人。先に走るのは僕だ。コースを見れば、いくつか障害物がある。ただ真っ直ぐ走るよりはおもしろみがあるといい。

チラリと走者を確認する。

やつぱりいちばんの敵はB組かな。運動能力でこの学園に入学したんだから。

A組は頭良いけど、それだけって子が多い。なにか作戦立ててそういうから、油断できないけれど。

C組は、……令嬢とか子息だからなあ。自力で走るとは思えないや。

「ま、とりあえず敵はB組ってことで」

足首をまわしたり、腕を伸ばしたりして、軽く準備運動する。

少し離れた所にいる流華ちゃんを見ると、目があつた。流華ちゃんは声に出せらず、口許を動かす。読み取ると

が、ん、ば、つ、て

「…………もひろん」

返事代わりに、微笑んだ。

「よーい……」

季節の狭間の空に、響く銃声。
一斉にみんながダッシュした。

最初の障害物はハーダル3つ。まあ王道だよね。大して高くないから、誰もひつかからない。

でもやつぱり運動能力が必要。僕はB組と並んだ。後ろを振り返るほど余裕はないから、A・Cがどうなっているかは分からぬ。

次の障害物は

「……なにアレ」

目の前には、脆そうな壁が。赤と青に別れていて、隣には実況の内山先輩がいる。

なんだか、バラエティを思い出す。

「フフフ、第一の障害物はクイズです！当たりだと思つたら赤に、ハズレだと思つたら青に突つ込んで下さい！」

意気揚々と説明する内山先輩。いやいや、なにそれ。テレビじゃないんだから。

「まさかハズレには粉があつたり？」

「おお！ヘタレン冴えてる」

パンツ、と手を叩く実況。

「ヘタレン！？なにそのあだ名！ヘタレか？ヘタレからきてるのか！？つていうか、なんで初対面なのにヘタレって言ひの…！」

そういう（どういう？）してる間に、A・Cもきた。ヤバイ、クイズと言つたらA組が有利だ。

僕もそんなに頭悪くないほうだけど、A組に入れる程良くない。うわ、Aくんかなり笑つてるよ。なんかもう勝利確定みたいな顔してるよ。

「では問題です！」

「どこから流れたのか、チャチャン と聞こえる。

「太郎くんはキャンディを5個持つていました。太郎くんは友達の慶太くんに3個あげました。だけど1個は返されました。その後妹

の加奈に2個あげ、同じ個数ガムを貰いました」

(あ、これなら分かりそつ)

その安心を、内山先輩は見事にぶち壊す。

「さて、太郎くんの好きな娘は聖子ちゃんである。か×か」

前ふり関係なし！？

「ついでに太郎くんとは僕の事です。内山太郎と申し上げます」

殴りたい！ものすごくこの人殴りたい！！

スナイパー並に人のムカつきポイントを的確についてくる…「ゴル
13も真っ青だよ！」

「ふつ、なるほど。これは だな」

「えー！？何を根拠に！？」

「分からぬいか？内山先輩はこれを機会に聖子ちゃんに告白したい
んだよ。つまり、答えは だ！？」

そつ叫びながら、名も無きB組少年は赤の壁に突っ込んだ。結果は

バフツツツツ…！

「ブツブツ。答えは×です。だって、聖子といつのは僕の母の名前ですもん」

ざーんねーん、と粉に埋もれたBくんを見て言つ実況。ああ、なんて哀れだ。

「バカだらうアイツ」

隣にいたAくんが、メガネをくいつと持ち上げ呟く。そして青の壁を破壊し、走つていつてしまつた。

「ちよ、なんだよこれ。いちばん最初に突っ込んだ奴を犠牲にすれば、他のやつ失敗せずに行けるじやん」

有り得ない、といった表情で文句をこぼすじくん。うん、激しく同感するよ。

「まあ、そこに気付くかどうかが頭脳プレイですよ」

「コラ、と笑つ内山先輩を一警し、僕とじくんはA組を追つ。

嗚呼、早速脱落者が。

やつぱりじ子息様は普段走らないみたい。どんどん差をつけて、秀才君も追い越して、僕は1位に踊り出た。

このままいけば、確実にとれるかな?なんて期待して、またもやきたよ、障害物。

次は、飛び箱が置いてある。しかも、笑えないくらい高い。

「……いやいやいや」

いくらなんでも、これは無いでしょう。体育の授業で8段はわりと楽に跳べたけど、田の前のこれは15段。

いじめか？体育祭にかこつけていじめか？競技を上手く利用していじめか？

『幸希ファイトー。お前なりでさるー。』

応援席から舞ちゃんの声が聞こえる。いや、普通に無理。

僕が畠山としてると、秀才君と子息様が息を切らせながら、僕の隣へ。共に見上げる。

「なんだよこれ」

うん、「もつともだね。

「……平野」

C組がパチン、と指を鳴らした。その瞬間黒の服纏った男がサッと現れる。

「奴を用意しろ」

「はっ！かしこまりました」

そうアシテ、男が呼んだ男は

……巨神兵？

「お呼びですかぼつちゅま」

「ああ。僕を担いでこの跳び箱跳べるか？」

「お安いご用」

巨神兵は頷いて、命令の通りじくんを担いで跳び箱をとんだ。15段の跳び箱を。

「え、いや、ちょっと待って。どこからいつこめばいのか凄い困るけど、とりあえずアレは有りなの？」

ズルじゃない?と、本部の人を見ると、目があつたひとりがグツ、と親指をたてた。

え――――（遠い田）

僕がぽかんとしてると、助けを出すように実況内山先輩がマイクにむかいこいつ言つ。

「さすがに115段はきついですか?では、そんな貴方にビッグチャ

ンス」

……ビッグチャンス?

「跳び箱の横に大きなハンマーあるでしょ?それでいくつか段を減らして下さい。だるま落としつぼく

確かに、隣にはハンマーがある。だけどそんなルール あり?

「……仕方ない」

最早常識は通じないらしい。ならばもつ蹄めて、無茶しよう。

それに、運動能力には自信あるしね。体育科のB組と同じくらいだと思う。一応青海よりいいんだよ？舞ちゃん程じやないけど。

スコンツ
スコンツ
スコンツ

「なんか、あっさり抜けるな。拍子抜け」

スコンツ
スコンツ

只今10段。Aくんは後ろから僕の様子見をしてる。

「こんなもんかな」

僕は咳き、跳び箱に向かい走った。大丈夫。きっと跳べる。自分に言い聞かせた。

ダーン！――

着地の音が響いた。一瞬深まる沈黙。だけど、すぐにそれは歓声によって壊される。

キヤー、とか、おおおおーとか、いろいろ聞こえる。けっこう気持
良い。

さて、もう障害物はないみたい。Aくんはさきつと跳べないだらつ、

Bくんは戦闘不能。

予想外の展開だけど、やつぱり最後は綺麗に終わらせなきゃね。

田の前を走るC組の背を追い掛けた。あと少し。ゴールは間近。君
が「ゴールするのと、僕が追い越すの、どちらが早いかな。

なんでだろーね、スローモーションで見える。ああ、あと少し。あ
と少し。結果は

「ゴオオオオオル！！見事逆転し、1位C組です！先ほどの汚名返
上なりました！」

「たまには僕にもかっこつけさせてよね

女の子の黄色い声が響いた。

第43回戦 体育祭～障害物競走～（後書き）

いつも幸希の扱いが酷いので今回は花を持たせてあげました！

第44回戦 体育祭～リレー～

第44話 バトン落とすとみんな視線で責めてくるよね

フフフフフフ……。

笑いがとまらない。だつて…フフッ、ねえ。

ブッ。クク、ふう

ふふつ

え? キモイって? 大丈夫、百も承知よ。

だつて、これは笑わずにいられない。やつと、やつと私の出番がきたんだから!

『きた。これからが私の時代よ。天下とりよー下剋上よオオオオオ
ー!』

「うるさい」

『ひふつ

私が高笑いしていたら頭をはたかれた。ナンセンス! (え
叩いた犯人をキッと睨めば、呆れた瞳と目が合つ。予想通りの人物
だ。

『テメ、なにすんだチクシ三一』

「黙れ。空気が汚れる」

『どういふ意味だコノヤロー！』

「やうこつ意味だコノヤロー！」

ムカつく！激しくムカつく！その涼しい顔、原型留めれないくらいに殴りてえええ！

「ちよ、ちよっと舞、高梨くん喧嘩しないでよー。」

そつまつて、私を押さえるクラスメイトの美紀。あ、美紀はリレーの第1走者ね。リレーは4人出るんだ。つて、んな事はどうでもいいイイイイー！！

『止めるな美紀イー！一発殴らないと氣がすまないッ』

「すぐ暴力にいくあたり低レベルだよな」

「高梨くんも煽らないー！隆之、傍観者になつてないで助けてよー。」

美紀は私を押さえつつ、リレー第2走者の隆之に懇願の目をむける。隆之はため息をつきながら、私達に近づいて

「青海、他のクラスの奴に本性バレるぞ。浅野、翔先生って、おとなしい娘が好みなんだって」

その言葉が耳に届いた瞬間、私はピタリと止まった。今、ものすごく重大なことを聞いた気がする。全機能停止。

『隆之……それ確かな情報?』

「本人に直接聞いたから間違いないと思うな」

マジかよ。あの翔兄が、おとなしい娘が好み……?んなバカな。いや、でも恋人の愛姉もそんな感じだし。

『浅野舞、今日をもつて大和撫子になりますー。』

「切り替え早ツ」

自分の性格を変えるなんてゴメンだけど、愛しき人のためならなんだつてするわ!汚い言葉使いやめます、平和主義者なります。だいたい翔兄しつとり系が好きだなんて、もうす・て・き▽▽ああ、もううなんていうか!愛されるより愛したい

『激ラブ~』

「頭トリップしてるぞ。戻つてこい」

青海の声にハツとする。ヤバイヤバイ。意識がどつかいつてた。
ダメだね、恋する乙女は悩んで揺らいで、どんどん妄想の世界に入
っちゃうわ。

そつして現実と妄想の区別がつかなくなるんだね。ストーカーも元
は恋する乙女だったってことよ。つまりストーカーに罪は無い。い
や、それとも恋におちたら犯罪ストレスレなのか?だけど恋泥棒とか

言うよね。あ、分かつた。ストーカーは泥棒まではできない、恋の犯人なんだ。ちょっと臆病なんだね。

あれ? なんでストーカー談義?

「とにかく、リレーは協力しないと勝てないんだからね? 喧嘩は先ずお預け。分かった?」

『はーい』

美紀の言葉に手をあげて返事する。美紀は『よし』と頷いた。

「ただでさえ青海と浅野は仲悪いのに、バトン渡し大丈夫か?」

隆之が私達をチラリと見て呟く。そう、第3走者が青海で、アンカーが舞様なのだ。

え? だつてアンカーツて目立つじゃん? なんかかっこいいし。私はアンカー以外嫌なのさ。

「大丈夫だよ。俺がこんな民衆の前でそんな事するわけねえだろ?」

「本当か?」

「ああ。バレない程度にバトンでコイツの頭を叩くだけにしつくから」

「それ大丈夫言わないイイイイイイ!...」
『てめええええ!...』

美紀のツツ「ミミと私の叫びがハモる。

「マジでムカつくんですけど。かなぶんかと思つて触つたら、ゴキブリだつた時と同じくらいの嫌悪感だよ。

私はその時、絶叫したね。あまりの怒りに、踏み潰したよ。

素足で（今ひいた奴、君とは友達になれない）

なんだかんだで、リレーが始まった。それぞれ配置につく。

リレーは一人50m走るんだけど、アンカーだけは100mなんだ。言つておくが、私は50走すげえぞ。ギネス保持者だからな。5秒きつてるからな。

まあ、嘘だけど。

それは嘘としても、マジ速いぞ。陸上部から必死に勧誘されたしついでに当時の私は料理部だつたから断つたけどね。

「よーい……」

銃声が鳴り響いた。ついにリレーの始まりです。

第45回戦 体育祭～リレー～

第45話 鳴かぬなら、振り向かせるホトトギス

どうも、藤森幸希です。

今回は僕が視点兼実況を務めさせていただきます。

さて、今のリレーの状況だけど、第一走者が

「なんでなの」

隣から聞こえたピリピリした声。僕は「ほれそつ」なるため息をなんとか堪え、横の彼女に目を向けた。

「……流華ちゃん。遮るのやめてくれない?」

「だつておかしいじゃない」

即座に答えられる。

なにが?と聞えれば、流華ちゃんはムツと口を尖らさせ言つた。

「だつてだつて、なんでリレーなの?—なんで私の障害物競走とば

それでゐるのよー?」

ヒステリック氣味に叫んで、僕の肩を勢いよく揺りす流華ちゃん。思いつきりハツ当たりだと思つただけど。

「まあ、物語上の事情とこひ」と

「何よその事情ー! 言いつておくナビ、私けつひく活躍したわよー? 位こもなつたのよー?」

「うそ、すいご勇ましかったね

「でしょー? なのにアンタひとつ良いくこと取つしゃがつてH H H H
!」

「ちゅつ、ストップ、ストップー首絞まつて…つわあああー」

* * しばりへお待ちトセコ *

なんとか怒る流華ちゃんをなだめ、解放された。僕いつかこの娘に殺されるんじやないかな。

……保険入つておこづ。

さて、話変わってコレーのはづだけど、流華ちゃんに殺されかけた間に第一走者の美紀ちゃんはもう走り終わっちゃつたんだよね……。

「ごめんね美紀ちゃん。正直、全然見てなかつた。……うん、ごめん。チラツと見えた時2位だつたのは覚えてるんだけどね。

そういう事で、今は第2走者の隆之。さすがリレーの選手だけあって、速い。それでもやつぱりB組には叶わなくて。今のところ美紀ちゃんに引き続き2位。

A組もC組も一般的には速いんだろうけど、僕等D組との距離はだいぶ広がつた。何かが起らぬ限り、最下位は有り得なそう。

さて、と……。B組は体育科だけあつてレベル違うなあ。つていうかさ、クラス対抗な時点でB組が圧倒的に有利じやない? 体育科なんだから、体育祭だつてねえ。

けつこううずぼらだな、この学校。せつかから滅茶苦茶なルールばっかだし。本当に本当に名門校?

私立ならもつと、伝統がどーのーの言ひそつなのに。規則も緩いんだよね。

「藤森、話すれてる」

「あ、確かに。つて、流華ちゃん、人のモノローグ読まないの」

「モノローグつて、口に出してたわよ」

「えつ! ホント! ?」

「嘘に決まつてんだろ。騙されてんじゃねえよ、馬鹿」

ハツと見下すよつに鼻で笑う。今の声、温度で表すなら間違いなく氷点下だ。

「……流華ちゃん、最近僕にも毒舌になつてきたね」

「舞しかこらない」

「こや、ちよつと流華ちゃん?」

「舞以外みんな死ねばいいのに」

「流華ちゃんシンシン!…?」

「そつすれば、私と舞だけのH'テンの園……>>」

「意味わからないから!…これ以外おかしな道進んじや駄目だつて!しつかり流華ちゃん!…」

うつとり、と夢の世界に入りこんでいる彼女を必死に呼びかけ、戻した。なんかさあ、僕いろいろと揃な役回りだよね。

こんなに美人なのにもつたいたい。そんなんじゃ、彼氏もできないよ。

いや、できないんじゃなくて、つくれないのか。そうだよね、舞ちゃん至上主義だもんね。女の子LOVEMEだもんね。

「本当、揃だなあ……」

「は？ なにがよ」

「秘密」

パチン、とウインクしたら、不審な目で見られた。ひどくない？ 少しは頬染めたりしてくれると嬉しいんだけど。

（まあ、持久戦でがんばりますか）

眩しそぎる太陽。雲ひとつない空の下。たくさん歓声と、走る少年少女。輝く汗は綺麗で、心がくすぐられる。

友達以上恋人未満？ 取り扱いたいボーダーライン。

こんなに甘酸っぱいのは、きっとない。この青い春を楽しもう。延長戦でもいいよ？ いつか振り向かせてみせるから。

天気は快晴、風は良好。夏はまだまだ、続きそう。

第46回戦 体育祭～リレー～

第46話 終わり良ければ全て良しなんて事ない

どうも、主人公なのに前回まったく登場しなかつた浅野舞です。

時々あたしのいない話あるよね。ムカつくんだけど。

だいたい幸希がでしゃばりすぎなんだよ。あたしの流華に手を出しやがつて。

あー、ムカつくわ。

……え？ リレー？

ああ、うん。今青海にバトンがわたったところだよ。今はまだ2位。

アイツ転んでくれないかな。かなり派手こそ。

んで、いつきにパン。そしてそれをあたしが華麗にひきぬきーとか、カツコよくね？

でも、そんなんあたしの計画を青海は「じどり」と壊してやがる。

え、なんかB組を抜かしそうじゃん。やめろって。あんたが1位になつちゃつたら、あたし大して田立たなくなるじゃん。

「キヤー！」

「青海くん素敵イ！－！」

……ケツ。見た目に騙されても。可哀想な娘たち。なんでの腹黒に気付かないかな。

あたしは無性にイライラして、地面を蹴った。グラウンドの細かい砂が、空を舞う。風に流れ、それは消えた。

「ケホッケホッ！ばか、何するんだよつ」

隣の走者に被害を加えて。

『あはは、『めん。…………イイ氣味』

「テメー、今なんつったあー？」

いやん、地獄耳 世の中には知らないほつが幸せな事がたくさんあるのよッ。

なんて、思っていたら、もつすぐあたしの出番じゃん。
そろそろ体勢に入るか。

「おひがひさん、頑張つてー！」

…………え？

黄色い声援に混じつた、一際大きな応援。その声に囲はれてわづいた。

そりやそりだひづね。だつて、今【おひがひさん】って書つたもん。
あの魔王を、ちやん付け……。過激なファンクラブ会員でも、そんな風に呼ばないで。

こんなにたくさんいる観客のなか、誰が言つたかなんて分からぬ。
なんとなく氣になつて、走る青海に田を向けた瞬間、わたしは見
た。

笑つてる顔。

わたしに見せるようなふてぶてしい笑みじゃなくて。
みんなに見せるような爽やかな笑顔でもない。

心の底から笑つてるような、優しい微笑。

(なんだよ、それ)

らじくない。

あいつらじくない。

何これ、ムカつく。もつのはず！」とムカつく。

そんな、誰にも見せない笑顔。いつたい誰にむけて？

「おい、バカ女」

わたしがムツとしてたら、背後から声をかけられた。

そいつはバトン、と小声で繰り返す。ああ、受けとれって意味ね。

つていうか、何？あんた結局B組追い越したんだ？

なんかもう、全てに大して腹がたつ。だからあたしは

『つねりやー！』

「痛ッ！」

バトンを受けながら、思いきり砂を蹴つて目にかけてやった。

「つ……テメエ」

『はんー・自業自得だね』

わたしあはう叫び、疾風の如く走る。

キヤーとかイヤーとか、女の子たちの甲高い悲鳴が聞こえたけど、
そんなの気にしない。

吹き出る汗。太陽はギラギラ。もう、周りなんか見えない。突き抜

ける風と一緒に化して、ああもう

消えてしまいたい。

「ゴオオオオル！！1位はD組です！体育科のB組を抑えましたあーー！」

自ら切ったホワイトテープ。本当は止まりたくなかつた。ずっと、走り続けたかつた。

透き通る青空。わたしの気持ちとはまるで真逆で。1位になれたといつのに、わたしの心はまったく晴れてくれない。

それはきっと

『お前のせいだ！』

「意味分かんねえよ

あんたなんか、大嫌い！

第46回戦 体育祭～リレー～（後編）

声の正体は、また後ほど登場させまわー。

第47回戦 体育祭～昼休み～

第47話 晴天屋上昼寝日和

午前の競技を終え、一旦昼休みに入った。この間に、昼食を食べたりする。

「舞、どこ行くの?」飯は?

『ちよつと屋上へ』

わたしは母特製弁当を持って、流華に背を向けた。

行き先は流華に言つた通り、屋上。うちの学校、私立のくせに警備甘いんだよね。鍵はかかってるけど、人によつてはピッキングできる。

その人は誰かといつと、腹黒魔王だつたり、素敵やる気なし教師だつたり、赤髪ヤンキーだつたり……。
ついでに私もできるよ。最近コツを掴んだのさ

『ふんふんふ~ん』

わたしは鼻唄を歌いながら、屋上へ続く階段をかけのぼる。

そして、扉の前まで到着。見るにすでに錠ははずされていた。

(……予想通り)

重いドアを押す。

目に入る眩しい青空。ギラギラな太陽とは裏腹に、吹き抜ける風が爽やかで心地好い。

わて、このへんで屋上へ来た目的を話わ。

そり、この私が昼休みという貴重な時間をつぶしてまで来た理由。

それは……

『「この不良息子がああああああ……！」』

「ゲツ、舞！」

私は寝そべつている鈴に、飛び蹴りを炸裂した。

見事、腹の上に乗つてやつたぜ ぐえつ、と可哀想な声をだす鈴。

はん、いい氣味だね！

「な、なにするんだよ……！」

お腹を抱えて、上目にわたしを見上げてくる。微妙に涙目だ。……
太ったかな、わたし。ショック。

『何するんだよ？むしろ』「ちが何するんだよだよー。』

「意味わかんねえからー。』

わたしの気持ちを理解してくれないのね！？ひどい、ひどすぎるー。

『あー、そうですか。そうですか。もう分かりましたよ』

『何が分かっちゃったんだよ』

『ホント最悪！離婚よッ』

『結婚はー6ならねえとできねえー。』

『いやいや、シシコリビングおかしいくない？いつ私が鈴と結婚したのよ』

なんで自分で自分のボケにシシコリを入れてるんだ私。一番悲しい行為だぞ。

鈴が大きなため息を吐いて尋ねてくる。

『つたぐ、…で？何の用？』

『な、何の用ですかって！？それを私に言わせるのー。』

「他に誰がいんだよ

あ、まともにジッコリ入れられやった。

何の用？何の用つて決まつてゐるぢゃん。このあたしが翔兄にお弁当『あーん』や、花形先輩にラブホールを断念までしたのは、これを言つためー

『今まで何していたああー。』

「…………は？」

『競技サボつて何してた？応援さえせずビリヒいたー。』

「あー……」

なるほどね、と言つた顔で鈴が呟いた。そしてもう一度、ひりふる、と地面に寝転び、昏睡体勢。

『つて、寝るなー。』

「つてーお前ばか力なんだから、少しば手加減しろよ」

鉄拳を浴びせば、叩かれた頭をさすつて、ぶつぶつ文句をこぼす。

彼の赤い髪が日の光にあたつて、キラキラと輝く。夏休みが終わつたからメッシュは入つていない。

つていうか鈴、なんで制服なの？どんだけやる気ないんだ。

ボタンは開け放題で、胸もとだけではなく腹筋まで晒している。田のやり場に困るよ、そのHロイ格好。

「悪かつたな」

不意に鈴が言つ。今まで黙つていたから、ちょっと心臓がはねた。あたしのガラスハートは纖細なのよ。

何が? と聞く。『したとこで私は口をつぐむ。たぶん、それがまでの私の怒りに対してもう一つ』

『…謝るなり、サボりなきやいの』

『暑いし疲れるし苦手なんだよ』

よつね面倒へやつてじやねえかオイ。

『……午後は出でよ? 団体競技なんだから、協力しなきや』

そつと鈴は、協力ねえと呟いて瞼をふせた。

まったく、協調性がないうらありやしない。

「舞がそこまで言ひながら出でやるか

……マジ?.

「自分で言つのもなんだけど、運動神経には自信あるからな

『鈴……大好きー。』

「うわー、きなり抱きつくなッ！」

さすがあたしの相棒だわー、やるときはやる子だつて、信じた！

『あー良かつた良かつた』

「せりやどりも、なあ、なんか飲み物もってね？ずっとソリで寝てたらのど渇いた」

…「ソリですかと寝てた？何のために今日来たんだ」アンタ。

そつ思こつつも、わたしは鈴こべットボトルを手渡した。なんて優しいのあたし

『はい、サイダー』

「お前、体育祭にサイダーってどうなんだ」

『いいじやん。暑いと炭酸飲みたくないの』

「しかも口つけ」

『文句言わないー。』

「へーー」

余程のど渇いていたのか、ぐびぐびと喉を鳴らして飲む。

(よく炭酸をそんなにつきに飲めるな)

鈴の首筋には、つらすら汗が滲んでいた。やっぱり動かなくとも、暑いよね。

焼けたせいか、肌が赤い。そういうえば鈴って、日焼けしても黒くならないんだよ。赤くなつて、また白に戻る。つらやましい。

あたしすぐ真っ黒に焼けちゃうんだもん。

「ふはつーあー美味しい」

そつ氣持ちよからずつて言つて、わたしにサイダーを返す。だいぶ減つてゐるんだけど、鈴くん。

『鈴お弁当はー?』

「あー、教室」

忘れてきたのか。あ、違つ。朝からここにいたんだつけ。

『仕方ない。少しだけあげよつ』

『マジで?』

『出でくれるんでしょ?』

そう聞くと鈴は、もちろんー!と笑つた。

これも青春だよね。確かに屋上は風と陽射しが爽やかから、眠くなる気持ちもわかる。

わたし達は、ふたりでお弁当をわけあつた（途中でバトルしたけど。だって玉子焼きの数が3つだつたんだもん）。

友達以上恋人未満？ いいえ、大切な相棒です。

第47回戦 体育祭～昼休み～（後書き）

恋愛対象に入らない男友達との友情は、長続きするとと思つ。

第48回戦 体育祭～午後の部～（前書き）

後半、幸希視点です。

第48回戦 体育祭～午後の部～

昼休みが終わつて、午後の部が始まる。

戦場という名のグラウンドへ行く途中、目の前に青海がいたから、とりあえず飛び蹴りしてみた。

第48話 Do you hate me?

I
hate
you.
.(me
tooしか期待しないわ)

う
い、
痛
い
・
・
・
！

「そりやあれだけ派手に転べばな」

『白々しい！あんたが避けたからじゃん！』

おかげであたしは、傷だらけのシェリーさ。これから競技なのに、

痛いんだけど。血でてるんだけど。

『チクシロー…【ねいじん】をひりお】のへき』

『ついでないと聞こえるのよつ』近くへ、アイシゼビヘツと反応した。

『すこぶる可愛いあだ名なじと。あの声、だれ?』

「……お前には関係ないだろ」

不機嫌な声で青海は答える。睨みすがりだつてば。そんなに凄まぬくても。

『いいじゃん! 教えてよつ。なに、彼女とか?』

そう言つて詰め寄ると、やこつはあからわまに嫌な顔をした。失礼だなオイ。

青海は近付くあたしを片手で制しながら、青海はため息をつく。

つて、痛たたたたた! ! 髪つかむなバカ!

「つやー」

『な、なんだよ。誰か教えてくれるくらいいいじゃんーじゃないとこれからお前の【おつちやん】って呼ぶぞ! ?』

「……」

『思いきり嫌な表情してんじゃねええ! ! あたしだつて嫌じゃボケー!』

叫んで青海の腕を振りはらつた。パシッと乾いた音が小さく響く。

「あるとそこつは叶つちして、あたしから離れた。

『ちよ、ちよっと』

「…お前さ、俺のこと嫌いならどうだつていいんじやねえのか？俺が、誰を好きとか、大切だとか」

冷めきつた瞳が、私を射抜く。あまりに冷たいから。

（少しどづちをついたじやないかコノヤロー。す、少しだけだけどな。いや、ホント。うん、Little）

「そもそも、教える義理なんてないし？」

『ふつ、バカ言わないでちょうだい。あたしには、全てを知る権利があるのつー』

「ねえよ

『あるのー..』

「ねえって」

『あるー..』

「ねえ

『あ～る～！いい加減白状しぃ。神妙にお繩につけいッ』

「あ、翔と花形くんだ」

『うえ！？』

わたしは勢いよく青海が指差した方向に振り返った。
しかし、そこには誰もいない。チクショー騙されたッ！

『青海テメエ！…』

つて、あり？
い、いない……。

頭に浮かぶ、はめられたという文字。

『おひさしありがトノヤロホー！』

今にも人に殴りかかりそうなほど機嫌の悪い舞ちゃんを見た後、今
にも女の子が騒ぎそうな笑顔を浮かべている青海を見た。

絶対なにかあつたな、と思いつつ、僕はその親友の肩を叩いた。

僕だと分かつているだろうに、振り返った表情は、いつもより毒の抜けたものである。

「幸希」

「やつほ。機嫌よそそつだね」

そんなことない、と言つて、青海は普段のポーカーフェイス。

彼の機嫌が良い理由がなんとなく分かつていた僕は、その話題を出した。

「綺空ちやん来てたね」

にこりと笑つて言つと、青海は少し顔をしかめる。
なんか余計なこと言つたかな？

「ああ。……つてこいつが、その呼び方やめり」

……なるほど。

僕は心のなかで笑つた。実際に笑つたら殺されかねない。命は惜しいからね。

「おつと『メン。綺空さんね。なんか女の子つて、【ちやん】つたくなるんだよね、僕』

「病氣だろ」

「それは酷くない？」

青海はあまり女の子の子にちやん付けない。だいたい苗字で呼んでる。

舞ちゃんに對しては名前だけね。

「そういえば、流華ちゃんは何故かフルネームだよね」

流華ちゃんも青海の「じと、フルネームで呼ぶし。

「拙体やな前で呼ぶ仲じゃないからな」

だからフルネーム? どんな定義だよ。絶対変だと想つんだけど。

「そんなこと思ひまするなよ。小せえ男だな」

「ひどーっ! か心の中読むのやめて! ほー!」

怖いんだからまつたく! 付き合に長いけど、これには慣れないと、いつ身につけたんだ、その読心術。

「あ」

「え?」

青海が声をじぼすから、僕は彼の視線の先をたどった。セレーナ、綺空さんの姿が。

「って、ちよつと青海……！」

走つてしゃつたよあの。僕の存在無視？

「本当、仲が良いことで」

お互い溺愛してゐるもんね。【おひけやん】なんて呼び名、綺空さん以外に許さないだらうじ。

「まあ、綺空さん美人だし優しいし、気持ちは分からなくもないけど」

でも、あの声はヤバかつたんじゃないかなあ。女の子みんなビックリしてたし。

ただでさえ青海を呼び捨てる女の子は少ないのに（クラスメイトは別として）、【おひけやん】って……。

「だけど、青海は綺空さんに対して怒らないんだよね」

まあそれも愛故といつとか。女の子からの好感度は大丈夫なのかな？

「……ま、いつか。僕には関係ないし」

競技開始のアナウンスが聞こえて、楽しそうに話す青海と綺空さんを尻目に僕は走った。

途中、舞ちゃんに八つ当たりされたことは、まあ追記といふことで。

第48回戦 体育祭～午後の部～（後書き）

綺空が青海のなにかは今後明かします。たぶん、想像してゐる通りか
と（^_^;）

第49回戦 体育祭～綱引き～

第49回戦 当たつて砕ける

どうも、浅野舞です。どこの誰かさんのせいで、めちゃくちゃ気分悪いです。

「ふつ、まあいいや。体育祭が終わったら聞き出しちゃる」

今は競技に集中だ！

ただ今の成績

1位	… B組
2位	… D組
3位	… C組
ビリ	… A組

となっている。

2位だぜ2位ー！この舞さまがいるクラスが1位以外なんてありえない！

この際、誰のせいかは置いておいて、田嶋すば優勝ー！あの体育科クラスに勝つのかー！

『鈴、午後の競技って何があったつけ？』

「いや、俺が知ってるわけねえし」

『チツ』

「何ひちー？」

やつぱやる気なかつたヤツは使えねえな。こつこつ時は流華か幸希……。あり?どこ行つたんだあの一人。

ハツ!まさかあの二人、あたしに内緒で !

『いやああああ!流華は私のものよー!』

「その通りだわ舞ツ!」

『え?あ、流華』

「嬉しいわ舞。とうとう私、舞のものになれたのね。あ、でも私の心はいつだって舞のものだつたわよ」

『私も流華のものよ』

「さやーー嬉しそうで、でも出来れば、いつかは心だけじゃなくて身体も……!」

『いやん、恥ずかしい!』

「……幸希、早く来てツツコムしてくれ

鈴が小さく呟いた。

さて、氣をとりなおして。残りの競技は綱引きと全員リレー。そして、次の競技は綱引きだ。

わたし達の組は円陣組んで、氣合を入れ中である。

『全力でいくぞオオオ！！』

「オオオオオオオ！！」

『田指すは優勝オオオオ！..』

「オオオオオオオ！！」

『一人はみんなのために、みんなは私のために頑張るんだアアアアアアー！』

「オオオオオ……オ、オ？」

「なんか違うね？」

「みんなは一人のためにじやね？」

『細かいことは気にするなアアア……』

「オオオオオオオオオオオオ……（やけ）」

叫ぶだけ叫んだとこで、あたし達は配置についた。まずは一回戦。
相手はB組だ。

「初回から嫌なところと当たつたなあ」

ため息混じりに幸希が呟く。

『病は氣から。弱気になつたらダメだぞー。』

「うん。言いたいことはなんとなく分かるけど、使い方はおかしい
と思つ」

『人の揚げ足とるんじゃ ありません！そんなんだからいじめられる
のよー。』

「お母さんー？」

ハツ、バカ言つちや困る。わたしはこんなヘタレ生んだ覚えはない。

わたしは将来スポーツ選手と結婚するのさ。イーロー的な。

「おっこ、静かにしろ」

荒井先生に怒られた。荒井って誰？つて奴に紹介しよう。体育科B
組の担任で、体育教師。詳しくは39話を読もつ。

『だけど綱引きか……。あたし足には自信あるけど、力はちょっとね』

ほら、か弱い乙女だからさ?

そう言つたら、幸希が小声で返す。小声なのは、また荒井に怒られるのが嫌だからだねきっと。

「いや、でも舞ちゃん力あるでしょ。ガラスわつたり、ケンカで相手を入院させたりしてるじやん」

『あれは火事場の馬鹿力……。怒りのパワーだよ』

「怒ると怪力發揮するんだ?」

『まあそういうこと。だから怒らせてもよ

「いや、怒らせよって言われても……。そういうことは青海のまつが得意じゃない?」

分かつてないの幸希は、アイツに言われたらマジギレして、綱引きどころじゃなこつーの。

なんて思つていたら、始まりの令囃に銃声が響いた。体が持つてかかる。

『うおおおおおー引きひれてるー。』

不意打ちなんて卑怯だ!

「うわ、すごい力……」

『くそ、B組にせりがグビー部の賀川がいるから』

「よく知ってるね。つて…ホントにわざわざ……」

『前に告られた』

「マジで…?』

余程驚いたのか、幸希が綱から手を離す。

つて、バカか！綱引きなのに綱離すバカがどこのいるー。実はバカかこのやろー！

「そんなにバカ連発しないでよつ

『え？ す』』『ね幸希。心のなか読めるんだ。やつぱり普段魔王の側にいるから？ 感染があ……』

「こやこやこや、舞ちゃん声に出して『いたから

マジですか。あたしつて正直だな、うん。

「つていうかお前等ーのんびり話しある場合じやねえだろー。このままだよじや負けるぞー…?』

クラスメイトの光太に怒られた。

ムカつくなチクシヨー。でも確かに、このままじやまずいね。

『幸希、あたしを罵つて』

怒りで力アップ作戦よ。

「 の…！？いや、 そういうプレイは青海と……」

『誰が UME プレイするつて言つたアアアア…。 そいつを忘つたこと忘れたの？ついでに私は U だ…』

『 そつぱぶと、 あ、そつちか』 と呟く。そつちも何もねえよ。

『 ほり幸希、 早く…』

「え、 えーと…バカ」

『 もつと…そのぐらい慣れてるから…』

あ、 自分で言つて今悲しかつたんだけど。いや、 でもバカぐらい飽きるほど言われてるからな。

「バ、 バカドジマヌケ！」

『 もつと具体的に…』

「 単細胞。才脳。色気なし。妄想魔。いつぺん死ね」

『 なんだとテメエエエエ…』

いきなり辛辣じゃね！？

「 ほ、 僕じゃないよ！」

胸ぐらを掴むと、幸希は両手を顔の前で必死に振る。

「チビ。Aカップ。赤点常温」

『テメエかあ！…っていつか、言い過ぎッ。泣くぞあたし！』

標的をいきなり現れた青海に変える。

つてか、なんでここにいるんだコイツ。なんで普通に持ち場離れてるんだ。

『ぬあああムカつく！』

「ハツ。短気だな」

「ちよ、ちよっと舞ちゃん、青海！ケンカしてる場合じゃ

あたしが青海に掴みかかるうとしたとき

ドンッ

終わりの合図に銃声が響いた。

……え？ 終わった？

「B組の勝利！」

荒井が叫ぶ。

え～マジで？嘘。ちよ、泣きたくなんだけど。

『……あ、まあドンマイ』

そつみんなに笑ってみせたら、口組全員にじめられた。

『お、青海のせいなにこ……』
「舞、あたしはいつだって舞の味方よッ」

第50回戦 体育祭～全員フレーズ（前書き）

なんだかんだで50話まで来れました。読者のみなさまに感謝します
よーこれからもよひじくお願いしますね

第50回戦 体育祭～全員リレー～

第50回戦 なんだかんだで全員リレー

『なにこのタイトル。手抜きしてみたижやん』

あたしが独り言を呟いたら、いつからいたのか、青海が口を出す。

「じてんみたいじやなくて、実際してるだろ」

と。

びつてつてと聞くと、そいつはこつもの無表情で言った。

「綱引き短縮してるじやん。A組とC組

『……』

「なにに田んじてるんだよ」

いや、だつてあれは、ねえ？

ほら、たいして見せ場なかつたかい。あまりに呆氣なく終わつてさ。

『だからとばしたのや』

「やつぱ手抜きじゃねえか」

『………… わあ、最終競技いつてみよーー』

「シカトかでめえ」

つてことで、『全員リレー』です！

とりあえず足の速い奴は、最初と最後に集中させた。あ、もちろんあたしはアンカーね。それ以外は却下。

一番もいいと思つたけど、注目されるのはやつぱりアンカーでしょう。青海とアンカーの座を取り合つたけど、あたしの方が速いからね。青海は次に目立つ第1走者になつた。全員リレーって、みんな50メートルずつだけど、最初と最後だけは100メートル走るんだよね。

ついでにわたしの前は、わたし程じゃないけど、スポーツ万能の幸希。流華は確か前のほうだった気がする。あたしと遠い～つて、嘆いてたから。

いやあ、疲れちゃつて困るねえvvv

バーンッ！！

『うわっ、なになに？』

つて、今の銃声？え、もう始まつたの？不意打ちですかコノヤロー。

『うーん、やっぱりB組は早いなあ』

それに比べ、何やつてんだよ青海。最初が肝心なんだぞ？　1位以外許さないつーの。

なんて思つていたら、どんどん間合いを詰めていく。B組と張り合えるなんて、あいつ足早くなつたか？

なんか、それはそれでムカつくなあ。

バトンが第2走者に渡された。現在あたしのクラスは2位である。

『孝也ーファイター！』

応援は大切だよね、うん。がんばれ陸上部！その実力を見せてやれ！

「みんな本氣か。手え抜いたら怒られるな」

不意に隣から声が。

『うわっ！　つて、なんだ鈴か』

驚かすなよコノヤロー。いつからいたのさ。

「疲れんの嫌いなんだよな」

ため息まじりに言つて、赤い髪をがしがしと搔く。
おーい。今聞き捨てならない言葉を聞いたぞ。

『ちょっと、本気出すつて約束したじゃん。嘘ついたら針千本なら
ぬハリセンボンを丸ごと飲ますからな』

「それたぶんオレ死ぬ」

『大丈夫。鈴ならヘッチャラだつて。たぶん』

「そんな曖昧な信じられ方困るんだけど」

「お前らバカな言い合いしてねえで応援しろよ！」

怒られた。しかもまた光太に。チクショ一、鈴のせいだ。

わたしは『チエツ』と小さく舌打ちしながら、自分のクラスを視線
で追い掛けた。

今は……あり？なんか3位じやね？

え、なんで、嘘。いつのまに抜かれたのさ。2位つて金持ち学級の
C組じやん。

オイオイ、この少しの間に何があつたんだ。

なんでカメラ私達に向けてたんだよ。なんでこんなくだらない言い
合いを映してたんだよ。あ、くだらないって言つちやつた。

『うひ、気になるんだけど。かなり気になるんだがー。』

「ダンマイ舞！

あ、“まこまい”だつて。おもしろくな？』

『おもしろくねーーーもとはとくえびアンタのせいだ』のヤンキー
ー。』

「うわー、うひ。髪を引張るなーぐずれるだー。』

わたしの手を必死に払い除けよつとする鈴。何がぐずれるだつ！た
かが髪のセットにわたしより時間かけちゃつてさ？

むじるボーズにしてー！

『だいたいね、若い頃からそんな真つ赤つ赤に染めてると、将来ハ
ゲるんだからー。』

「ハゲねぇよーーー。』

『いいやハゲるね。神に誓つてハゲるね。月に代わつてお仕置きだ
ね』

「…舞、いい加減にしないと追い出すぞ。鈴、お前の待場にいじゅ
ないから」

そんな光太の指摘は、生憎わたし達の耳に届かなかつた。

第50回戦 体育祭～全員コレ～（後書き）

ドンマイ光太！

第51回戦 体育祭～全員リレー～

第51話 プライドと意地を天秤にかけて

みんな必死に走る走る。頑張ってるね。変わりがわりに走者にバトンがまわって面白い。

『見ろ光太。まるで人がゴリのようだ!』

「そーですねム 力様」

『しかしながらD組は3位なのだ?』

「お前が見ていいに何かがあつたんだよ!」

だからなにがあつたんだよ!

まあでも、2位との差はたいしてないから大丈夫そうだけど。

どうせC組なんて貧相なぼっちゃんばかりだろうし、抜けるっしょ。

「舞、鈴がC組抜いて2位になつたぞ」

『ああ、さすが私の相棒だ。讃めてつかわそー。』

「あ、もうすぐ俺の番だ」

『…ふひ、せいぜい頑張つてくれたまえ』

「ひざいんだけど。殺意湧くんだけど」

『痛ツー。』

光太のチョップがあたしの顔面に炸裂！しかも田口狙いやがったコイツ！

『田が！田がああああ！…』

「もひいい加減ウゼヒよそのキャラ」

そいつ言って地面に膝つくあたしを、無表情で蹴る光太。

「コイツやばいって！ 実は隠れヒだつたのか！」

今までそんな素ぶり見せてなかつたのにイ！

「あ、俺の出番だ」

そう言って、光太はコースに入る。そして何事もなかつたのよつとバトンを受け取り、走つていつた。

SIMプレイかと思ったら、放置プレイかよこのやうー。

『へへ、覚えてる…』

「よ、舞一、約束通り本気で走つてやつたぞ」

『おお鈴 後で』

「アッ…！」

鈴の声に振り返った瞬間、いつきにさわついた。

何事だと見れば、

(あ、流華………)

愛しの流華が、なんと転んでいた。

流華は表情を歪めながらも、直ぐに立ちあがり次の走者にバトンを渡す。

D組はこいつにビリ。鈴が『あちゅー』と呟いた。だけどそんなことより、流華の身体のほうが心配。

足とか捻つてたらどうしよう…

「ねえ、今の見た？」

「見た見た！ 絶対C組の奴わざとだよ。これだからプライド高いお嬢様は」

近くのB組の女の子の会話。いま、聞かせない言葉があった。

『……ねえ、それ詳しく聞かせてくれる?』

話しかけると、その二人組はお互い顔を見合わせてから、口を開いた。

「C組の娘が、葉月さんの肩にぶつかっていったの。さりげなくだつたけど、あれ絶対わざとだと思つ」

ね?ともつ一人の娘に聞いて、その娘も頷いた。

つまりは、なに?勝ちほしさに妨害したと。

へえーふーん。

つて、ふざけんなよ! -!

『ぬあああムカつくッ』

「ケンカなら付き合つざ?..」

『NO!-勝負はリードつかむ。負かしてやらあ

「でもビリだぜ?ちよつとキッイんじゃね?」

『そんなの問題ない。丁度楽勝すぎてつまらないと思つてたし、いいハンデだね』

打倒C組!絶対1位はもうつてみせる! -

幸希視点

勝ちたいのは分かる。負けを田指して走つてゐる人なんて、きっと一人もいないはずだから。

だけども、そういう汚い手は、……いただけないね。

第52話 ラブ・パワー

「また派手に転んだな」

いつからいたのか、隣で青海が呟いた。

「転んだんじゃない。転ばされたんだよ。C組の娘にね」

やや睨みをきかして囁つと、青海は『分かつてゐる』と答えて肩をすくめる。

流華ちゃんが転んだことに対しても、意外にも怒つてないらしい。

まあ、これで怒つたら不条理だ。逆に僕が青海に怒る。

「うぬさいな、アイツ」

ため息混じりに呟く青海の目線の先には、怒り狂う舞ちゃんの姿。余程立腹みたい。

多分その怒りはビリになつたことじやなくて、C組に対しても思う。仲良しもんね、あの一人。

「安心しろ、幸希」

「……安心?」

「もう△組をぬかした。」このまま行けば、最後にあのバカ女が1位なるだろ」

確かに、舞ちゃんのあの足の速さは超人的だ。B組の人よりもすごい。並外れた運動神経。だけど

「その必要はないよ。僕が全員ぬかすから」

「……ずいぶん自信があるんだな」

「だつて俺、青海より速いよ?」

ピクリと、青海が眉をしかめる。わずかに歪んだ表情。けれどすぐにまたポーカーフェイスに戻った。

「お前、一人称変わってる」

「……ああ、うん。間違えた。“僕”だつたね」

そう訂正してこうりと笑つてみせると、彼は気持ち悪い、と吐き捨てるように言つ。ひどいなあ。

僕はそつと天を仰いだ。午後になつても、変わらない眩しさを放つ太陽。反射的に目を細める。

滲みでる汗は不快だけど、時折吹く風が涼しさをもたらしてくれる。

チラリと隣の青海を見た。

……ホント、なんで汗かかないんだろう。

前にそれを尋ねたら、『王子だから』、といつぶさけた答えが返つてきた。

そのオレ様な性格は、王子といつより皇帝。舞ちゃんが魔王と呼ぶのも分かる気がする。

青海、僕にはあの王子スマイルを見せないし。

青海の本性を知らない娘が言つには、

『優しくて知的でさわやかで、しかも黒髪王子様フェイス▽▽▽らしい。』

まあルックスはモデル並だよね。中身だって、なんでもできる天才型だし。

「……3位か」

青海が隣で呟く。

1位は当然だけどB組。そしてそれを追いついたC組。D組は僅差で3位だ。

「もうすぐ出番だな」

「うふ。これで体育祭終わっちゃうのか。あっけない

でも、楽しかった。こんなに青春できる僕らはきっと幸せ者。

最後から3番田の走者が走り始める。僕は位置に着いた。

「幸希ッ！」

彼の声にあわせ、バトンを受けとり。思いきり、地面を蹴った。絶対、1位にならないといけない。

「マジギレしてるな」

やつにぼした青海の言葉は耳に届かず、風に消し去られた。

周りの応援が聞こえる気がある。だけど、なんと言つてるとまでは理解できない。余裕がない。

とつあえずじ組を抜く。

流華ちゃんを転ばせたのはあの娘の責任で。じ組は別に悪くないのだけど。

そんなに聞きわけよくない。

頭では分かってる。だけど怒りはおそれられない。

足に全集中をかけた。

あ……ぬいた。

そつ思つたときにはもう、バトンが舞ちゃんの手に握られていって。

「うおおおおおおー舞ちゃんの底力アアアーー！」

そんな雄叫びを轟かせながら、もろびついてくるペーストで他クラスと差をつけっていました。

「うわやひやひやひや……やつぱりあたいたいが一番ツー…

……あわがヒロイントーのかなあ。

そんなことを思いながら、額の汗をぬぐつた。

ちよつといっぢやつてる舞ちゃんだけど、刻々とゴールに近づいている。

そして今、テープを切った。

「逆転しましたアアアー！D組優勝ですー。」

歓声があがる。続いて、B組が2位に踊りでた。

「…………よかつた…」

弱々しい声に振り向くと、そこにはホッとした様子の流華ちゃんが。

膝から血が滲みでていて、やや涙目だ。

「ぬ、流華ちゃん。消毒しないと

「…よかつた。本当に、よかつた。私、あんなへマして。でも、あなたのおかげで、笑える。喜べる

「流華ちゃん

」

「本当にありがとうございました舞ツー！」

「…………え？」

僕の予想に反して、彼女は横をすり抜けた。振り向くと、流華ちゃんは舞ちゃんと抱きついている。

「流華。あたし、流華のためにがんばったよ

「まいーー」

「……ツ。もう、大好き！」

頬擦りする流華ちゃんと、それを気持ちよさそうに受け入れる舞ちゃん。

危ない。禁断だ。友達の域を越えている。

「……まあいつか」

彼女が、笑ってくれたなら。

「だからお前はヘタレなんだよ」

「いきなり現れてヘタレ言つな、青海」

第53回戦 体育祭終了

わたし達のクラスは見事1位となり、優勝カップを手にいれることができた。

第53話 罪な女、罪な男

「えーと、なに。なんていうかまあ、優勝おめでとうとか言つたら嬉しいのか?」

体育祭が終わり、教室に戻つたわたし達に向けて翔兄はそう言つ。

教師として、その言葉はかなりの暴言じやない?まあそんなところも素敵だけど

『ねえ翔兄ー。優勝したんだからせ、なんかご褒美ちょーだい』

「別に俺、優勝したいなんて言つてないし」

『ええーー!翔兄のためにがんばったのに!』

……10%ぐらいいは、30%はクラスのためで、残りの60%は自分ため。

え? ヒロインがそれでいいのかつて?

いやいや、むしろわざがあたしのチャームポイントでしょ。

「でも優勝かー。やつぱり嬉しいね」

幸希が頬杖をつきながら、微笑んでしゃべりました。

夕田に照りされた幸希は、とても絵になつていて。さすが『微笑みの貴公子』と呼ばれるだけはある。

『今回、幸希はいい所ばつかだつたもんねー。いつものヘタレキャラにはびっくりしたの? つまりなにじゃん』

『勝手にそんな不名誉なキャラにしないでよ』

『まあ結局最後はヘタレだつたみたいだけど』

「あれ無視?」

サラリとシカトしたせいか、幸希がなんか文句言つてるけど、まあ気にしない。世の中プラス思考だよね、やっぱ

「オーラ、鈴。まだ帰つていいいなんて言つてねえから」

翔兄の言葉に振り向けば、鈴がドアに手をかけていて、今まさに帰つとしていた。

つていつか今更だけど、鈴のジャージ姿貴重だな。写メ撮りたいし。

鈴は赤い髪をかきあげ、

「もう終わりだろ？ だるいから帰る」

と、また血口の中な発言をする。

「少し待て。……あー、でもどうせこれから帰るんだし、別にいい
か。よし、帰れ」

「なんか帰れって言われると帰りたくないなるんだけど」

「いや帰つていこう。どうせお前、残つたつて邪魔なだけだし」

「……やつぱは帰るのやめた」

翔兄の言葉にカチンときたのか、鈴はドアから離れ自分の席に音を
たてて座る。ドッカリと。

机の上に足のせてゐあたり、ヤンキーだよね。行儀悪い。本当に金
持ちの息子なのか？

席に着いた鈴を見て、翔兄はため息をつく。

「天邪鬼だな。まあいか。えーと、なんか片付けあるみたいだか
ら、よろしく。先生たちは打ち上げだから」

『はあ！？ なんであたし達は片付けて翔兄達は打ち上げなのぞ…』

「大人は疲れるんだよ。やつてらんない」とがあるの。酒でも飲んでストレス解消するの」

『「ずるいーーふんだ、翔兄なんか王様ゲームで女の子とHッチなことして、そこを偶然愛姉に見られてフリれちやえ!』

「いや、お前の言つてるのは合口。俺たちは打ち上げ

『同じだもん!』

「違えよ

ああ、一刀両断された!ダメージでかいツス隊長!

『いや、しても。

片付けかあ。面倒くさいや。なんか白熱した後にそつこつのつて冷めむ。

「ねえ、舞

そんなことを思つていいたら、後ろから流華が話しかけてきた。

首をまわして、『なに?』と尋ねる。

「どうでもいいんだけど、むしろ嬉しいんだけど、アイツ何処にいるの?』

『アイツいつ?』

「高梨青海」

『やつは言わねば、いない。閉会式のときもいたの』。

「青海ならたぶん屋上に行つたよ」

あたし達の話を聞いていたのか、幸希が口をはさむ。

『屋上かあー。あ、もしかしてアイシング付けサボる気だな！？』

『そんなの羨ま じゃなくて、ずる じゃなくて、許さない！』

ひとりだけサボりなんて。みんな嫌なのに、丘付けちゃんとやらん
だよ？今すぐに帰りたいのに、ちゃんと残るんだよ？

『こんなのおかしい！』

『つてことで翔兄、D組の平和な未来のために、舞いきまーす』

『お前もサボりたいだけじゃ……つて、もついねえ』

『青海め。ひとりだけサボひつたつて、やつはいかないぞ』

屋上へと続く階段を登りながら、文句を口ぼす。

最後の一 段を越え、扉の鍵を見るとやはりべつかか、はずされ
ていた。

こじ開けた形跡がないあたり、ピッキングの仕方が上手い。泥棒な
れるんじゃね？天職だよきっと。

あたしがやると、どうも強引な跡が否めない。まあ実際、強引なん
だけどね。

重い扉を押すと、勢いよく風が吹いてきた。一瞬、息がつまる。

反射的に閉じた目を開くと、フェンスに寄りかかる彼がいた。

『見つけたぞ魔王！今こそみんなの恨み晴らしてやるー。』

叫んだわたしの声は、少しだけ響いて。そして風に連れてかれた。

あり？ノーリアクション？おかしいな。いつもなら容赦ないツッコ
ミがくるのに。

ひとりで叫んじゃって、なんか恥ずかしいじゃん。わたしは不思議
に思いながら、青海のもとへ駆け寄った。

『…………青海？』

応答がない。

うつ向いた青海の表情は、前髪がかかっていてよく見えなくて。
のぞきこむと、冷たい色した瞳は伏せられていた。

『寝てる？』

めずらしい。絶対に人前じゃ、防御とらなそつなのに。それともひとりだから、安心して眠っているのかな。

『かなり貴重…。ケータイ持ってくれば良かったな。女子に高く売れそう』

そんなことを呟きながらも、わたしはジッと彼の寝顔を見つめる。

うわ、肌透き通ってるなオイ。女子より綺麗なんじゃね？

ムカツくべりい美形だ。田の保養になる。顔は整ってるのに、腹のなかは真っ黒なんだから。卑怯だと思つ。

いつもよつと長く見える睫毛。薄い口唇。触りたくなる。

『つて、あたしキモオオオオ！』

伸ばしていた手に気付き、わたしはザカザカと後退つた。

危ない危ない。もう少しでセクハラするところだった。

『大丈夫、あたしはまだ何もしてない。あたしの手はここにあるー。』

これは完璧に未遂だ。いや、むしろこんな所で寝てる「トイツ」が悪い！

『あたしは無罪だアアアアー！』

そつ叫びながら、あたしは屋上を疾風の如く走り去つた。

「……惜しかつたな」

舞がいなくなつたのを確認して、顔をあげる。

狸寝入りしてればなんかしてくると思ったが、計算違いだったな。

まあ変な悪戯してこようものなら、殴る蹴るしたけど。

「触れるへりいなら、別にいいのに」

後々、からかいのネタにもなるし。

空を仰ぐと、みどれるほどの青が広がっていた。俺はもう一度、瞼を伏せる。

触れられると少しだけ期待してたのは、口がさけても教えてやらない。

『あたしは変態じゃないあたしは変態じゃないあたしは変態じゃない
い』

「意味分かんない」と言つてないで、片付け手伝えよ」

『痛ッ。なにするのさ光太！お前なんか使い捨てキャラだからな。
どうせもつ出来番ないんだからな…』

「黙れ」

『イタタタタタ…』めんなさい光太様！』

第53回戦 体育祭終了（後書き）

体育祭編やつと終つです。またしづらへは日常に戻つまわる。

第54回戦 学生は黙つて勉強（前書き）

再び日常へ

第54回戦 学生は黙つて勉強

「来週、テストだから」

翔兄のその言葉に、わたしは世界の終わりを見た気分になった。

第54話 テスト前になると急に部屋を掃除したくなる

理不尽だと思つ。

先日まで体育祭で忙しく、勉強する暇もなかつた生徒に對してその台詞は、あまりに残酷だ。

そもそも人は頭脳だけではないと言つているのに、大人は順位をつけたがる。これは矛盾してゐるのではないか。

「つてことで、私は異議をもつします！」

「……面倒くせえ」

バンッとテスクを叩くと、翔児は心底嫌そうにため息をついた。

「おかしいじやん。テストでその人の全てが分かりますか？分かんないよー。」

「やうは言つたつて、こゝは私立だから。学力上昇を団指すのは当然だろ」

「あたしだつて好きでこゝに入学したんじやないもん！エレベーター式で受験する必要がないから入つたんだもん！」

「エスカレーターな」

「第一なに？なんで勉強すんの？将来役に立たないじやん」

「学生の本業は勉強だ」

ネクタイを少し緩め、少しヒビの入つた（叩いたせいかな）テスクの傷に沿つよう撫でる。

どこか眠そうな田は、さつさと消えてくれと語つていた。もちろん、そんなことわたしは知つたこつちやないけど。

「…どうじても駄目なら、せめて数学教えてー！」

「いや、俺国語担当だし。数学教師に頼めよ」

「あたしあの先生嫌い」

「どーが？」

「顔！」

キツパリ言ってみせたら、翔兄は呆れた表情で『失礼だろ』と呟いた。

だつて好みじゃないんだよね。インテリ～って感じでや。

それにほら、翔兄つて理数系な外見してるし。

『ね、翔兄。一生のお願い』

「お前の一生は何回あるんだ」

『じゃあ3日のお願い！』

「帰れ」

(チエツ！ 翔兄のケチ。教えてくれたつていいじやん)

追い出されたわたしは、屋上のコンクリートに寝そべった。

空を仰ぐと、彼方に太陽が見える。柔らかな陽射しが心地好い。

瞳をそっと閉じた。ヤバイ、眠いかも。

『勉強…どうしよう』

ここの中学校つてば、問題が半端なく難しいんだから。一人で勉強しあつて理解できない。

『あ、そうだ。流華に教えてもらおう』

A組をやしおいて学年10番以内の頭脳。そんな秀才彼女に、とりあえず要点だけ教えてもらつて。

今日は数学と理科、30点いくみうつ頑張りう。

流華は確かに理数系だつたな。丁度いい。

「オイ」

低い声に目を開ければ、なんと上履きの底が。しかもドアップ。

人にいきなりこんなことをしてくる奴を、わたしは一人しか知らない。

わたしはその上履きを押し退けた。見下ろされているこの体勢が気にならない。

『足退けろよ、青海』

『出でけ。ここは俺が使うんだ』

なんつー利口的な。この腹黒魔王め。わたしに対しては人一倍ドSなんだから困る。

わたしの次は幸希かな。まあ幸希はどうかって言つとマジっぽい。
し。

『あ、そういうえばアンタも頭良かつたよな。えっと、偏差値70だつけ?』

「75。お前とは40も差があるな。つてことで立ち去れ」
そう吐き捨て、足をわたしの頭に押し付けてくる青海。ちょ、ぐりぐりこじてるんですけど。

つていうか、わたしはそこまでバカじやない。数学と理科が苦手なだけさ。国語なら偏差値60以上、多分あるし。

いや、ホントだよ?本気出せば青海よりいいよ?

……数学は偏差値38だけビ。

『青海君、あたいに勉強方法教えてくんない?』

「ああ、来週テストか」

今思出したよひと言つ。余裕だなチクショ一。

「…まあ、いいけど?」

『マジで!?』

「お前のツルツルの脳にも分かるよハ、丁寧に教えてやるよ

なんかムカつくナビ、ソコつがいんな」と呟つなんて珍しこ。よつ
ほど機嫌良いんだうつな。

まあ、頭良このは認めるからね。そのお言葉に甘えゆけじやないの。

「じゃあ舞。そこ座れ」

『？……ソレ…』

言われた通り、1回起き上がり地面に正座した。

青海はニヤリと不気味な笑みを浮かべる。背筋に悪寒がはしつた。
なんか嫌な予感がするだ。

「舐めろ」

わたしの予感は、見事に的中した。

わたしは耳を疑つた。

第55話 ほつぺた以上くちびる未満

は？

「だから、舐めりよ。」

受けられた言葉と、目の前に差し出された靴。

停止しがけた思考を動かす。……ああ、そういうことですね。舐めりが、うん。

『つて、なんでだよー!』

「」の単細胞に勉強を教えて下さい青海様、つて言つて俺の靴を舐めたら、」の天才が全教科80点以上とれるよう教えてやるよ」

そうだ。コイツはこういう奴だった。わたしにタダで教えてくれるはずがない。

ギブアンドテイクどころか、更なる利益を求める。

「ほら、どうするんだよ。別に強制はしねえぜ？お前が10点と10点どりが20点どりうが、俺には関係ねえし」

つま先でわたしの頸を掬いあげる。ちょ、喉に刺さってるんだけど。痛いんだけど。

（なんて外道なんだ……！）

わたしがコイツの靴を舐める？いや、さすがにそれは人としてのプライドが許さない。

しかし少し舌を伸ばせば、万々歳の成績。みんなを見返すことができる。翔兄に褒めてもらえる。

尊厳か、成績か。

『やつぱり無理イー悪いがわたしはS寄りの人間なんだ！』

そう叫び靴を振り払えば、青海は小さく舌打ちした。

「ふうん？いいんだな、それで？」

『流華か幸希に頼むもん！』

「……あの女はともかく、幸希は自分の勉強で忙しいだろ。お前に教える余裕も頭脳もねえよ」

『オイオイ。何気ひどいこと言つてるだ』

「幸希がテストの点が良いのは、かなり勉強してるからだ。あれは秀才、俺は天才」

『言ひきつたな……』

その自信はどこから来るんだ。天才だから、努力する必要ないってか?ムカつく。

幸希も頭良いけど、さすがにA組の子たちには負けてるしな。まあ、運動神経抜群だから。

『で、舞?』

『あんだけ』

「本当にいいのか?葉月流華で。理数系の奴が文系の奴に理解させるのは至難の技だぜ」

『お前だつて理数系だらうが』

「俺はそんなの関係ないくらい天才だからな」

そう言って、またもや靴をわたしの頬に擦り付ける。

ぐつ、確かに前も流華に教えてもらつたとき、流華はかなり困つてたな。

「ほり、どうするんだ」

『だ、だから。そんな真似はしたくないってー』

「……ふーん」

しゃがみこみ、わたしと同じ田線の高さに合わせる青海。

冷めた瞳は、相変わらず感情が表れていない。だから、こんな風にジッと見られても不快だ。

「舞

『な、なに　　んあ！』

手を伸ばされたと思つたら、唐突に指を口内に突っ込まれた。

『はひふんほひゃー』

「噉むなよ」

『ん、ひや…！』

人指し指が歯列を、親指が唇をなぞる。くちゅ、といつ水音が響いた。

青海の空いてる左手は、わたしの首筋にあてがい、軽く爪をたてて

い
る。

どこを見ればいいのか分からなくて、視線があちこちに泳いだ。目が合わないよう、前だけは向かない。

(なにがしたいんだ…！)

まったくもつて理解不能。この行為になんの意味があるのだろう。

だつて、青海の指は唾液で濡れるしわたしさたかじいだけだし。
おかしげだら、つん。

つていうか、コイツつてもつと潔癖症じやなかつたつけ？雑菌が…とかなんたらかんたら言いそうなのに。

۲۰۷

苦しさに、生理的な涙がにじんだ。

指は上顎を撫で、舌に触れる。笛の腹で愛撫したと思つたら、ひつかかるて。

わたしは青海の胸を押し返してゐるけど、まるで無意味だ。だつて、力が入らない。

生き物のよりこじりめく指。苦しいけど、痛くない。くすぐったくて、もどかしい。気持ち悪いようで、気持ちいい。

(
.....
は?)

わたしは今、なんて思つた？気持ちいい？誰が？何で？

(有り得ねエエエエエーーー)

「ツー！」

青海が小さくうめき、指を勢いよく引き抜いた。その指からは、赤い霊がふつくつと浮き出していく。

にじんだ血を舐め、彼はわたしを強く睨んだ。

「歯むなつて言つただろ」

『う、うるさいやい！アンタが変なことするからじやん！』

口からじぼれた唾液を拭い、そう叫ぶ。体がすこく熱くて、赤面してるのが自分でも分かつた。

穴があつたら入りたい気分だ。

青海はしばらくわたしを見ていたが、不意に立ちあがる。その際に腕を引かれ、わたしも無理矢理立たされた。

掴まれた腕が、痛みに悲鳴をあげている。

「つまらない」

そつ青海は呟いて、

『な……』

わたしの頬を舐めた。

ポンッ、と頭が沸騰する。頬に触れた、一瞬の冷たさ。

固まつて動けないわたしを置き去りに、彼はわたしの横をすり抜け
る。

後ろで扉の閉まる音が、大きく重く響いて。

『…意味分かんない…』

わたしはコンクリートの上、大の字に寝転んだ。

第5・6回戦 予想外の展開

昨日は散々だつた。人をおちょくつといて、放置プレイだなんて。まあいい。勉強は流華に教えてもらつもん。そうすれば、とりあえず30点以上とれるし。

前に誰も頼らず実力でいったら、大変なことになつた。数学に至つては、鈴より低かつたね。

(あれ?)

そう言えど、まだ流華来てない。流華が遅刻なんてめずらしいな。

「ほらー、席着けー」

氣だるそうに翔兄が入ってきた。ざわつきつつも、みんな着席する。

翔兄は教卓に手をつき、帳簿を開いて一言。

「葉月は欠席なー」

わたしは宇宙の終わりを見た氣分になつた。

『「つあー、ぬいー』

休み時間、机に伏して頭を悩ませる。わたしは今、絶望の縁に立たせれていた。

「風邪らじしげ、あの女。そんな状態じゃ、お前に教えるのは無理だな」

嫌味つたらしい声に顔をあげれば、田の前にはやけに愉快そうな青海が。

『アンタの席やじじやないでしようが。勝手に座るなよ』

『いいだろ、休み時間くらー』

フツと笑ったかと思うと、有りつけとかわたしの机に足をのせた。

あ、ヤバイ。ここつの脳をうどこしていることが分かった。

「ほり、舐めろ」

『公開プレイかノノヤローー。』

勢い余つて机を蹴りとぼしたら、中に入っていた教科書やらノートをぶちまけた。

青海はサラリとかわしているし。なんかもう、色々とムカつくよ。

「頼りの相手がいないんじゃ、もうこれを舐める他ないな」

『なんでだよ……』

すい、と靴の裏を顔面に寄せてくれる。今までして舐めさせたいか！
でも、無理。テストも無理だなど、そんなことするのはもつと無理。
人に靴舐めさせるのは大歓迎だけど、逆はキツイって。

「じゃあどうするんだ？お前」

『あたしにはまだ頭の良い友がいるー。』

「どうせ勉強教えてとかでしょ？悪いけど時間ないから」

「『青海に教えてもらひえばいいじゃない』

ため息混じりに言われた。

ぐ、読まれてる。

つていうか、冷たくない？いつもだったら、もっと優しい言葉かけてくれるのに。

「今回のテストは難易度高いしね。留年はないけど、悪かったら補習だよ？」

『聞いてない！』

「聞いてねえのが悪いんだな」

青海が後ろから口をはさむ。なにせりげなくついて来てんだ。

「青海も余裕だね。舞ちゃんをいじつてるなんて」

「まあな」

『「ノーヤローー！」』

「流華ちゃん大丈夫かな…」

『「あたしの心配は…？」』

「青海に教えてもらひえばいいじゃない」

ケロリと語つてみせる幸希。それが出来たら苦労しないつつーのー。

「とにかく、僕には無理だから。」『めんね』

謝つてゐるけど幸希、一度もわたしのこと見てないよね。

「ほり、チャイム鳴つたよ。席着いて」

わたしは冷酷貴公子を引つ叩いた。

ヤンキーの場合

「舞、舞」

クラスメイトに勉強を頼み中、名前を呼ばれた。振り返れば、鈴が
ケータイ片手に立つていて。

『なに、鈴。あたし今交渉中だから後ににしてよ

「いや、だからね舞。私も余裕なつて……」

ぶつぶつ呟く美紀の声は、まあ聞こえないこといつつで。

「放課後ゲーセン行つづぜ」

二ツ、と笑う鈴。この子の場合、余裕あるないじやなくて単に勉強嫌いなんだよね。

テスト勉強なんてしてたら、それこそ大地震が起る。

鈴はパチン、とケータイを閉じて置いた。

「前に俺らが残した記録、塗りかえられてたんだぜ？」

『なに！？それはまずい！行かなきゃー』

「ちょっと、舞。あんた勉強するんじゃなかつたのー？』

ぐい、とわたしの腕をひく美紀。

う、そうだった。いや、そつなんだけど。この甘い誘惑にわたしは

……

「行くだろ？ 舞」

勝てないッ！

『もちろん行き グハアー！』

ます、と続くはずだった言葉は出てこなく、代わりにわたしを襲つたのは痛みだつた。

「馬鹿かお前。そんなんじや、10点もとれないだろ

青海。乙女相手に、シャイニンググワイザードっぽいなの……。

「邪魔するなよ青海ー」

鈴がムツと口を尖らせる。それに青海は無表情で返した。

「鈴はコネがあるだろ？けだし、このバカ女は何もない」

『何もなくないわよッ』

「精々、体力と運動神経ぐらいだろ？ほい、さつさと蹴舐めろ。嫌なら素足でもいいぞ」

『もつと嫌じやボケ！』

隠れサドの場合

『光太、アンタ確か頭は良かつたわよね』

「……勉強なら教えないぞ」

『なんで…？』

「面倒くさいから」

ケロリと言い切る光太。彼も休み時間に関わらず、テキストを開いていた。

『ケチー！要点だけ説明してくれればいいんだってば！』

「そんなことしてゐる時間があつたり単語のひとつでも覚える方が得

くや、優しくない人間だな。世の中を損得で考えるなんて。

思いきり睨んでも、彼はどこ吹く風。気にも止めず、淡々と手を動かす。

「みんなに見放されたな、お前」

くすっ、と笑う青海。チクショ一、その涼しげな面殴りたい。

だいたいコイツ、なんでついてくるんだよーお前も勉強しろよー

「青海、教えてやればいいじゃん。どうせ学校じゃ勉強しないんだ
うー」

手はとめずにして言う光太。

「利益が無い」とする趣味はないからな

「ま、そこは同感だナゾ」

「つこでにこの単細胞の苦しみ姿をもつと見たいし」

「それも同意見」

「うのハハハめー！」

「「なんか言った?」アーベー」

『すみません多細胞様！』

タイムコリギットはあと4口。わたしは靴を舐めずに済むだろ？

…。

第57回 戦 努力と才能（前書き）

瑠璃視点

第57回戦 努力と才能

第57話 持つべきものは優秀な弟？

『どうしようどうしようどうしよう』

ソファに寝そべり、頭を抱えている姉さん。はつきり言つておるかい。何がどうしようなんだ。

『ねえ瑠璃ーあたしどうするべきー。』

あ、ヤバイ。話ふつてきた。

「……何がどうしようなの？」

『テスト明日なんだよオオオー。』

「勉強すればいいじゃない」

『分かんないのーー瑠璃教えてーー。』

そう叫んで僕の体にまとわりついてくる。姉さんは軽く涙目だった。

僕はとりあえず姉を引き剥がし、座らせる。なんで弟の僕が、こんな諭すよつた真似しなきやいけないんだ。

「あのね、僕はまだ初等部。中等部の問題が分かるわけないでしょ？」

『そんなことない。瑠璃はやればできる子だつて、わたし知つてゐよ。だから諦めないで』

「ちよつと待つて。なんで僕はげまされてるの？」

なぜ立場逆転？おかしいよね、おかしいよねコレ。

つていうか、教えて教えて言つてないで、少しでも自分で勉強してた方がマシだと思つ。

『流華は風邪ひいてるし、クラスの人たちほんせつだし…』

「大変だね」

『他人事かコノヤロー！』

再び僕の胸ぐらに掴みかかつてくる姉さん。実際、他人事だよ。

『ねえ瑠璃、アンタのその頭脳はいつこの時のためだと思つんだよね』

「違つと思つ」

『つていうかや、なんで同じ遺伝子から生まれたのにこんなに違つかな』

たぶん、頭のできでつこて叫ひてこるんだろ？。

確かに姉さんはバカだ。気が遠くなるくらいバカである。

「でも姉さん。僕がこんなに勉強できるのは、姉さんのおかげでもあるんだよ？」

『……あ、もしかしてあたしの愛の力のおかげ？照れるわ～。だけど、イケナイ感情抱かないでね。わたし達は姉弟なんだからー。』

「黙れ舞」

『すみませんッ！』

土下座してそり謝る。腰低ッ。ビリに弟に土下座する姉がいるんだ。
……じこじこするか。

僕はため息をひとつ吐き出し、姉さんと皿を合わせる。

「姉さんって昔から馬鹿だったでしょ？」

『うそ……ハローヤローー。』

「だから血が繋がってる僕は自分が心配になつたぞ。もしあんな
んになつたらどうしようか、ってね」

『ちよつと瑠璃くん？あんなんつて酷くない？』

「そしてとうとう不安に堪えられなくなり、僕は出来る限りの努力をした。つまり姉さんは僕にとっての反面教師なんだ」

『反面教師？ああ、翔兄みたいな人のことか』

翔兄って…中等部の先生か。確かに姉さんの担任の。

つていうか『翔兄』？よくそんな気軽に呼べるな。

「でも良かった。あまり血縁は関係ないんだね。安心したよ僕」

『努力すれば頭よくなるって言つのか？』

「天才は99%の努力と1%の才能で出来ているんだよ？」

『じゃあわたしにもまだ希望が……』

「ないよ」

即答すれば、え？と笑顔をひきつらせる姉さん。

「だつて姉さんには1%の才能もないもんね」

『チクショー！なんだよこの完璧人間め。あたしは成績で5なんて体育と国語ぐらいしかとれないぞ！』

「姉さん譲りの運動神経があるし、頭はまあ努力してるし。ある程度真面目にしてたら、5なんて簡単にとれるよ」

『 あるこあるこあるこイイイイ！』

ギヤーギヤーわめきながら、僕を叩いてくる。つていつか痛い痛い
！一発一発がなんて威力！

『 なんで姉弟でこんなに違うのセー.』

「 どうもいこはど、勉強したらっ.」

姉のことは大好きですよ？ 優越感が味わえますから

第57回戦 努力と才能（後書き）

腹黒瑠璃くんでした。欠落人間と完璧人間の凸凹姉弟です。

第58回戦 赤点バッチャコイ

テストが終わりました。いろんな意味で終わりました（BY 舞）

第59話 僕は大器晚成型ですってどう考えても言い訳

舞と鈴の場合

時間がなかつたんです。教えてくれる人を探してたら、あつと言つ間にテスト直前で。

分かる問題からやろうとしたら分かる問題はないし。むしろ何が分からぬのかさえ、分からぬいし。

「まーい！ 何うなだれてんだよ。カビ生えるぞ？」

机に伏してゐわたしの背中を思いきり叩く。だけど怒る気力もない。ゆっくり振り返ると、気持ちのせいが、うざったく見えてしまうキラキラの笑顔が。

彼はいつもしてゐるヘアバンドをはずしていく、赤い髪をおろしていふ。新鮮だ。

『……鈴……』

「あ、これ答案用紙？」

セツニヒヒ、机の上にある5枚のうちの1枚をつまむ鈴。

あ、それ数学の答案用紙だ。よつこにて一番悪いのを見やがった。

「つわ、なんだこの点数！ やべえじゅん舞！」

心配する言葉とは裏腹に、鈴は爆笑する。殴つていいかな？
つこでに、わたしの数学の点数は18点。殴つていいかな？

「俺より悪いじゃん！」

『……え』

「俺、30点以上だし」

その言葉に、わたしは自分の耳を疑つた。だって、いや、嘘。
り、鈴に負けたアアアア！！

『なんてこと！ またか鈴にまで負けるなんて』

「アツハツハツ」

『いやだアアアア！』

「これで補習確定 デンマーイ」

『つるせーーー！ ってかお前もだろーーーお前も絶対補習だらーーー』

そうだ、鈴は数学はそこまでじやなかつたんだ。そして英語は何気
できたりするんだ。わたしと真逆だね。

いや、待て。わたしは確かに数学は20点もいかなかつたけど。で
も5教科の合計は200点といったもん！

『つまり補習は逃れたのさッ』

「あ、そなんだ。舞、国語だけはいいもんなあ」

だつて翔兄が担当だもん もともと文系だしさ。

「じゃあやつと遊べるんだな」

『おうよ。つてことでゲーセンへGOーー』

「GOーー」

流華と幸希の場合

休み時間、流華ちゃんの背中を軽く叩いた。舞ちゃんは側にいない。

「……藤森」

「風邪大丈夫?」

「まあね。ちょっと熱が出ただけだし」

いつまでも振り返つてると体勢が辛そつだから、僕は流華ちゃんの前にまわりこむ。

確かに顔色もいい。大丈夫そうだ。

ジッと見てたせいか、流華ちゃんが首を傾げる。ああもう、あまり可愛い仕草しないでよ。

「そういうえば、藤森テストどうだった?」

頬杖をつきながら、そう尋ねてくる。

「うーん、前より下がっちゃった。平均点も低いのが救いだね。流華ちゃんこそ、あまり勉強できなかつたんじゃない?」

「そうでもないわよ。順位だって落ちてないし。ただ……」
「ただ？」

身体を小刻みに震えさせる流華ちゃん。え、なに？

「舞に教えてあげれなかつたのオオオ！」

……なるほど。相変わらず舞ちゃん至上主義だ。

「私は別によかったのよー? でも風邪が移っちゃ大変じゃない! 私のせいで舞が病気になつたら私、私……!」

(…風邪ぐらいで大袈裟な)

その溺愛ぶりには最早呆れを通りこして、感心してしまう。

「だいたい藤森も藤森よーなんで代わりに教えてあげなかつたの!?
?」

え、まさかの濡衣?仕方ないじゃんか。そんな余裕も時間もなかつたし。
それに

「流華ちゃんはいいの?僕が、舞ちゃんに勉強教えても

そう言うと、流華ちゃんは意味が分からないとでも言いたげに、怪訝な顔をした。

僕は少しだけ顔を近付けて囁く。

「ぼくらが一人きりになつても、流華ちゃんは気にしないの……?」

「ツー!」

彼女が息を飲むのが分かつた。普段クールな子ほど、いつこう表情が新鮮。

「い、 やよ」

「へえ」

「そんなの嫌。 い、 いくら藤森でも舞は渡せない！」

「…………え？」

「舞の隣は私なの。 舞に勉強教えるのも私。 舞を一番愛してるのも私。 舞のためなら何でもできるー！」

「ああ、 そういうこと。 僕に嫉妬したと。 今の嫌はそつちの意味ね。 別に悲しくないから。 ちょっと予想してたから。 や、 ホント悲しくないってば。」

「…………流華ちゃん鈍い」

「は？ なんのことよ」

青海と翔の場合

昼休みの屋上。 本来立ち入り禁止だが、 何故か俺は青海と肩並べている。

「……俺、 あいつに負けた」

あいつ。

たぶん舞のことだろ？ 確かに国語のテスト、舞のほうが高かったな。

「お前国語は苦手だもんな。でも満点いくつがあつたる？」

「……数学と理科はな」

「お前モ口理系だな」「

そう言いながら、俺はポケットから煙草とライターを出す。青海が嫌悪感たっぷりの顔してるけど、気にしない気にしない。火をつけてくれる。紫煙が吐きだされた。

「煙」

抑揚のない声。俺は隣に視線だけ移す。

「述語は？」

口許に淡い笑みを浮かべてそう尋ねれば、青海は小さく舌打ちした。かと思うと踵を返して、遠ざかる背中に呼びかけると、彼は

「ストレス解消」

と、またもや単語だけで答える。標的は大方、舞か幸希だろうな。

「述語がないつーの」

呴いた言葉は、扉の閉まる音にかき消された。

第58回戦 赤点バッチャコイ（後書き）

テスト終了です。鈴はコネで補習免れました（笑）

第59回戦 頭髪検査

朝、登校するとめずらしいことに鈴が来ていた。あの遅刻魔が、どうこう風の吹き回しだらつ?

「おはよ鈴。なんでいるの?」

「お、舞。俺だってたまには早起きするつーの」

二ツと口角をあげる鈴。金のピアスが髪の狭間で光る。

「めずらしいね。…と、翔兄来たや」

第59話 シャルマンな君の姿に乾杯

「あー、なんか今日、頭髪検査するらしい」

他人事のように言いながら、翔兄は自分の髪をガシガシと搔く。教室はもちろんブーリングの嵐だ。

まあ、この学校規則緩いから、みんな結構いじってるもんね。

「ほこはー、文句言つなら教頭に言つてね。俺だつて面倒くさいんだから」「だから

どうやら、本当にやるらしい。翔兄がわたし達を一列に並ばせる。わたしはもううん、すかさず一番前をとつた。

「えつと、舞はちょっと茶色い気がしないでもないけど、セーフだろ」「

対して見もせず、シッシッと手で追い払つ翔兄。失礼だなコノ！

わたしは染めてないけど、もつとなんかコメントくれたつていいじやん！

「流華」

「私は何もしていないわよ」

流華は腕を組み、翔兄を見据えた。流華はサラサラストレートだもんね。綺麗な黒髪で憧れる。

「お前、髪長すぎ。切れ

「い、嫌よ。私はロング派なんだから。短くするへりつなら登校拒否するわ」

「なんでもんなに嫌なんだよ」

「だつて……」

ほんのり流華の頬が桜色に色付く。「うわ、可愛い。

「舞が似合ひつゝで言つからり……」

「はい次へ」

シカトする翔兄。容赦ない。

「絵里菜、お前パーーマかけてるだろ。中学生が色気つくな。はいア
ウト」

「ええっ、このへりに見逃してよー。」

「なんか面白い言い訳したらセーフにしてやる」

そんなんでいいんだ！？

絵里菜は頬をかきながら、考てる様子だ。

「えっと、その、爆発テロに巻きこまれて」

「テロ舐めるな。はいアウト」

「うわーんー！」

絵里菜、撃沈。

「よくやつたよ君は……。つてこいつが、どんな言い訳なら翔兄は納得したんだ？」

「青海、お前黒髪とこいつより紺じやね~っていうか、紺じやね?」

「氣のせいだ」

「やうかねー。ま、いいや。田立たないし」

「氣のせいだつてんだろ」

「はこはー」

青海は軽く舌打ちしたが、ポーカーフースは崩さない。

青海つて、翔兄には口調悪によね。他の教師にはそんなことないけど。

「修也、茶色い」

「地毛」

「こや、#まじだじ」

「地毛」

「いや、根本黒いし」

「地毛」

「認めぬ。それはアウトだ」

「チツ」

「舌打ちした? いま舌打ちした?」

したよな? とつつかかる翔兄を、修也ははいりことひと蹴りして振り落つた。

「幸希、お前頭明るくね?」

「なんかバカみたいに聞こえるんですけど」

「明るいって。頭明るいって」

「いや、本当にやめて下さい。バカみたいに聞こえるんで」

「頭のなかまで明るいよ。むしろヘタレだよ」

「ヘタレ関係なくない! ?」

幸希をからかっている翔兄。無表情だけど分かる。ものすごい楽しそうだ。

でも、何人かに慰められている様子がまた、幸希っていうか、ヘタって感じ。

その後も何人かチェックされていた。言い分は全て一刀両断である。
そして、最後の一人は彼。

(……一番ヤバイよね)

わたしは高みの見物　じゃなくて、見守ることにした。

最後の一人とは、そう。

「鈴、その髪はないだろ」

赤髪ヤンキー、北林鈴だ。

「地毛だ」

「赤い髪が地毛って何人だよ。火星人か？火星人なのか？」

「じゃあ突然変異」

「じゃあじやねえよ。もつとマシな言い訳しろ」

「いや、本当マジで。突然変異なんだよ。少年漫画的な

「世の中そんなファンタジックにできていないんだよ」

面倒くさそうに頭を搔く鈴。でも鈴が黒髪になつたら嫌だな。

……いや、それはそれで興味がある。見てみたいかも。

「つづーかさ、これチホックしてどうすんの？　なに、アウトだつた奴はみんなどうにかしろってか？」

眉をひそめながら、鈴はヤンキー口調で翔兄に尋ねる。

いや、普通に考えてそうでしょう。じゃなきや、こんな頭髪検査する意味ないって。

しかしあたしのそんな考えを翔兄は見事に崩した。

「いや、別に」

……は？

「別に、つて何もしないのかよーー？」

「え、したほうがいいの？」

「や、そういう意味じゃねえけど……、じゃあなんのためにこれやつてるんだーー？」

「やれって言われたから」

「……えええええーー？」

クラスの皆の声がひとつになつた瞬間だつた。

第59回戦 頭髪検査（後書き）

翔はこういう人です。こんな教師はきっとない。

番外編 小話シリーズ2（前書き）

再び小話です！

番外編 小話シリーズ2

Top or Under?

舞 + 青海 + 幸希

『ちょ、普通に考えてあたしが上でしょ！？』

「は？なんで俺が下なんだよ。そっちの方が有り得ないだろ」

『だつてだつて……つて、ギャアアアア！わたし下はマジで無理ー…』

「知るかよ」

『あ、あ、ダメだつて…。ああああーー…』

「…………なにしてるの君達」
「「ジエンガ」」

点数

舞 + 複数男子

『葉月は百点ちかいだろ』

『同感。矢野は「〇ぐら」か?』

『あいつ固いんだよな』

『なんの話してるの? あたしも混ぜろー』

「あ、舞。いま女子に点数つけてたんだ。お前の親友は百点ちかいぞ」

『流華はちかいじやなくて満点だよ』

『へいへい。相変わらず仲良いな』

『まあね。あ、ねえ、じやあひ、わたしは何が?』

「「「5点」」「」

『じつこじつじだ「ノーヤロー』

G i r l s L o v e

青海 + 流華

「舞を想つ同志として」

「同志じゃねえよ」

「聞いてもらいたい」とがあるの」

「へえ?」

「舞を想うと眠れない。田の前にいるだけで抱きしめたくなる。すべてを欲しいと望んでしまう。ねえ、やっぱりこれって」

「病氣だろ」

（音楽）

天然?

花形 + 青海 + 幸希

「ねえ青海、ピロートークってなに?」

「…………は?」

「ピローって枕って意味だよね。枕詞的なものかな。青海知ってる

？」

「……いや、寝たまま話すのいつか…」

「寝たまま? キャンプとかの眠れない夜にする話のこと?」

「それもあるけど、一般に男女が「青海、ここは全年齢対象だよ」

ノロケ

流華 + 翔

「はあ……」

「なにため息ついてるんですか?..」

「いや、彼女と喧嘩したんだよね。いや、そりゃあ俺も大人げなかつたと思つよ? だけど愛がなかなか引かないからさ」

「……喧嘩の原因はなんなんですか?..」

「どっちが深く愛してるか

「死ねばいいの?」

「ちよ、簡単に死ねとか言つなよ

「ちうですか、直に申します。……滅びればいいのだが

「せこせこせこ

おわづ

第60回戦 学級委員会ヤンキーくん（前書き）

新キャラ視点

第60回戦 学級委員とヤンキーくん

赤い髪、指定外のネクタイ、光るピアス、3つも開けたシャツのボタン。

本当に信じられない！

第60話 悪=かつこいには勘違いだと気付いて

私、矢野梨華子はD組の学級委員だ。

D組はただでさえ一般クラスだから他クラスより乱れているのに、それに拍車をかけている人がいる。

私は学級委員として、それを正さねばならない。翔先生は駄目。あれは最早、教師じゃない。

だから、私は

「鈴くん、規則に反した格好はやめて下さい！」

机に座っていた彼は、私の声に振り向いた。隣の舞ちゃんも、好奇心いっぱいの表情で私を見る。

この一人は仲が良いから、よく一緒にいる。男女でここまで仲良しなのはめずらしい。幼馴染みというわけでもないのに。

『どうしたのさ。鈴なんかやつたの?..』

「はあ?俺、今日はまだ何もしていないぞ」

……この一人は、私の話を聞いていなかつたのだろうか。

さつき私は、規則に反した格好はやめてと言つたはずだ。別に鈴くんがなにか事件を起こしたとは言つていない。

怒鳴りたい衝動に襲われたが、私は下唇を噛んでなんとか抑えた。こいつの場合、怒るのは逆効果だ。相手も気分を害して、こちらに耳を傾けなくなる。

私はひとつ咳払いをして、彼等の前に立ち口を開いた。

「鈴くん、指定のネクタイはどうしましたか?それと、染髪は禁止されています」

「固い」と呟つなよ

私の忠告は一蹴りにされる。舞ちゃんはニヤニヤしてるだけで、どちらをかばうわけでもない。

舞ちゃんは、なんだかんだで規則をそんなにやぶつていないと思つ。やや茶色の髪は地毛であることが分かるし、制服も派手に着崩していない。

真面目かと聞かれれば、答えは否なんだりつけど。

「こぐら向でも、赤はないでしょう赤はー。」

「あー…。そうだな、飽きてきたし、今度はオレンジにでもしようかな」

『紫にしてよ鈴。紫の髪の鈴……フフッ』

「やつこつ問題じやないー！」

この一人は私の話を聞く氣があるのー？

……黙囃だ、落ち着くのよ私。ここで熱くなつたら負け。

私は冷静さを取り戻すため、息を吐き出した。

「……じゃあ鈴くん。まずはシャツのボタンを閉めて。ネクタイも明日からは指定のをしてくれないと」

やつこつと、彼は『えー』と不満げな声を漏らす。

『えー』じゃない、『えー』じゃー！

「とにかく、ボタンして、ズボンもむつと上げて」

「うわ、やめひひー。」

『ちよっと委員長へ、教室内でイチャつるのは大胆だよ~』

「舞ちゅんは黙つてー。」

それと私、学級委員だけど委員長ではないからー。

いつも言つてゐるのに、彼女はいつまで経つても、私を委員長と呼ぶ。最近では間違いを訂正するのが面倒になつてきた。わざとではないが、とも疑つてしまつ。

「別にいいだろ、ここのへりこー」

ボタンを閉めさせようとする私を、鬱陶しそうに手で払はれぐらん。

「良くないのー。」

「真面目だなあ、お前」

「……真面目なのがいけないと?」

「別に。ただ、もう少し肩の力抜いた方がいいと思つぜ?」

そつまつて彼は、私のふたつに結んだ三つ編みに触れ、縛っているゴムをとつた。ハラリと舞づ、全体の半分の髪。

編んでいたからか、軽くウーハーがかかるのが視界の端に見えた。

『あ、委員長かわいー。下ろしている方がいいじゃん

「うよ、ちょっと舞けりゃん！」

『じつちもほどこちやえ』

舞ちゃんはその言葉通り、もう片方の三つ編みもほどいた。ああもう、いって言つてないのに！

「悪いけど、俺は」のスタンス変える気ねえから。お前も、真面目なのは勝手だけど少しきらい洒落ついたつて文句は言わねえよ？」
それは、私の主義に反する」とになる。だけど、

「……お前じやなくて、梨華子。矢野梨華子」

「ん？ああ、そんな名前だつたな」

笑つた鈴くんの顔が、とても眩しくみえた。

不本意だけどね！

第60回戦 学級委員ヒヤンキーくん（後書き）

キャラクターファイル

・矢野梨華子
やのりかこ

年齢：14歳

身長：158cm

体重：43kg

見た目：とにかく地味

嫌い：ルール違反

趣味：読書

D組の学級委員。とても真面目で規則をどこまでも守る、生徒の鏡。

第61回戦 風邪ひっぴき少女

「今日の欠席は舞ひとりなー」

朝の出席確認時、翔が抑揚のない声で言った。

第62話 風邪ひいたら誰かにうつして治せ

「なあ青海、今日の放課後お前ひま?」

今日一日の授業が終わり、クラスの皆が帰り支度をしていたとき、鈴が話しかけてきた。

ひま?って、お前俺が部活入ること知ってるだろ?が。

だけど俺はあえてすぐに返事はせず、質問に質問で返した。

「……なんで?」

と。それに鈴は、俺の机に座り身振り手振りで答える。

「ほひ、舞が風邪ひいただろ？だから見舞いに行いつと思つてや」

「一人で行けばいいだろ。それから、俺の机に乗るな」

「いいじゃん。舞が風邪なんてめずらしげから心配だし」

「俺は心配じやねえ」

つていうか、こいつ人の話聞いてないな。俺は乗るなって言つたのに、更に身を乗り出しあがつた。

鈴はしばらく『えー』とか『むー』とか意味不明な声を漏らしていたが、机からおりて

「じゃあいいや。俺ひとりで行こう」

と言つた。

……ひとりで？鈴が？風邪ひいたあの女の家に？

。

「幸希、俺今日部活休むから」

俺は幸希の返事は聞かずに、きょとんとした表情の鈴を連れて教室を出た。

「つて、ちよつと青海！理由もなしに休んじゃ駄目だつてー。」

「青海、幸希がなんか言つてゐるわ」

「無視しとけ」

教室から出た後も幸希の声が聞こえたけど、俺は気にしないことにした。だって幸希だし。

鈴に案内され着いた舞の家は、住宅街にある「くく普通のものだつた。迷つことなく此処に来たつことは、鈴は頻繁に訪れているのだろうか。

(……別に、どうでもいい)

鈴が門の横にあるチャイムを押さうと手を伸ばす。その時

「ついに何か用ですか？」

丁寧な言葉使いに似合わないボーイソプラノが。振り向くと、そこにはラングセルを背負つた小学生が立つていた。

星育学院の制服を着てるから、初等部の子だろう。心なしか、誰かに似てる気がする。

その少年に鈴も気付いたのか、『あ』と声を漏らした。続くよつこ、

小学生も『あ』と『は』です。

「よお、瑠璃

「ひさひま、鈴くん。姉さん元気ですか？」

「……今、コイツから有り得ない単語が聞こえた。『姉さん』？」

いやいや、違うよな。アイツのことなわけがない。この小学生はこの家の子供じゃないんだきっと。

しかしそんな俺の考えは、少年の行動によつて木つ瑞微塵に碎かれた。

「じやあ中へびつい。とまつても、姉さん寝てると困りますナゾ」

そう言つて、少年は俺達を招く間に門を開ける。

……マジかよ。

これが、あのバカ女の弟? どんな遺伝子だ。中身が違うみたいじやねえか。

「えつと、やめま……」

玄関に入り、靴を脱いでるときて舞の弟（やつぱり信じられない）が俺を見て遠慮がちに首を傾げる。

「……高梨青海、舞のクラスメイトだ。よひじくな。君の名前は?」

笑顔を張り付けて言えば、隣で鈴が『だれ?』とか言つたけど、無視だ無視。他人には笑顔みせておけば、損はしないんだから。

少年は一瞬だけ怪訝な表情をしたが、すぐに二口ひとつなつとい笑みを見せた。

「僕は浅野瑠璃、初等部6年生です。いつも姉がお世話になつてます」

とつても、出かけた言葉を飲み込む。

それにもしても、小学生とは思えない態度だ。姉より数倍いい。

(でも、)

さつきの表情はやけに食えなかつた。それに舞なんかよりずっと礼儀正しいのに、なんだか気に入らない。

(同族嫌悪……か?)

この姉弟、顔は似てるけど、かなり性格が違つようだな。

舞の部屋に案内してくれるのだろう、階段をのぼる俺達。

「以前掃除したので、まだ綺麗なはずです」

「舞は相変わらず自分の部屋掃除しねえのか。瑠璃も大変だなー。わざわざ姉の部屋掃除するとか、考えられねえ」

「もう慣れましたよ。それに姉さんの部屋、放つておけど」三室敷にならんです」

苦笑しながらそう言い、瑠璃といつ少年は一階の廊下の突き当たりの部屋をノックした。

その扉には、【MAH】というフレートがかかっている。似合わないことに、パンクだ。

「姉さん、友達来たよ。開けていい？」

中からは、肯定とも否定ともとれない声が返ってきた。

しかし彼は肯定と受け取ったのか、躊躇なくドアを開ける。

「おー、鈴じゅん。それと……青海？」

ベッドで寝ている舞は俺の姿を確認すると、目を大きく見開いた。なんだよそのリアクション。俺が来たらそんなに変か。……変だな。

「じゃあ、ぼく戻るね」

瑠璃はやがて言ひて、部屋から出でていった。

「舞大丈夫かー？でもよかつたな、これでバカじゃないって証明できたぞ」

「何言つてんだよ鈴。証明できたのは、バカは風邪ひかないって

「いつのが嘘つてことだろ」

「どひこつ意味だコノヤロー。」

叫ぶ舞はいつも通りで、病人とは思えない元気さだ。仮病じやないか？

鈴も同じことを思ったのか、

「思つたより元氣そうだな」

と言つた。

舞はわざとらしく咳払いをし、上体を起します。

「ま、咳がひどいだけで、熱とかないし。朝食とらなかつただけで、瑠璃とお母さんが休め休めつてつるさんだもん」

確かにコイツが食欲ないのは一大事だ。いつ見えて、意外とへばつてるのかもしねり。

「本当に平氣か舞ー？」

鈴は危機感のない声で言い、舞の額に自分の手の平をあてがつた。舞はそれにそつと瞼を伏せる。

……無防備すぎじゃないか？ そりや、コイツ等がどうかなるなんて天文学的数字の確率で有り得ないけど。

「あー、熱はあんまねえな」

「……」

ダメだ、いやつにやつしか見えない。

俺は今更になって、鈴について来たのを後悔した。だつてそつだら?

(こんなのは、拷問だ)

一度視線をそらし、再び舞を見る。服はジャージといつ色^{ムード}皆無なのに。

うるんだ田とか、上氣した頬とか。何より、簡単に触りせんといつが一番耐えがたい。

しばらく凝視していると、視線に気付いたのか、舞は此方に振り返つた。

目が、合ひ。

舞はベッタ舌を出し、すぐにそっぽを向いた。

「……」

ムカついたので、俺は先ほどまで鈴の手があつた箇所にデコポンを食らわせた。

舞は悲鳴を響かせ、鈴は爆笑してた。

決めた。コイツの見舞いなんて、金輪際一生行かない。

第62回戦 休日テート<前編>

きりーつ、れい..

氣の抜けた号令。

ろくに礼もせず、クラスのみんなは鞄をひつ掴んでバタバタと教室から出ていく。

『あー、やつと今週終わつた。帰る帰る』

わたしも同じよう、帰ろうと鞄を手に持つた。明日休みだと思つと、胸が踊る。

「舞」

腕を掴まれた。

振り向くと、青海の姿が。相変わらず何を考えてるか分からぬ表情。

ポーカーフェイスだか何だか知らないけど、その無表情はつくりのみたいで気持ち悪い。

『なにぞ』

腕を払いながら聞く。あ、ちょっとだけ眉間にしわが寄つた。

「明日、クイーン・リアの南入り口に1時集合」

『……は？』

「遅れるなよ」

わたしの返事を聞かずに、言いたいことだけ言って青海は教室から出ていく。

クイーン・リア

最近できた、大型デパートのことだ。食品から家具、雑貨や服屋まで入っている。

(つていうか、は?)

え、ちょ、わたしの意見は聞かないの?

『い、行かないからな! あたしにだって予定あるしー第一なんで休日にまでアンタの顔を見なきゃいけないんだ!』

わたしは振り返らない背中に叫ぶ。

『絶対行かないからな!』

『結局来てるし……』

盛大なため息をついた。

行かないとあんなにも叫んだのに、律儀に待ち合わせ場所に立っている自分が悲しい。

しかも呼んだ張本人がまだ来てないって、どういうことだ。病み上がりだぞわたし。

(も、もしかしてハメられたんじゃ……)

あの腹黒ドSのことだ、充分有り得る。むしろ、そっちの方がが眞実な気がしてきた。

わたしはポケットから携帯電話を取り出し、メールが来てないか確認する。

残念ながら、着信もなければメールフォルダも変化なし。

『つたくアイツ男のくせにあたしを待たせるとは……。チクショー、30分遅刻してやる気でいたのに』

「オイ」

『いやちゃんと来たのはクイーン・リアが久しぶりだつたからはしゃいでたとかじゃないから。楽しみにしてたからとかじゃないから』

「聞けよ」

『「うぬせこなー、ちよつと黙つてー!』

「ふざけんな」

『えつ、つて痛アアアアー!』

殴られた! 頭思っきり殴られたよ!

涙が糸をひきつつも、後ろを振り返った。そこにはわたしを殴った張本人、ドジ魔王の姿が。

『なにすんだ青海! つてか、呼び出したくせに遅れやがって。礼儀がなつてない!』

「お前が無視するのが悪い。それと俺は遅刻してねえ。ジャスト1時だ!」

そう言つて青海は腕にはめた時計を見せてきた。長針は12を、短針は1を示している。

……マジでか。わたしなに先に来ちやつてんだ。ちよつと恥ずかしいじやん。

いやいや、違つた。これはあの……そつ、家の時計が狂つてたんだ。うん、たぶんさつと、いや絶対。

「おー、舞

『だから狂つてたつてんだろーー。』

「なにがだよ。まひ、行くぞ」

『わ、ちょっと待ってよ

さつきとHレーベーターに向かう青海を、追いかけた。

第62回戦 休日テート<前編>（後書き）

次回に続きます。ラブな展開の予感▽

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670b/>

青春ゲーム

2010年10月9日19時21分発行